



アイヌモシリへの旅
高野敦志

目次

夢に見た北海道	1
層雲峡は雲の中	10
オホーツク海の色	14
摩周ブルーは孤高の印	24
目には見えない海の壁	31
すでに始まった追憶	37
ふたたび北海道へ	48
地の果ては青春のるつぼ	53
どこまで行っても天塩川	63
海から突き出た利尻島	70

70 63 53 48 37 31 24 14 10 1

汗と涙の八時間コース
一難去ってまた一難

小樽市内のストーンサークル

記憶にかすむ函館山

いきなり女満別空港へ

地の果ての大自然

トドマツの白い骨

魔の湖を再訪する

釧路川をカヌーで下る

釧路湿原の展望台

空気が澄んでる旭川

静まり返った朱鞠内湖

緑の原野はいずこに

身の毛もよだつ迫力

阿寒湖畔に日は落ちて

サロマ湖は変われど

知床は記憶の果てに

時を止める湖面

釧路湿原は東から

幸福駅に千社札？

余りの寒さに葡萄も冬眠？

札幌人は夜遊びがお好き？

洞爺湖に幻の霊山現る

函館本線の謎

290277269258246240230210198191184168

156151143137134127107102100 94 89 79

五稜郭は和洋折衷
タウシユベツは倒壊寸前？
嵐の迫る阿寒湖で
沈みゆく野付半島
美幌峠から裏摩周へ
工藤裕之の『追憶の鉄路』
あとがき

364358347336328315298

表紙 知床五湖

夢に見た北海道

初めて北海道を訪れたのは、僕がまだ二十一歳の時だった。日本が世界第二の経済大国、日の昇る国と持てはやされていた頃である。時間があってもお金がない大学生で、周遊券を用いた旅だった。夏休みの半分が過ぎた八月末、上野駅に到着した僕は、十九時十分発の青森行急行「八甲田」に乗り込んだ。宇都宮^{うつのみや}辺りで、青函連絡船用の名簿カードを受け取った。早朝に津軽海峡を渡るのに、心構えさせるためだろう。向かい合いう席に座っていた老人は、咳^{せき}をしながら酒を飲んでいたので、いびきをかいて寝てしまった。眠りながら、おいで、おいでと手を動かすうちに、座席の下から何かが流れだした。黄色い水

たまりが迫ってくる！ 旅の初めから何てことだろう。あわてて席を変えた。

シートが直角であるせいで、すぐに背中が痛くなった。駅に着いた電気機関車から、発車する際にガタンとシヨックが来る。そのたびに起こされた。ポーと暗闇を汽笛が響いてくる。その繰り返しだ。一ノ関で岩手県に入ったので、あともう少しかと思ったら、県境に出るのに二時間以上かかった。一戸、二戸、三戸と、いくつ戸があるのか、気が遠くなった。八戸を出ると、ようやく外が明るくなってきた。

青森まで十一時間もかかった。プラットフォームを下りると、陸奥湾に向かつて歩いた。レールは港の先に続いている。前方

に見えるのは下北半島。どの船に乗るのか探した。八甲田丸は船体が錆びつき、衝突によるものか、一部が凹んでいる。

銅鑼が鳴って出港。「螢の光」が流される。陸奥湾を抜けて、津軽海峡に入った。日本海の方から、横並びの波頭が近づいては崩れる。人々は船室の畳に腰を下ろすと、談笑したり飲み食いしたり。単調なエンジンの音ばかりが響く。青函連絡船が廃止された現在、かつて本土からは「蝦夷地」、道民からは「外地」と呼ばれた北海道との隔たりは、すでに失われてしまっている。目に見えない境界を越える感覚は、船で海峡を渡った人間にしか分からない。

四時間弱の船旅が終わった。港にはカモメが飛び交っている。函館駅に向かい、室蘭本線經由の網走行特急「おおとり」に

乗り込む。ディーゼルカーだから架線がない。風景がすっかりしている。電化しない方がいいんだ。大沼駅を通過すると、砂原支線に入った。

青く映える沼の脇を過ぎると、雄大な緑の大地が眼前に広がる。正面に晩夏の光を受けて輝く内浦湾、左方にそびえるのは駒ヶ岳。ゆつくりカーブして進む列車は、車体を傾かせながら、野性的だが穏やかな、パノラマの光景を満喫させてくれた。北の大地が見せた贈り物は、大沼公園経由となった現在の下りでは見られない。

内浦湾は噴火湾とも呼ばれる。日本人（和人）が蝦夷地に移住を始めた江戸初期、寛永年間には駒ヶ岳が大噴火を起こし、

山の一部が崩れて内浦湾に流れ込み、大津波を引き起こした。有珠山も寛文年間からしばしば凶暴な噴火を繰り返し、麓の村を火砕流で焼き払った。

また、支笏カルデラの南に生じた、平坦な中央火口丘に、溶岩円頂丘が形成された樽前山は、世界的に珍しい三重式火山だが、ひとたび大噴火すれば、溶岩円頂丘ごと吹き飛んで、沿岸の苦小牧まで火の海に変えてしまう。噴火と切っても切れない湾は、そんな歴史とは無縁な顔で、数百羽のカモメの楽園となっている。

札幌に到着すると、お決まりのコース、ビルの谷間に埋もれた時計台を眺めた後、大通公園へ向かった。故郷の岩手を出た石川啄木が、一年足らず過ごした北海道だが、ここで残した歌

が石碑に刻まれていた。

しんとして 幅広き街の 秋の庭の 玉蜀黍たうもろこしの 焼くにほひ
よ

その夜は田山公園まるやまに近い、中央区宮ヶ丘のユースホステルに泊まった。人見知りする僕だったが、そこでは互いに知らない者同士、ゼロからのコミュニケーションだ。黙っていたら何も始まらない。声をかけ、旅の情報を交換する。そのうち、気が合う相手とも出会えるだろう。

翌日は札幌駅周辺を見物した。赤煉瓦れんが作りの北海道庁旧官庁

は、前面に池を構えた厳めしい建物で、ここが屯田兵とんでんへいや囚人を指揮して、アイヌ人しか住んでいなかった内陸部を、組織的に開拓していったのである。

北大植物園は、北海道大学のキャンパスから離れた中央区北三条西にある。亜熱帯に生育するバナナやパイヤ、壺状の落とし穴で虫を捕らえるウツボカズラ、粘液で虫に巻きつくモウセンゴケなどの食虫植物、小笠原に分布する樹木化したシダなどを眺めた後、博物館でヒグマ、シカ、エゾオオカミ、キタキツネなどの剥製はくせいを見て回った。

北方民族資料室には、明治初期に収集されたアイヌ人の民族衣装や狩猟の道具、イヨマンテなどの祭礼の写真が展示されている。アイヌ人は熊を神としてとらえ、祭りで殺すことで肉をい

ただき、本来の神の国にお帰りいただくという信仰を持っていた。白老しろおいや登別のぼりべつを回る余裕がないときは、ここに来ればかつてのアイヌ人の暮らしぶりを、目の当たりにすることができる。北海道大学のキャンパスは、北区北八条西にある。広大な敷地は芝生が広がり、公園か何かのようである。「少年よ、大志を抱いだけ」で有名なクラーク博士の前に立つ。僕は前年、早稲田大学の友人から聞いた話を思い出した。三人で旅行していたというのだが、そのうちの一人がふざけて、博士像の鼻にタバコを突っ込んだというのだ。

彼はすべての権力は敵だと考えていたから、内村鑑三うちむらかんぞうや新渡戸稲造べいなぞうを啓蒙した博士も、揶揄やゆの対象にしてしまったのである。それに対して、「そんな不遜な態度は許せない」と一人が怒り

出し、親友だった三人は仲間割れしてしまったという。僕の属したサークルにも、革マル派の遺品ともいえるべきヘルメットが、まだ保管されていた時代である。尾崎豊おざきゆたかの「この支配からの卒業 闘いからの卒業」という歌詞に共感できた世代のエピソードである。

層雲峽は雲の中

札幌駅で弁当「えぞ賞味」を買った。蟹かに、イクラ、鮭さけ、アワビなどが寿司飯に載っている。こんなうまい駅弁はないと思つた。特急ライラックで旭川あさひかわへ。石北本線せきほくの急行大雪一号は、一両のディーゼルカー、窓は開け放たれて扇風機が回っている。しかも、自動車よりも遅い。三十分余りで上川かみかわ駅に着き、バスで層雲峽そどうんきょうに向かった。

ユースホテルに宿泊すると、相部屋だった同志社大学の学生と気が合った。二段ベットのの上から顔を出し、「早稲田の学生か」と言いながら、にやりと笑つた。洗濯の話をする、「汚れた服は小包で自宅に送る」と澄まし顔。関西弁でしゃべるお

坊ちゃんタイプの青年だった。

翌朝、空は曇っていたが、二人で自転車を借り、小函こぼこ方面に向かつてサイクリングした。道を下っているはずなのに、やけにペダルが重い。左側には縦に筋の入った絶壁が、屏風のように延々と連なる。壁面からしぶきを上げる錦糸きんしの滝まで行って、Uターンすることにした。

振り返って気がついた。ずいぶん坂を上ってきたんだな。これはよくある錯覚である。直線のだらだら坂だと、前方が下つているように見えてしまうのである。記念撮影して、あとはひたすら下っていく。

ユースホテルに戻ると、彼は「達者でな」という言葉を残して去つた。僕は停留所まで見送つた。ひとたび親友のように

語らっても、「一期一会」と割り切つてさりと別れる。旅をして高揚しているからこそ、意気投合したのであって、後日再会してもしらけるだけである。いい思い出とするためには、連絡先も訊かない方がいい。これがユースホステルでの出会いと別れである。

層雲峡の温泉街から、ロープウェイが延びている。リフトを乗り継いで、黒岳に登ることにした。標高一九八四メートル、その年の数字と同じ高さなので、登山を推奨していたのである。北海道の山は二千メートルでも、本州の三千メートル級に登る心構えが必要である。それなりの装備が求められるという。

山道は急だった。岩石が転がっていて歩きにくい。幸い、熊

は出てこなかったが。九合目を過ぎる頃には、小雨が降ってきた。山頂は雨。近くの人に写真を撮ってもらったが、雲の中にいるようで何も見えない。

すぐに下山した。悪路になっていた。滑る、滑る。二回も転んでしまった。ロープウェイの山上駅にたどり着き、山菜と山芋が入った黒岳そばを食べる。体が温まってとてもうまい。絵葉書を買った。ユースホステルに戻り、腰を下ろす。また一人になってしまったのを実感した。

オホーツク海の色

網走行きの特急「おおとり」に乗っていた。奇しくも、僕が函館発で乗ったのと同じ時刻の特急である。最初の状態にリセットされた感じである。駅弁を食べている。層雲峡を一緒にサイクリングした青年のことを思い出した。

絵葉書を取り出すと、家族と友人に手紙を書いた。学生時代、長旅をよくしたから、その間に葉書を出すのを習慣にしていた。旅の香りを届けるには、帰ってからのおみやげよりよほど新鮮だから。

いつしか居眠りしていた。今日の出来事は現実感が失われていた。終点に到着したのは午後十時。駅前のビジネスホテルに

泊まる。何でユースホステルを予約しなかったんだろう。部屋に浴室も洗面台も、トイレもない。

翌朝、サロマ湖に向かう。アイヌ語の「サル・オマ・ペツ」(葦が生える川)に由来する。網走駅には0番線ホームがあった。廃止間近だった湧網線のディーゼルカーが、今入線してきた。

トコトコトコトコ、小走りするような軽快な音を立てて、ガラガラ車両は走っていく。右側に能取湖の湖面が見えてくる。サンゴ草ではんのもり煉瓦色に彩られている。ゆるやかなカーブを進みながら、あざやかな光景をさりげなく見せる。家もまばらな平原を、孤独なランナーのように走っていく。数年後に

は消されてしまうというのに、走ることだけ考えて。

常呂駅とじろで下りた。ホームは路面電車の駅のように低い。郵便局で絵葉書を出した。バスで栄浦に出る。パンとジュースを買って、サロマ湖の湖口まで歩こうと考えていた。ところが、湖に向かう人の姿はない。

アスファルトの上を逃げ水が見える。迷彩服を着たエリート風の青年とガールフレンドが、自転車で並んで過ぎていく。

「頑張ってください！」

悪気はないんだろうが、何だか自分が見劣りしている気がした。いまだにサロマ湖の水面すら見えてこない。アイヌ人が残した常呂遺跡を右に進んでいく。

サロマ湖の牡蠣かき養殖の浮きが見える。鳥の形をしていると思ったら、一羽が飛び立った。すべてがカモメだった。鍋沸とうふつというアイヌ語地名は、湖の口を意味するということ。東端に位置する排水路は、昭和の初めには閉塞したとのこと。したがって、丘に隔てられてオホーツク海はまだ見えない。

上空をトビが飛んでいる。凧たこのように両の翼に海からの風を受け、上昇気流に乗ってホバリングしている。虫の音、花咲いたまま枯れ、硬直した茎。もう夏は終わったのだ。丘を登っていこう！

あつ、口から声が漏れた。水の色が違う。北の海は緑がかつて、見るからに冷たい感じだ。うねりは弱いものの、吹きつける風はかなり強い。波打ち際で一気に崩れる。遠浅ではないん

だろう。ピンクの花を咲かせたハマナスは、花びらも花托もひからびていた。すでに朱の実がなっているものもある。砂防柵の内側には人の姿がない。はるかに続くアスファルトの道。

雲が広がりつつあった。波は風いできたが、潮騒は耳について離れない。水平線近くまで、雲が垂れ込めている。雲と海の狭間に青い幻が現れる。対岸など見えるはずがないのに。浜に目を落とすと、タンポポが咲いている。カモメが目の前を横切り、黄色い嘴が宙を切る。

湖の方を眺めると、向かいに漁村が見える。中央に錆びたクレーンが立っている。路面を千鳥足の小鳥が楽しげに跳ね回る。背後から何かが近づいてくる。エンジンの音が、そして急ブレ

ーキ。あつ、トラックか。

「おい、乗れや」

ヒッチハイクなんかしたことがない。北海道の人は心も広くて、ワイルドなんだなあ。向こうが疑われないんだから、こっちも疑っちゃいけない。乗り込むと、発車！ 運転手は言葉が少ない。でも、誰もいない道をとぼとぼ歩く若い奴がいたら、放っておけなかったんだな。

水門のところまで下ろしてもらった。しばらくして、栄浦で会った迷彩服の青年が、続いてガールフレンドが自転車で追いついた。

「また、会いましたね」

青年は名古屋から来て、サロマ湖のユースホステルに泊まっ

ているとのこと。作りが豪華な点が気に入ったらしい。

「窓からの眺めもステキ！」

ガールフレンドも微笑ほほえんでいる。水門の方から、営林署のおじさんが寄ってきたので、青年がいくつか質問した。

「冬になるとね、ここは流水が三メートルも五メートルも押し寄せるんだよ。この先のワツカの森は、植林したもののなんだけど、キタキツネ、リス、シカも住んでいるんだ。十年ぐらい前はこの水門が出来て、サロマ湖の水質が改善してね。それまでは湖の奥は水が腐ってしまったんだよ。今獲れるのはチカ、ワカサギみたいな魚かな。ホタテの養殖はサロマ湖で二年、その稚貝を外海にばらまいて二、三年はかかるんだ。ウニ、ツブ貝、エビ、ホタテなんかは密漁されないように、監視しているんだ

けどね」

コンクリートの水門の内側は、凹凸おうとつのある鉄板に覆われていて、オホーツク海から潮が流れ込むたびに、ハタハタハタハタと音を立てる。水門の橋を渡り、ワツカ自然休養林に向かった。営林署のおじさんの姿はもうない。あの二人連れは橋のたもとで、肩を並べて湖を見つめている。

薄暗い森の奥を覗のぞき込む。砂州の向こうにある海も見えない。聞こえるのは、草を踏む自分の足音ばかり。キツネやシカはどこにいるんだろう？ 背後で何かの気配がした。先ほどの青年とガールフレンドは、三脚を立てて記念撮影している。片づけて荷物をまとめ、並んで自転車にまたがると、一本道の先に吸

い込まれていった。

水門を通り過ぎて、帰路を目指すことにした。日は西に傾きかけている。青い球体が見える。地球かと思つた。それなら、ここはどここの星なんだ。そんなはずはない。見上げると、月の姿は大空になかった。

丘の上を歩いている。沖に白と朱の浮きが漂っている。足元の枯れ草に杭くわが打ち込んである。先端にはピンクのテープが巻きつけられている。墓標ではない。杭には「さけ定置……」の文字が見える。海からの目印なのだろう。とぼとぼと歩くうちに、トラック二台に声をかけられた。時間が余っているからと、今度は断った。

ワツカ入口まで歩いて、網走バス十七時五分に乗ったが、お

客は僕ただ一人。常呂駅に戻り、線路を渡る。コンクリートに埋め込まれた二本のレール。小屋の端から覗くオホーツク海。再びここを訪れることがあっても、その時はここに駅はないだろう。

摩周ブルーは孤高の印

翌朝、網走駅を出ると、釧網本線はオホーツク海に沿っていく。斜里駅は知床半島の世界遺産登録に向けて駅名が知床斜里となったが、何かしっくりこない。そういえば、弟子屈駅も摩周駅となったが、駅名にも歴史があつて、人々の思い出に刻まれているのだから、観光振興のためとはいえ、むやみに改名すべきでない。

川湯温泉駅も、当時は川湯駅と呼ばれていた。川湯温泉のバスターミナルから、屈斜路湖まで歩くことにした。道は広いのだが人影はない。逃げ水が見える。「熊に注意」という看板。時折、フルスピードで車が過ぎていく。北海道の大地をこうし

て踏みしめてこそ、本当の旅と言えるんだとうそぶいてみる。もちろん、誰も聞いていない。三十分で屈斜路湖に到着。林の端から湖面を撮影する。

バスに乗った。摩周湖に向かう途中、硫黄山で途中下車した。アイヌ語でアトサヌプリ、裸の山というだけあつて、溶岩が剥き出しのまま固まった山肌には、草木の一本も見当たらない。移動販売の車が出ているので、ソフトクリームを買ってみた。乳脂肪がたっぷり濃厚な味がする。食べながら、硫化水素が噴出し、黄色く染まった岩肌を眺めていた。ここは日本一の広さを誇る屈斜路カルデラの内部で、硫黄山も破局的な噴火の後に生まれた屈斜路カルデラの出張所。要するに、火口の中を移動してきたわけである。

摩周湖という地名は、アイヌ語の「マシ・ウン・トー」（カモメの湖）に由来すると言われるが、もちろん、カモメなど生息していない。かつては世界一の透明度を誇ったが、現在はバイカル湖に首座を譲り渡している。

カルデラ湖である摩周湖は、七千年前の破局的な噴火で、成層火山の山頂が吹き飛ばされた窪みに水がたまったもので、縄文時代に生まれた歴史の浅い湖である。しかし、その美しさには見る者の魂を奪う力がある。

バスで中腹まで登ったところで、突如摩周ブルーは現れる。中腹より上が陥没したに過ぎないので、いくつかの山が吹き飛んだ屈斜路カルデラと比べれば、規模は小さなものである。

とはいっても、富士山の貞観噴火じょうがんの十九倍というすさまじい噴火だったとされる。過去の激しさと現在の静寂は、相容れないように思えるが、山体がふいに途切れて、巨大な湖が出現する異様さは、破壊的な威力の痕跡を物語っている。

摩周第三展望台に到着した。もし時間の余裕があるなら、人気ひとけの少ないここで摩周ブルーを堪能たんのうして、次のバスでみやげ物店のある第一展望台に移動した方がいい。写真で紹介される美しい眺めは、第三展望台からのものである。

正面の山はカムイヌプリ（摩周岳）、絶壁の下には深い青が映える湖面。中央にカムイツシュ（神のような老婆）と名づけられた小島が覗く。湖面の異様な身震いは、湖底で続く火山活動によるものか。湖面に降り注ぐ光は、ある深さまでは通り、

その下は深い闇が支配する。岸の縁だけは木々の姿が映り、ほのかに緑がかっている。突き出す山は砕けた岩が剥き出しで、青い水面の鏡に似姿を映している。音のない世界、耳をそばだてても虫の声ばかり。一言で言えば、息を呑む美しさ。

第一展望台に移動した。カムイヌプリの山下から、三つ又に分かれる線が水面に延びている。一本はカムイツシュにつながり、あとの二本は、手前の湖岸、カルデラのはるか彼方に延びている。カムイツシュを守っているのだろうか。ここからはカムイヌプリが、青い水面に映る姿は見られない。

摩周湖には流れ込む河川はなく、常に水位は変わらない。湖底から地下水が湧いてくるのだろうか。波紋が幾重もの弧を描い

て、青い水面を伝っていく。紅葉の始まりかけた木々に囲まれた湖は、碧空が映し出された鏡のようである。

平野には灰色の雲が垂れ込めているが、カルデラの真上には、深い青とは対照的な明るい空が広がっている。湖の中ほどのカムイツシュは、アイヌの神話によれば、酋長に孫を殺された老婆が、永遠の安らぎを求めて島となったものだという。島に渡る人があると霧や雨になるのは、孫が来たと思って流す老婆の涙のためだとされる。

霧の摩周湖と呼ばれるくらい、カルデラは霧に閉ざされていることが多い。湖面一杯に広がるガスから、カムイツシュが顔を出しているさまは幻想的だが、むしろその方が摩周湖のありふれた顔である。深い青をくまなく見渡せるのは、週に一度く

らいだという。そのため、摩周ブルーを目にした者は婚期が遅れる、という伝説が生まれた。自分は一人で生きていくのかも
しれない……。

バスで弟子屈駅に向かった。今は摩周駅と呼ばれているが。釧網本線に乗った。釧路湿原は車窓から眺めるにとどめ、釧路市内春採湖畔のユースホテルに泊まる。同室には僕のことを、黒岳で見かけたという人もいた。一人旅での語らいは、うちこもりがちな思いを癒してくれた。

目には見えない海の壁

日本で最も東に位置する駅、それは根室本線の東根室駅である。列車は狭い半島に入ってきた。駅を出ると大きくカーブして、次が終点の根室駅。釧路を出て各駅停車で、約三時間かかった。現在、この区間は花咲線と呼ばれている。

根室駅は殺風景である。これが幹線の終点とは思えないほど。稚内や網走のにぎわいとは対照的ではないか。バスに乗って納沙布岬さつぷみさきに向かう。到着したのは、午後一時四十五分。食堂で遅い昼食。かに飯を食べる。

岬に立った。肉眼でも水晶島や、手前の貝殻島の灯台は見える。北方館望郷の家の二階に上がった。望遠鏡が設置してある。

やや霧がかかっているが、くなしりとう国後島の泊山やちやちやだけ爺々岳が、雲間から覗いている。正面の平坦な島が水晶島で、監視塔の窓まで見える。海岸線の崖、打ち上げるしぶき。貝殻島にはカモメが群れているが、一羽一羽の姿までとらえられる。手前の海峡では、ソ連の警備艇が監視を続けている。

座礁した日本の貨物船が、船尾を天に向けたまま、錆びた船体を傾けている。波は荒い。深い海がカモメの飛び交う数メートル手前で、急に浅くなるのだろう。

鎌を振り上げた波頭が、地崩れのように太平洋から流れ込み、目には見えない壁に沿って、狭い海峡に川のように注いでいる。終戦時にロシア人から追われて、このラインを越えてきた日本人は、もう故郷の島々に戻ることは許されなかった。

日本の漁船が目に見えない壁に沿って、ぎりぎりの波間を縫っていく。〇〇丸という漢字まで見える。ゆるやかなうねりに乗って、船は進む。目と鼻の先に透明な壁を立てられ、封じ込まれてしまったようなものだ。その向こうは日本の行政権が及ばないと思うのは奇妙だが、これは動かせない現実なのだ。

カモメは嘴を風に向け、翼を広げて風を切る。おどけた声を出して、岬近くの電柱に留まる。下の海では小舟が、潮の流れに翻弄されている。昆布は波打ち際に打ち上げられ、よじれた茎がうねりにもまれている。

じやり砂利の上に干されているのも昆布。辺りは海藻の匂いが立ちこめている。とりわけ、乾燥室の小屋の排気口から。生干しに

なつたところで、人為的に乾燥させているらしい。これらの多くは、ソ連政府の許可を受けて、貝殻島周辺から刈られてきたものだった。

僕は望郷の家で見た、江戸時代から行われた千島開拓の展示を思い出した。島を奪われた人々のことを考えれば、返還は一日も早く実現されなければならない。根室市内で目にした「島を返せ」という看板。返還を願う歌声が耳についてしまった。

望郷の家の壁には、ソ連軍侵攻の経緯が図示されていた。連合国側はヤルタ密談により、ソ連の日本への参戦を決めていた。それが一九四五年八月八日、ソ連軍の対日宣戦と日ソ中立条約の一方的破棄につながる。ソ連はその見返りに、南樺太と千島列島ばかりでなく、留萌るもいから釧路以北の北海道の割譲も画策し

ていた。

日本がポツダム宣言を受諾すると、ソ連軍は南樺太と北千島の得撫島うるつぶとうまで占領する。ところが、まだ南千島にアメリカ軍が到着していないと見るや、南千島の国後島・択捉島えとろふとうばかりでなく、本来は北海道に属する歯舞諸島と色丹島しこたんとうまで占領してしまった。北海道の北半分割譲はアメリカ軍に拒否されたが、敗戦時に北海道まで失う危険があったのである。この展示を見ていた男性が、憤然として言い放った。

「大砲、ぶっ放してやりたいな！」

しかし、ここで血気にはやつても事態は改善しない。ひとたび戦争を起こし、敗戦すれば人命ばかりでなく、領土を強奪する口実を与えてしまう。愛国心を高揚するだけでは、問題は解

決しないのである。

ソ連政府がロシア政府となっても、北方領土にあつた日本人の街はずでに壊され、ほとんど痕跡は残っていない。粘り強く交渉は続けていくべきだが、日本人が自由に北方領土に行き来できる環境を、画策する方が有効なのではないか。ヨーロッパのように、身分証明書さえあれば、ビザなしでも国境を往来できるように。

すでに始まった追憶

僕のポケットの中には、セリーヌの『夜の果ての旅』が入っていた。その前書きに「旅は想像力を働かせる」という言葉がある。たしかに、旅をしている間は、僕の感覚は数倍きめ細くなり、目にするもの、耳にするものへのあふれる思いに満たされる。

旅の終盤が近づいてきた今、日記をつづりながら出会ったことを、記憶の中にとどめようとしていた。魂の中でイメージが定着したとき、はじめて自分が旅すること生きていたのを感じる。その意味ですでに、旅を追憶していたのである。

根室からの列車で、僕は半分は眠っていた。九月初旬の午後

六時半だが、本土の東端は、すでに闇が支配していた。北海道らしい、野性的な風景とはもうお別れだろう。自分はまた本州に近づいていく。

釧路発の夜行列車が出発した。石勝線経由の札幌行である。足下はヒーターで暖かい。僕はこの旅の出来事を、夢うつつの中で反芻していた。

いったん札幌に出た後、室蘭本線の白老しらおいで下りた。ここにはアイヌのコタン（村）がある。地名は「シラウオイ」（アブの多い所）に由来する。このコタンは、ポロト湖という湖のほとりに出来たことから「ポロトコタン（大きな湖の村）」と呼ばれてきた。

ここはアメリカ先住民の集落と同じく、すっかり観光地化されており、アイヌ古来の家（チセ）が並び、アツシという紺地に白い線の入った伝統的な衣装を身にまとったアイヌが、口笛とムツクリ（口琴）に合わせて踊りを見せてくれる。

といっても、日本人がもはや丁髷ちよんまげを結っていないように、現在のアイヌはすっかり和人（シヤモ）に同化してしまった。アイヌが小学校に上がって、学校でアイヌ語を話す、それだけでいじめの対象とされた。そこで、アイヌは子供が不憫ふびんだからと言うので、家でもアイヌ語を使用するのをやめてしまった。

沖縄において、琉球語を使っただけで、首に「方言札」をかけられたため、若者が話せなくなってしまったのと、同じ現象が起きていたのである。しかも、アイヌの場合は大多数の和人

に囲まれた、少数民族であったために、差別はより過酷な形で現れた。

室蘭本線の登別駅で下りた。地名はアイヌ語の「ヌプルペツ（色の濃い川）」に由来する。バスで登別温泉に行くと、温泉街の入口で硫化水素の臭いがした。地獄谷は植物がない荒涼とした谷間を、整備された歩道が延びている。噴煙に関しては、川湯温泉近くの硫黄山（アトサヌプリ）の方が凄まじかった。ロープウェイでクマ牧場に向かう。餌をやると、二本足で立って、前足を叩いて催促する。中にはのけぞって後ろ足を叩き、お尻まるだしのクマもいる。

「ちよっとだけよ、あんたも好きねって言うてるよ」

近くのおじさんが、ザ・ドリフターズの下ネタをつぶやくと、周囲にいた人たちがどっと笑った。当時の加藤茶の話にしても、今の若者には通じないかな？

クマの芸当も見た。玉転がし、自転車こぎ、火の輪くぐり、棒渡り、玉投げ、数当て、色当てなど、どこまで分かっているのか。でも、動物って意外に賢い。自分が賢いと思って、実は愚かなのは人間の方かもしれない。

展望台からは倶多楽湖が見える。アイヌ語の「クツタル・ウシ・トー」（イタドリが生える湖）が語源である。カルデラ湖である。ユーカラの里では、チセ（家）の中でアイヌの老夫婦が座っていた。西洋人のように彫りが深いというけれど、ちよっと見ると東北辺りの老人とあまり変わらない。おじさんの方

は無口で、おばさんが話をしてくれた。

「本州の人は、アイヌはクマと家の中で暮らしていると思ってるようだけど、なんぼアイヌだつて、クマとは暮らしませんよ。私は火事で戸籍が焼けてしまつて、昭和三年生まれなのに、いい加減な戸籍作られて、昭和四年生まれになつてるんです」

苦小牧市営バスで、ウトナイ湖畔にあるユースホステルに泊まった。ウトナイ湖は野鳥のサンクチュアリとして知られているが、白鳥が訪れる十一月はまだ先のこと。慶応大学の学生と意気が合った。ペアレントのおじさんに、「どうせ坊ちゃんだから、ベットの片づけもできないんだろう」と言われ、失礼だと憤激していた。翌日、出立する前に、函館で再会して一緒に

帰ろうと約束した。

洞爺駅からバスに乗り換えた。湖畔でニジマスとシシャモの寿司を食べていた。洞爺湖もカルデラ湖で、十一万年前の破局噴火で大火砕流を吐き出した後、陥没して巨大な湖となった。湖面中央の中島は、溶岩ドームの名残であり、エゾシカが息すること知られている。

足こぎボートがあつたので、ちよつと乗ってみることにした。本当は二人乗りなので、一人だと傾いてしまい、まっすぐ前に進まない。湖水は深みのある青で、波立ってはいないものの、横風を受けるとゆらゆら揺れる。中島に近づくなと思ひも寄らない。ジグザグに進むしかなかった。

遊覧船が近づいてきた。幾重ものさざ波が押し寄せてきた。

ボートは激しく揺れる。ハンドルを切って、巨大な船体からようやく逃れた。借りたボート屋が見えてきても、なかなか横付けできない。

大沼公園に向かっていた。座席は空いておらず、車両の連結部近くから、窓の外を眺めていたのだが、駒ヶ岳が行きと同じように、左側に見えるわけが分からなかった。どうやら砂原支線は通らなかったのだ。あのダイナミックな大パノラマは、目にするのができないのか！ 上りは本線しか通らないのだった。

その日は大沼のユースホテルに泊まった。翌朝、沼の周囲を一人でサイクリングした。多くの島、突き出た半島があり、

遊覧船も就航していると、ペアレントのおじさんが教えてくれた。島のいくつかには橋で渡った。自転車を引いて坂道を上っていくと、三〇三メートルの頂^{いただき}まで十五分足らずで到着した。内陸の松島といった感じで、北海道の旅もいよいよ終盤戦に入ってきたのを感じた。

夕方、函館山の山頂まで、ロープウェイで登ってきた。日没までには少し時間があつた。ここは火山島が砂州で亀田半島とつながったので、函館の街が平坦なのは、かつては海峡だったからである。高層の建築を除けば、へらでつぶしてしまったようにぺちゃんこだ。

函館港内には、わずかのさざ波も立っていない。輝きの衰えた光を浴びる海面に、出港した船が二筋の物憂い筋を描いてい

く。風はやや強いものの、津軽海峡の波は穏やかで、日没を迎えると点在するイカ釣り船から、漁火の明かりがともり出す。

午後六時過ぎ、ようやく函館の夜景が始まる頃、僕は青函連絡船に乗るために、函館山を下りることにした。しかも、お金をけちって車道を下りた。街灯もない蛇行する山道を、観光バスが次々に上ってくる。次第に闇が辺りを支配し、対向車のヘッドライトに目くらましを食らう。何て無鉄砲だったんだろう。函館駅でおみやげを買い、連絡船の待合室に向かう。ウトナイ湖で知り合った慶応大学の学生が見つからない。やむを得ず、十和田丸に乗り込み、食事を済ましたところで、彼と出会った。向こうでも僕のことを探していたそうだ。

いよいよ、北海道ともお別れだ。二人で甲板に出た。橋幸夫はしゆきお

の「絆きずな」の歌声が響く中を出港。函館山の横の暗い海を、連絡船はゆっくり進んでいく。それから、東北本線の急行「八甲田」の中でも、二人は旅の間の出来事や、これからの人生について語り合った。

上野駅には午前十一時に到着。新宿駅の中華レストランで乾杯した。別れ際に彼は「いつ会えるか分からないけれども、その時は……」と言った。それから三十年経たったが、ついに会うことはなかった。

ふたたび北海道へ

僕が初めて北海道を訪ねてから、七年の歳月が過ぎていた。すでに二十八歳になり、モラトリアムで人より長かった学生時代も、二年前に終わっていた。曲がりなりにも就職して、外国人に日本語を教え、人の相談にも乗れるようになっていた。

旅立ったのは、八月中旬、残暑がまだ厳しい時期だった。今回も上野駅から急行「八甲田」に乗ったのだが、車内は小ぎれいで快適になっていた。僕は雑誌『宝島』の別冊『夢の本』を携えていた。銀河鉄道に乗車している気分だった。これからの旅が自分の人生にとって、一つの転機になるのではと、密かに心当てにして。

初めて北海道を旅した思い出は、僕にとっては美しい夢だった。大学生の頃の期待と不安が入り交じった感覚は、今となつては懐かしい。もう戻れないことは分かっているから。当時の旅の場面が、断片的ではあるが、鮮明によみがえってきた。余りにもありありと見えるので、今すぐにも戻れそうな気がするのだが……。

青森駅に着いた。前回との大きな違いは、青函連絡船がすでに廃止されていたという点である。海を渡るという感覚が失せたことで、過去との断絶を改めて感じさせられた。そのまま津軽海峡線に乗り換える。車窓から眺められるのは水田ばかり。海が少し見えた後、いよいよ世界最長の海底トンネルに入る。北海道側の地上に出るまで四十五分かかるらしい。

ゆっくりとした下りを、列車は猛スピードで滑っていく。津軽海峡の真下を通過している。海面下百五十六メートル。トンネル進行方向左側には、発光ダイオードによるアニメーションが現れた。ジャンプするウサギやばたく鳥などが。

トンネルを出てしばらくすると、車窓から函館山が見えてきた。列車に揺られながら再会するのも、時の流れを表しているのか。やがて、新幹線が走ることになるわけだが、それはこの時点から四半世紀後のことである。

函館本線は電化されていない。ただ、今回は砂原支線ではなく、大沼公園經由の本線を通った。あの野性味あふれるパノラマは、記憶の中でたどるしかなかったのである。とはいえ、架

線とか視界を遮さえぎるものがないのはいい。ディーゼルカーは特急でも、とりわけ速いわけではないが、スピードを上げるとエンジンのうなりが伝わってくる。一生懸命走っているのが分かる。

札幌駅に着いたとき、青いタイルの壁に見覚えがあった。前回、この駅舎に向かって「また戻ってくるからな」と語りかけたものだが、それから早七年も経ってしまったのか。感傷に浸る間もなく、電光掲示板にソ連ゴルバチョフ大統領失脚のニュースが現れた。ソビエト全土に向こう六ヶ月非常事態宣言が発令された。すでに戦車がモスクワ市内を走り回っているらしい。

旅行気分が吹っ飛んでしまいそうになったが、情勢の成り行きは随時入手することにして、札幌市立ライオンズユースホス

テルに向かった。ここは札幌オリンピックピックの際、選手の訓練所として建てられたものだそう、外見も立派だったし、料理もおいしくサービスも行き届いている。

地の果ては青春のるつぼ

札幌発網走行のオホーツク三号に乗っていた。ゴルバチョフ失脚後、モスクワ市内では、戦車と市民とのにらみ合いが続いている。ラトビア共和国では、すでに軍の発砲による死者が出ている。ソビエト連邦がまさに、崩壊に向かいつつあった。石北本線に入ると、空は雲が広がってきた。車窓を眺めながら感じたのは、人間が保つべき慎ましさだった。人間は大地の一部を切り開いて町にしたが、町と町の間は延々と続く林と草原である。

網走からは釧網本線に乗り換えた。線路の手前はジャガイモ畑や、牧草地が広がっている。冬の間の飼料にするため、牧草

をロール状に巻いたのが、黄色い草原に点在している。その奥には手つかずの林が、ナイフで切られたように一直線に連なっている。

斜里駅はまだ、知床斜里と改名されていなかった。前回の旅行では足を伸ばさなかった知床半島に、これから向かうところだった。ウトロまではバスに乗った。途中、オシンコシンの滝の横を通った。アイヌ語の「オ・シュンク・ウシ」（川下にエゾマツが群生するところ）がなまったもので、急峻な崖が迫ったバス通りから、偉容の一端がうかがえる。

「知床夕陽のあたる家」ユースホステルに泊まった。夜はバーベキューだった。山盛りの魚とイカ、カニ、もう一皿には牛

肉と野菜をいっぱい載せ、いくらと味噌汁にご飯。デザートはチーズケーキにメロンと、食材の豊富さとおいしさに我を忘れた。

観光について説明を受けた後、僕は同じ部屋に泊まった青年二人と、ユースホステルが主催する、知床峠での星見ツアーに参加した。バスで峠の駐車場まで行き、毛布を敷いて仰向けに寝るのである。

まだ月が出ていたので、夜空はかなり明るかった。天体望遠鏡を使って、まず月のクレーターを見せてもらった。月が山影に沈むと、空は暗さを増して、光の弱い星々も藍色のバックから浮かび上がってくる。天の川の形もぼんやりうかがえた。星空の説明を聞くうちに、いい気分になっていき、土星の輪を見

せてもらったあたりで、宇宙と一体化してしまった。

翌朝、僕はまだどこを回るか迷っていた。同室の青年たちの一人は、雲行きを心配してバスで知床五湖へ行くと言っていた。もう一人はレンタルバイクを借りて出かけた。

僕はマウンテンバイクを借りることにした。下の停留所には、知床五湖へ向かう彼がいた。向こうで待っているよと言ってくれた。先に出発したのだが、すぐにバスに追い抜かれてしまった。とにかく、上り坂が多くてつらかった。きつい坂よりも、いつ果てることもなく続くのだららの方に気が滅入った。また、猛スピードで下っていくときも、帰路のことを考えると憂鬱ゆううつになった。

頭の中では、ウェス・モンゴメリーのギター演奏による「酒とバラの日々」が響いていた。ずいぶんおしゃれな題名なのだが、アル中で引き裂かれる夫婦をテーマにした映画音楽で、中毒から抜け出せない妻に対する切々たる思いが、飾らない真摯しんしなメロディーから感じられた。今の自分の気分にぴったりだった。

途中、舗装されていない道もあった。彼が待っていてくれるから申し訳ないとも、待ちきれずに行ってしまうのではないかとも思った。知床五湖に到着すると、みやげ物屋の前で彼は待っていてくれた。もう五湖は見ってしまったとのこと。でも、再会の約束が果たせたのはうれしかった。

僕は一人で知床五湖を巡ることにした。鬱蒼うつそうとした森の中に、

鏡のような湖が点在し、天気が良ければ知床連山を水面に映しているはずだった。周囲にはヒグマやエゾシカが生息し、運が良ければ（？）、姿を間近に見られるということだった。

しかし、空はどんよりして、おまけに小雨までぱらついてきた。途中の道で、バイクで出かけた彼の方と出会った。みんな行くところは似たり寄ったりなのだ。もしかしたら、知床大橋まで足を伸ばすかもしれない、と洩らしていた。

僕は意を決して、マウンテンバイクに鍵をかけると、大橋行きのバスに乗り込んだ。その先はさらに悪路だった。曲がりくねった道は、開鑿かいさくしたばかりの林道といった観があった。バスでも通行するのがきつい道だった。脇からキタキツネが寄ってきて、乗用車の窓を見上げて餌をねだっているところなど、犬

とそっくりだった。バスが近づいていくと、キツネはびくつとして山中に逃げていった。

終点の知床大橋で下りたのは、僕一人だった。深い谷に茶色い鋼鉄製の橋がかかっている。欄干から見下ろすと、谷底に吸い込まれそうな気がした。橋を渡りきった先は、一般車進入禁止になっている。知床の自然が守られているのも、奥地へ人間が入り込むのを制限しているからなのだ。

谷の底からハーブのような香りが漂ってくる。赤や紫、黄色、白の小さい花が、地味な装いで混じり合って生えている。以前、聞いた話なのだが、さまざまな種を混ぜ合わせてまくと、それぞれの草が互いに支え合って、病害虫から身を守るのだという。

自然は共生することで、一つの環境を作っているんだな。

そのとき、バイクの音がした。知床五湖で再会した青年だった。近くに家族連れが立っていて、写真のシャッターを切ってもらえないかと声をかけられた。言われるままに応じると、カムイワツカの滝まで自家用車で送ってくれた。若さというのは特権である。何かあると、向こうから手を差し伸べてくれるのだから。

カムイワツカとは、アイヌ語で「魔神の水」という意味で、強い硫黄成分を含んでいる。川の水に手を突っ込むと、確かに生ぬるい温泉といった感じだ。急流を上っていくと、山の上は露天風呂みたいな、滝壺が温泉となっているらしい。ただ、今回は帰路の体力を温存しておくために、沢登りは次回に回すこ

とにした。振り返ると、バイクの彼が立っていた。お互い手を振って別れた。

知床五湖まではバスで戻り、一休みをした後、雨の中ずぶ濡れになりながら、ウトロへの帰路を急いだ。途中、二十歳前後の若者たちと出会った。彼らもサイクリングしていたので、励まし合って悪路をこぎ続けた。ユースホステルに戻ると、冷えた体を温めようと温泉に入った。

夕食の時、知床大橋で僕を見かけたというアメリカ人の若者らと、テーブルを同じくした。日本語がかなり流暢りゅうちょうだった。それもそのはず、高校時代、日本のアメリカン・スクールに通っていたのだそうで、今はアメリカの大学に通っているが、三ヶ月間、東京でホームステイしているということだった。

すでに十五、六の頃から、二十二、三に見られていたという話を聞いて、改めて僕は思った。なるほど、アメリカ人から見れば、日本の大学生なんか、高校生ぐらいにしか見えないんだろう。それだけ子供っぽいということだ。

その夜は消灯の時間まで、旅の話題で沸いていた。そこにいた日本人も、みんな気がいい奴ばかりだった。アメリカ人の若者は、ギターを弾いていた。外は叩きつける雨と風で、窓や戸口が騒がしい音を立てていたが、その場の高揚した気分は、外の嵐を物としなかった。

どこまで行っても天塩川

志賀直哉の短編に「網走にて」というのがある。東北本線に乗っていた語り手が、偶然乗り合わせた母子と口をきく。北海道の網走に行くという話を聞き、子供の様子から父親の容貌を想像などして下車するという話で、人物の観察と簡潔な語り口は生きているが、物語性のないエッセイのような作品である。

翌日、網走で石北本線に乗り換え、旭川方面に向かっていた。これから触れようとしている出来事も、「網走にて」とは違った意味で、列車内での偶然の出会いと別れである。

今回、オホーツク海について触れなかったのは、大学生の時に目にした、緑色に輝く海ではなかったからだ。雨がちの天候

で、海面は終始グレーだった。旅とは自分と異なるものを受け容れる過程である。思い出をなぞってばかりいてはいけぬ。大切なのは、今ここにいる感覚を肌で感じることなのだから。旭川で急行「宗谷」に乗り換えた。隣の席の背広姿の青年が話しかけてきた。彼は稚内の出身で、今東京の大学の四年生、就職は地元ですることにしたので、就職試験を受けるために、三年ぶりに帰郷することにしたというのである。

僕は当時、北海道の友人がいなかったから、道内の生活については詳しく知らなかった。彼はこちらの問いかけに、友人のような気軽さで答えてくれた。また、彼の方も宗谷本線の長旅で、話し相手がほしかったのだろう。

「北海道の家には雨戸がないんですよ。みんな二重窓になって

いる。それから雨樋あまどいもない。屋根は内地（北海道の人は本土のことを内地と呼ぶ）みたいに瓦ではなくてトタンですよ。それが当然だと思っていたから、修学旅行で東京に行ったとき、また大学に入って半年間は、カルチャーショックでしたね」

彼の話によると、北海道は文字通り、一つの自治体であって、すべてが札幌中心になっている。そのために、町と町の交流もない。北海道だけで一つの共和国みたいに思っているから、本州とか他の地域のことはどうでもいいと考えているらしい。

宗谷本線は名寄なよろに到着した。すでに紋別もんべつ方面に向かう名寄本線は廃止されていたが、朱鞠内湖しゅまりないこ沿いを走り、深川に向かう深名線めいせんは残されていた。沿線の降雪量が多く、代替の道路も出来ていないからということで、オレンジ色のディーゼルカーが、

エンジンを吹かしたまま停車していた。廃止される四年前の話である。

「宗谷線の利用価値があるのは、名寄までですよ。それから先は切り捨てたいんだろうけど、稚内があるからそれができない。だから、見捨てられていくんですよ。こんなところに投資する金なんかない。レールが悪いからすぐ揺れるでしょ。枕木だってコンクリートに取り替えていないし」

名寄を過ぎると、列車は天塩川に沿って進んでいく。駅と駅の間は牧場と原野が広がっていて、人の姿はほとんど見かけない。代わり映えのない、けだるい風景が延々と続いていく。

「鉄道を敷くときに、この川を使ったんですよ。これだけ長く走っていて、トンネルは一つしかくぐらなかつたでしょう？」

この辺じや芋を作るか牧畜をするしかないんですよ。どこか暗い感じがしないですか？ 空が曇っているから、余計そう思うんだろうけど。窓の外を見ている面白くないから、物思いに耽るしかない……」

青年は理知的な口の利き方をする。才能があるだろうに、それを発揮できる場所が見つからず、軽い苛立ちを覚えているような。といっても、他人を蹴落としても、とまでは考えないらしい。ロマンチストのようなところがある。

「あの牧草地の上で、横になってみたいなあ。牛の糞があったりしたら大変だけど」

「それで、東京の暮らしよりも、こっちの方が合ってるって思ってたんですね」

幌延^{ほろのへ}を過ぎると、天塩川は大きく左に折れ、日本海に向かって注いでいく。サロベツ原野が広がる脇を、列車はゆったり進んでいく。

「この単調な風景から、いきなり町に入ります。南稚内に入る直前に、少し海が見えるはずですよ。ほら……」

青年の指さす先には、午後の日射しにかすんだ利尻島^{りしりとう}の、天に突き出した頂が蜃気楼^{しんきろう}のように見えた。これから自分が渡ろうとしている島である。

「もう少し行くと、あの右側に僕が出た稚内高校が見えてきますよ。ああ、あれです。照明灯が見えるでしょう？ 汚い学校だけど、懐かしいなあ。町の方も全然変わってないみたいだし。他の奴はもう、東京に戻っちゃったのかなあ……」

無邪気な笑顔が広がった。彼は大学に合格した夏に一度、稚内に帰郷しただけで、今回、ふたたび故郷を目にした時には、学生生活も終わりを告げようとしていた。東京での暮らしを楽しみながらも、故郷で生きることを選択したのである。

南稚内駅で青年は列車を下りた。四時間ほどの間であったが、話を聞くうちに感情移入してしまい、彼と同じ気持ちを体験していた。互いに名前を告げることなく別れたが、僕の記憶に声は刻み込まれた。

海から突き出た利尻島

稚内は国境の町である。原野を抜けた先に、突如、中小のビルが建ち並ぶ都市が現れ、高台には自衛隊のレーダーがそびえている。ここは南下するロシアに対し、国防上整備された町なのだ。真夏というのに二十度ぐらいで、余りの涼しさに身震いしてしまいそうだ。

今回の旅では、稚内は通過点に過ぎない。ユースホテルで一泊し、次の日の午前中には、すでに利尻島へ向かう船の中にいた。ソビエト国内のニュースが耳に入ってきた。ゴルバチョフ大統領が復権し、エリツインの奮闘によって、共産党による権力奪還は失敗した。これで保守派は一掃されるのだが、ソビ

エト連邦そのものが崩壊し、ゴルバチョフも失脚するのは、もう少し後のことである。

利尻島のおしどまりこう鴛泊港に到着すると、ユースホテルの緑色の旗がなびき、若者たちがギターに合わせて歌っていた。今日島を去る人々が乗り込むと、紙テープが甲板と岸壁に伸びて、歌いながら別れを惜しんでいる。ものすごい乗りなので、圧倒されながらも、学生時代の気分がよみがえってきた。

ユースホテルに荷物を置くと、今日着いたばかりの香川の青年と、サイクリングすることにした。鴛泊から島を一周しようと考えたのだ。最初に訪れたのは姫沼だった。森に囲まれた小さな沼で、空が晴れ渡れば、バックに利尻山を拝むことができる。標高一二五メートルまで、自転車でするのはかなりきつ

い。途中の坂で青山学院大学の二年生と会った。サイクリング・サークルに属しているそうで、人なつっこい性格だった。三人で島を回ろうということになった。

ようやくたどり着くと、休憩所のおじさんとおばさんが、お茶を出してくれた。おじさんは話し好きで、トドのことを質問すると、いろいろ教えてくれた。

「トドだったら、冬、襟裳岬えりもみさきに行けば見られるさ。自衛隊に頼んで、駆除してもらうくらいだから。自分で百メートルも潜るのは面倒なんで、上がってきた網を切って、ごっそりかつさらっていくんだよ。船によっては銃を構えて、トドさ出てるのを待ってるんだが、そういう船には近づかねえんだよ。トドは頭がいいからね」

姫沼は一周八百メートル、ゆっくりと回った。雨上がりなのか、木陰の下はとて涼しく、ほとりの水道は冷たくておいしい。お腹が空いてしまい、香川から来た青年の勧めで「利尻ラーメン」を食べた。帆立貝や海老が丸のまま、大きな蟹の足、チャーシュー、昆布、野菜などが入っており、スープのおいしさは格別である。

腹ごしらえが済んだので、時計と逆回りでサイクリングすることにした。道の起伏は比較的少なく、車もとても少ないので、かなりのスピードで走ることができる。利尻空港の脇を過ぎ、杳形岬公園くろがたまで来たとき、青山学院の学生の自転車がパンクしてしまった。「先に行って下さい」と言われても、見捨てるわけにはいかない。

ところが、彼はサイクリング・サークルに属しながら、パンクの修理もしたことがなかったらしく、それがばれると頭をかいていた。香川の青年がパンクの修理をしてあげた。しかし、空気入れも壊れているのかタイヤが膨らまない。

すでに時計は三時を回っていた。これでは島一周できないのではないか？ 青山学院の彼は空気入れを探しに行き、香川の青年は杳形の森原牧場に向かうとのこと。ちなみに、利尻島唯一の牧場が廃業となったのは、この年一九九一（平成三）年だったから、その直前だったことになる。

せっかくのトリオはあっけなく解散。僕は諦めきれなかったので、一人で利尻島を一周することにした。この頃には空も晴れ渡り、利尻山の全貌ぜんぼうがうかがえた。

最初の目的地は、仙法志せんぼうしの先にある御崎公園自然水族館みさき、といても、岩をくり抜いた生け簀すにゴマフアザラシが二頭いるだけだった。溶岩が海に流れ出して固まった所なので、周囲には奇怪な形の岩が立ち並ぶ。百円で魚を数匹買い、アザラシに食べさせることにした。体は大きく、中学生くらいの体重はありそうだった。

頭の先だけ水面の上に出し、目は真っ黒で丸い。泳ぐ犬といった感じだが、水中を進むときは魚雷みたいで、足をすぼめて仰向けになり、尾びれの力だけで突っ切っていく。全部魚をやってしまったも、まだ物欲しげな目をしているが、カメラを向けると気になるのか、ちらちらこちらを見ている。

利尻島の海岸線は、なだらかな道が続いており、見通しもいいので、サイクリングには最適である。これは利尻山が古い火山で、長らく噴火を休止しているため、侵食が進んで山頂を除けば急峻な地形が見られないためだ。

日が西に傾き始めていた。オタトマリ沼で少し休憩した。アイヌ語で「砂のある入江」を意味する。水は澄んでおり、沼の周囲には葦が生えている。人気はほとんどない。静かで落ち着く感じだった。

ここから見る利尻山が一番美しいかもしれない。岸辺を歩くと、クツションのようにわずかにへこむ。草が腐りきらずに泥炭のまま、堆積たいせきしているためだろう。

あとは死にもぐるいでペダルをこいだ。日が山影に隠れると、寒気すら感じるようになった。ユースホステルに到着したのは、六時十五分。他の人たちはすでに食事を終えていた。鴛泊にある夕日ヶ丘展望台に行くと話している。

食べ終わってから丘を登っていくと、中腹の辺りで他の人たちとは下りてきた。夕日はすでに沈んでしまったが、赤く燃える空と、礼文島の島影は美しかった。丘の上にはハマナスがたくさん赤い実をつけていた。

鴛泊のユースホステルでは、宿泊者のミーティングが開かれていた。ヘルパーの少年がギターを弾きながら、会場をはね回っていた。早朝登山の話が出て、大いに引かれたのだが、往復には半日近くかかり、連泊が必要だということなので、今回は

見送ることにした。

翌朝、利尻山には雲一つかかっていない。あの頂からの眺めは、さぞ素晴らしかったことだろう。後ろ髪を引かれながら、鴛泊港まで、ユースホステルの車で送ってもらい、甲板では見送りの人たちと歌をうたった。ちなみに、「利尻グリーンヒルユースホステル」は、ユースホステル協会との契約を解除し、二〇一三年（平成二十五）以降は、素泊まりの宿「利尻ぐりんひるinn」となっている。

汗と涙の八時間コース

鴛泊港を出港して四十分、お隣の島、礼文島の香深港かふかに到着した。礼文島の語源はアイヌ語の「レプン・シリ」（沖の島）である。港にはユースホステルから車が迎えに来てくれた。ここには北海道の「三大〇チガイユース」の一つとの噂があった。「桃岩荘」があるのだが、僕は恐れをなしてしまい、今は存在しない「礼文ユースホステル」に泊まることにした。

荷物を預けたあと、昼食を食べべに香深の町に出た。いか刺身定食とうにぎり（ウニのおにぎり）を食べる。時間が余ったので、島の西海岸に近い桃岩まで、山道を登っていくことにした。岩といっても、小山ほどのとんがり頭に、草がまとわりついて

いるといった感じだ。ニシン小屋を改造したという、例のユースホステルが存在する所である。

三十分近く歩いたろうか、石碑に寄りかかっていると、「ここにちは」と挨拶する人がいる。今日、一緒に利尻島から礼文島に渡ってきた人だ。

京都の大学に通っているようで、友達と車で北海道を回っているとのこと。彼は話し好きのようである。

「利尻と礼文では対照的ですね。利尻の山は険しいが、海岸線はなだらかだ。礼文の山は低いけれども、海岸線は切り立っている……」

桃岩の近くに立つと、水平線が弧を描いているのが分かる。日射しも柔らかく、心地よい風が吹いてくる。光に満ちた海を

しばらく眺めた後、彼と一緒に香深の町に下りてきた。一人になると日記帳を広げて、岸壁の上に腰を下ろし、旅の記録をつけていた。

目の前には利尻島の島影が、手に届きそうな位置に見えている。沿岸を走る道路や建ち並ぶ家々まで、くつきりと目に映る。懐かしい友人と再会したような気分である。

海面にはカモメがたくさん浮かんでいる。「かもめの水兵さん」という童謡を思い出した。餌を見つけると、水上からジャンプして、勢いよく嘴を水中に突っ込み、海老や小魚を捕まえる。他のカモメが寄ってくる、あわてて呑み込んでしまう。時間がゆったりと流れていく。

「愛とロマンの八時間コース」というのは、礼文島の最北端スコトン（須古頓）岬から島の西海岸をトレッキングするコースである。「北海道の三大〇チガイユース」と言われた「桃岩荘」が開拓したコースで、僕が宿泊した「礼文ユースホテル」でも、開催されていた。ただし、元祖の終着点が「桃岩荘」であるのに対し、今回は南部の元地地区もとちを目指すことになっていた。「愛とロマン」というのは逆説的な言い方であって、実は「汗と涙」と言われるほど、長くて険しい道のりを踏破しなければならぬ。落石の危険もあるコースで、安易な気持ちでは参加できないし、もちろん、高齢者は無理である。けれども、それを共に乗り切ること「愛とロマン」が芽生える可能性はある。

朝食後、宗谷バスで香深からスコトン岬まで移動した。そこ

からの眺めは素晴らしかった。沖に海馬島トドが見える。周囲には高い木は生えていない。風が強いために、灌木かんぼくのほかは草花しか生えないのだ。しかも、寒冷な気候のため、高山にしか生えない植物を、海岸線でも見かけることができる。緑に染めたスポーツ刈りみたいに、海岸の地形がくつきり浮かび上がり、荒涼とした自然の美しさが広がる。

その日参加したのは、ユースホテルの十二名と、たまたま居合わせた男女二名。杵にとらわれず、「一緒に行こうぜ」っ
て感じで、フレンドリーなところがいい。

丘を尾根伝いに登っていき、振り返ると稜線が青空に映えて、遠近法の絵画を見ているような気がする。スコトン岬が限りなく遠い消失点となり、そこから植物の根のように、ひよろ長い

岬が続いている。花はこぶりなものばかりだが、結構咲いている。固有種のレブンソウは、紫色の可憐な花をつけている。無数の花が雲のように寄り添うエゾノヨロイグサは、地味だがよく見かける花である。

風はかなり強い。あおられて海の反対側に吹き飛ばされそう。両手を水平に伸ばすと、鳥にでもなったような気分になる。ゴロタ岬まで登ってくると、礼文島の西側の突端が、ゆるやかにカーブしているのを見下ろせる。よくここまで登ってきたなあ、とちよっとした達成感があるが、コースはまだ始まったばかりである。

スカイ
澄海岬は礼文島で一二を争う景勝地である。入り江をなす荒

削りの崖は、ところどころ草が生えるばかりで、青い海から垂直にそびえている。崖の頂は浸食が進み、針の山のように尖っている。日本離れた風景は、北欧かどこかの地形を連想させるが、氷河期にはこの周辺にも氷河が存在したらしい。

ただ、これも風が強かった。カメラのシャッターを切ろうとすると、体が揺さぶられて手ぶれを起こしてしまふ。風の弱いところを見つけて、お弁当を開いた。昼食後、しばらく行くと、やぶの中に入っていく。一転して風はやみ、蒸し暑くなってきた。谷川で顔や手を洗うと涼しくなった。上から見下ろすと、木が生えているのは谷川沿いだけである。あとは草も生えない砂地である。

ロープを伝って崖を下りていく。そこから先は磯伝いに道な

き道を進んでいく。海はかなり荒れてきた。絶え間なく恐ろしいうなり声を上げ、一気に岸へ押し寄せてくる。崩れる波の中で、昆布がくるくるもまれていく。沖の岩場では黒い鶉が羽を休め、中の一羽は翼を広げている。

目の前に大きな岸壁が立ちはだかった。外側は波が洗っている。迂回する道は見当たらない。高さも数メートルはある。やむなくよじ登ることになった。女性もかろうじて越えられた。次の難所にはロープが張ってあったが、海に突き出した岩場を、波の合間を縫って通らなければならぬ。潮は次第に満ちてきているようだった。靴を濡らしてしまった人もいた。僕はさっと駆け抜けようとしたのだが、足が滑ってしまい、膝上まで波に洗われて、ぐっしより濡れてしまった。

行程も終盤に近づいてきた。礼文滝で一休みすることになった。緑の斜面を下る小川が、一気に垂直の壁から落ちてくる。ほっとしたわけだが、本当の難所はまだ先に控えていた。

今度は絶壁の岩場を、ロープ伝いに下りることになった。数人がロープにつかまっていたのだが、前の男性が足を滑らし、その反動で宙ぶりとなった。僕はロープをつかんだまま、押し倒される形となり、後頭部を激しく岩にぶつけてしまった。彼が早く下に行きたくて、垂直に岩場を下りなかったことも、災難の原因の一つだった。

小さなこぶが出来、多少出血していた。持参した薬をすぐにつけた。謝る彼に「大丈夫だから」と言っただけでも、火花が散るほど痛かった。この区間は落石の危険もあり、死亡事故も

発生したため、現在では通行が禁止されている。海岸の難所を越える醍醐味は、もはや過去のものとなったのだ。礼文滝のかなり手前、宇遠内からは島の東海岸、香深井に出るコースが推奨されている。

午後六時頃、元地の地蔵岩の前に到着した。巨大なお地蔵さんに見える大岩がそそり立っている。そこで喉を潤しているのと、ユースホステルの車が迎えに来てくれていた。戻るとすぐに食事をとり、入浴。ミーティングの時間には寝ぼけていたが、八時間コースへ行った人たちの間に、同じ困難を乗り越えたという連帯感が生まれた。

一難去ってまた一難

明日は一緒に塩狩温泉に行つて、ジンギスカンでも食べよう。八時間コースを歩いた人たちの間から、自ずと声が上がった。早朝に食事をし、元気を出そうと牛乳も飲んだ。八時発の稚内行きの船に乗ることになった。

空は青く晴れ渡っていた。香深港の岸壁には、ユースホステルの人が見送りに来てくれていた。歌をうたつて別れを惜しんだ。港内は波が静かだったが、沖に出ると風が強くなってきた。次第にうねりが出てきて、甲板を突風が駆け抜けた。身震いするほど冷たい風だ。

船が大きく揺れだした。水しぶきがかかるようになったので、

甲板の中央に避難した。船の横揺れがひどく、浮き上がったかと思うと、次の瞬間、海面に叩きつけられる感じだった。数メートルのうねりで、海は大きく湾曲し、大しけのオホーツク海をゆくサケマス漁船にでも、乗り合わせてしまった気がした。次の瞬間、バシヤーン！ 頭の上からバケツを空けられたように、大量の海水が降ってきた。体中びしょ濡れになった。甲板上はパニックとなり、皆転げるように船室の廊下へと駆け込んだ。

船が大きく横揺れするたびに、女性の悲鳴が上がる。僕は吐き気を催して、船室の畳の上に横たわった。すると、よろめいたおじいさんが、僕の体の上に倒れ込んだ。そこから抜け出すと、廊下に座り込んだが、やはり気分が悪いので、そのま

ま横になってしまった。

ゴミ箱があったので、口を当てると、今朝^{けさ}食べたおかずやら牛乳やらがあふれ出した。船員がビニール袋やごさを配っている。袋を一つもらって吐いた。吐いたのにまた吐きたくなっている。取り替えたゴミ箱に吐いた。いったい何回吐いたんだろう？

トイレは気分の悪い人たちが占領していた。赤ん坊が泣き叫んでいる。皆青い顔して廊下に転がっている。ああ、また大きく傾いた。このまま傾き続けたら、船は横転してお陀仏なのではないか。

僕は意識を失っていた。気がつくとも揺れは収まっていた。アナウンスが入った。船は三十分遅れて稚内港に入港するという。一緒に船に乗っていた人たちも、吐き続けていたという話だっ

た。船を下りると、皆、怒りを爆発させていた。岸壁で記念撮影をし、夕方、再会を約して別れた。

夕方、塩狩温泉のユースホテルに集まった。名寄国道沿いの建物は古かったが、大きな池があつて、カヌー教室が開かれているらしい。ジンギスカンを食べながら、一ヶ月半もバイクで道内を巡っている人と話した。二十代後半で年が近かったことから、お互い心を開くことができたのだ。仕事をやめて旅に出たそうで、ユースホテルは大学生が多いから、浮き上がらないようにしているということだった。

こちらの話をもっぱら、礼文島での八時間コースと、今日の荒れた海についてだった。温泉に入った後は、食堂で紅茶を飲

みながら、三浦綾子の『塩狩峠』のモデルになった、命を捨てて人々の命を救った青年の物語を、ユースホテルの人に聞かせてもらった。

小樽市内のストーンサークル

ストーンサークルは環状列石と呼ばれ、イギリスのストーンヘンジが有名である。トマス・ハーデー原作の映画『テス』で、自分を犯した男を殺して死刑になるテスが、警察に捕らわれる場面で映される巨石のサークルである。ドルイド教の祭祀に使われていたと、信じられてきたというが、天文台なのか墳墓なのかなど、定説はまだ明らかでないらしい。あれほど立派なものではないが、ストーンサークルはインドやシベリア、日本では東北や北海道でも見られるものだという。

塩狩温泉を出発した僕は、小樽の運河沿いを散策した後、バスで忍路環状列石に向かっていた。函館本線なら蘭島駅から、

徒歩で三十分弱かかる。停留所を下りてしばらく行くと、遺跡から出土した土器や石器などが保存されている記念館、いつでも物置のような小屋の前に出た。

向かいの商店のおばあさんに鍵を借りて、記念館の中に入った。そこには石臼、石斧、石枕、石笛などが展示されていた。

それらの中で特に目を引いたのが、古代文字を刻み込んだ岩の塊だった。

僕はそれを見つめるうちに、我々が普通考えるような文字ではない気がした。意味が解読できないのは、言語の「二重分節性」、音と意味の両面から分析できる言語の原則に、則っていないからではないか。それが動物のさまざまな叫びが、合図として用いられながらも、人間の言語とかけ離れている点なのだ

が。

この文字を岩に刻んだ動機は何だろうか？ 僕は刻みつけられた溝に、原始人の欲望が感じられてくるのだ。この文字とも絵ともつかない記号には、呪術的な力が込められているのだろうか。中国伝来の呪符じゆふに通底する何かが……。

道を左に曲がり、少し坂を上ると、環状列石の遺跡があった。南北三十三メートル、東西二十二メートルの楕円たえん形状に、縦長の石が二重に並べられている。この遺跡が持つ意味は、学術的にまだ解明されていないという。

僕は博覧強記の作家として知られた、コリン・ウイルソンの言葉を思い出した。歴史的事件の舞台となった地に立ち、直観的にその場面を想起することについて。

円は完全さを表すとともに、運動の軌跡を表しているのではないか。この岩の間を古代人が駆け巡ったのだろうか。祭祀との関連以外に、幾何学的な配置から、天文学との関わりが思い起こされた。

この種の環状列石が日本では、北海道、東北北部に見られる理由としては、夏に降雨量が少ないことがあるのではないか。日本人は歴史的に他民族と比べて、星に関する関心が薄いと言われてきた。曇っている日が多く、砂漠のように、快晴の日が続くことはまれである。比較的晴天にめぐまれる東北以北に、この種の遺跡が存在することは、蝦夷と呼ばれた先住民族の、星に対する信仰の可能性を示唆しているのではないか。

商店のおばあさんに鍵を返すと、少し道を戻った。先ほど曲がった所を反対側に進んでいくと、地鎮山巨石記念物に出る。それは小高い丘にあった。環状列石があるのは忍路の方と同じだが、中央部にある四角い穴が、この遺跡が墳墓であることを強く示唆している。

ところで、今回見た二つの遺跡から、僕はウィルソンにならって、ここで行われていた祭祀を想像した。環状列石は天上の秩序になぞらえたもので、占星術の黄道十二宮に相当するようなものではないかと。ここ地鎮山の頂で、死者の魂は星々の運行に合わせて、夜空に昇天していったのだろう。

バス停に戻る途中、先ほどのおばあさんに声をかけられた。挨拶して帰路につく。小樽駅から快速電車に乗り、車中で緑が

かった日本海を眺めていた。

記憶にかすむ函館山

その日は札幌で一泊し、翌日函館まで出た。駅前から市電に乗り、十字街で下りると、ゆっくり坂道を上っていった。七年前に日の暮れた函館山から、無謀にも徒歩で下りてきたとき見かけた風景だ。これほど精神の自由を感じるのは、あの旅以来かもしれない。

函館山のロープウェイは、駅舎も客車も新しくなっていた。山の上まで登った。西側の海を眺める。あの日は夜景が見えるまで、ここに留まっていられなかったが、今はもう青函連絡船も存在しない。津軽海峡線の発車時刻は、午後五時半前だから、北の大地との別れも差し迫っている。

まだ明るいのに山を下りなければならぬ。僕は胸がいつぱいになり、かつて夕日を眺めた場所に走っていった。海面は風いで、夏の光で白く輝いていた。

青森駅に着くと、急行「八甲田」に乗り込み、翌日の昼頃には帰宅していた。一人旅に出る前、僕は決まって億劫な気分が襲われるのだが、いざ出発してしまうと、旅をしている自分を、ごく自然に受け容れている。その間、自己の実存について、あれこれ思い悩むこともない。そのとき、そのときの感覚と感動に身を任せ、^{まか}世界と一つになっていた……。

いきなり女満別空港へ

二回目の北海道旅行から、また五年の歳月が流れていた。その間に勤めていた日本語学校が廃校になり、職業安定所に通ったりした。三十歳過ぎてからの転職は、なかなかきついものがあった。不採用の通知が来るたびに、何だか自分が役立たずになってしまう気がした。

ようやく新たな定職について程なく、病気がちだった父が入院した。しかも、半年が経とうとしても、経過は思わしくなく、回復の見込みすら立たなかった。週末は病院通いで疲れがたまっていた。

幸い、病状が小康状態となったので、例年の夏休みのように旅行することにした。ただし、急変した場合には、中断して帰宅することも考えていたが。

夏休みを長く取れないことから、今回は飛行機に乗ることにした。ところが、である。予約しておいた十時三十五分発の女満別^{まんべつ}の飛行機に、乗り遅れてしまったのである。次の女満別行きは？ と見ると、十三時発である。

日本エアシステムの機内にいた。岩手あたりの上空を飛んでいる。雲は厚いが、先ほどまで見えていた積乱雲は彼方に去った。女満別空港は激しい雨で、行き先は釧路空港へ変更されるかもしれない。その場合、今日中にウトロにはたどり着けまい。何てこった！

雲間から北海道の大地が見えてきた。天候は回復してきたのか？ 釧路上空を通過すると、見渡す限り野山と田畑が広がる。チャイムが鳴り、予定通り女満別空港に着陸するとのアナウンスが入った。

あそこに見えるのは屈斜路湖か。かなり高度が下がってきた。ふたたび雲が増えてくる。飛行機の影が山肌に映っている。それは思ったより小さい。白いガスを抜けると、影は怪物のように大きくなり、機首の周囲が後光に似た丸い虹に包まれている！

空港からウトロ行きのバスに乗っている。お客が僕しかいないので、運転手とは時折おしゃべりしていた。今年は冷夏で天

気もくずつくことが多いそうだ。小清水こしみずの原生花園は、地味で小柄な花が一面に咲いていた。

斜里を過ぎた辺りから、少しうとうとした。オシンコシンの滝が、道路右側の崖に見えた。その先のトンネルを抜けると、漁港入口の海中に、岩山が二・三そそり立っている。ウトロのシンボル、オロンコ岩である。五年前に訪れたとき、目にした風景だった。記憶と現実を重ねたていく。あの時の続きを夢見ている気がした。

バスは坂道を上っていく。ウトロ停留所の先、知床プリンスホテルまで連れていってくれた。前回と同じユースホステル「知床夕陽のあたる家」だが、僕が以前泊まった建物ではなく、一般用のホテルの客室を、相部屋の形で使っているのである。き

れないのは悪くないが、ユースホステルらしい活気はない。

五年前に宿泊した建物のロビーで、台風が近づきつつある夜、アメリカ人の青年がギターを弾き、旅の話で盛り上がった思い出が、青春の記憶としてよみがえってきた。その時ふいに、ジョン・ヒューストン監督の「ザ・デッド」という映画のラストシーンが頭に浮かんだ。ジェームス・ジョイスの短編集『ダブリン市民』のうち「死せる人々」を、映像化したものである。なごやかなパーティーが開かれるのだが、そこに集う人々もやがて遅かれ早かれ、死者の世界に去って行くんだと、主人公が感慨に耽るシーンである。嵐の夜に若者たちが語り合った建物も、今は打ち捨てられて人影もないのかと思うと、すべては過ぎ去る無常というものが胸をよぎった。

地の果ての大自然

知床のユースホステルには、黒い縁の眼鏡をかけた秀才っぽい若者がいた。石川啄木の史跡を巡っているとか言っていた。大学を卒業してからは、文学青年にはお目にかかっていなかったから、ちょっと懐かしい気がした。

話が合ったので、一緒に知床半島を巡ることにした。彼は綿密に計画を立てていたので、それに合わせていけば、無駄なく時間が過ごせそうだった。

翌日は雲が広がっていた。一緒に定期観光バスに乗り込んだ。まずは知床峠に向かった。五年前に訪れたとき、駐車場に毛布を敷いて、夜空の星を眺めたものだったが、今日の峠は濃霧で

国後島おろか、羅臼岳らうすだけの影すら目にできない。十分ほどでバスに乗り、カムイワツカの滝へ向かった。

知床五湖までの道は、以前と異なりすっかり舗装されていたが、その先はまだ砂利道が続いていた。過去の記憶とオーバーラップしてきて、区別がつかなくなりそうだった。カムイワツカの滝では一時間半近く時間があつたので、文学青年と滝登りすることにした。

早瀬の岩は滑らかに削られていたが、流れに含まれる鉱物のせいで、緑色がかっているのに気づいた。むしろ、川底を歩いた方が滑りにくい。小さな滝は両手を使えば、軽く這はい上げられた。早瀬と小さな滝が、幾重にも重なっている。

滝を登っていくうちに、流れの温度が上がってきた。硫黄の成分がきついので、金属類はたちまち腐食するだろう。カメラと時計はビニール袋に、嚴重に入れておいたのだが、写真を撮りたくなった。シャツターを切っていると、青年に後おくれを取ってしまった。四つん這いになりながら、いくつか滝を越えていくと、前方から歓声が上がった。

滝壺が露天風呂になっていた。みんな水着をつけている。見回してみたが、文学青年の姿はない。さらにその上を目指して、崩れやすい崖を這い上っていたのだ。しばらくして、彼は戻ってきた。その先の川は熱湯になっていて、道もかなり険しいことから、あきらめて下りてきたという話だった。

僕はシャツを脱いで、パンツ一枚になった。湯の中に入って

いく。お湯の温度は三十九度くらいというから、体はなかなか温まらない。滝壺に近づくにつれ、ジェットバスのように流れがきつくなり、岩につかまらなければ一箇所にとどまっていられない。

本当は滝壺の真下まで行きかけたのだが、そこは背が立たないだろうし、渦を巻いた流れに足をとられてしまう。戻りかけて振り返ると、しぶきが目に入ってひりひりした。三十分以上つかっていた気がする。彼と交互に写真を撮ったりした。青年は快活そうに笑って言う。

「また、来たいな……」

僕も以前、カムイワッカの滝の下まで訪れながら、登るのを諦めていたので、ようやく実現できて胸がいっぱいになった。

あとは滝を下るだけだったが、行きよりもはるかにきつかった。転ばないようにしゃがみながら下りていくと、しぶきが飛び散って、腿ももまで上げたスボンもびしょ濡れになった。二人そろって尻餅をつき、滝を滑り台のようにずり落ちる中年の夫婦もいた。

高級なビデオで滝を撮影していたおじさんは、足を滑らせて機械ごと硫黄の川にもぐってしまった。十万円はしたであろう最新機器も、修理不能となったに違いない。

滝を下りきったところで時計を見ると、十二時五十分、もう集合時間である。道ばたに子ギツネが二匹出てきた。餌をもらいたいらしく、近寄ってきたところをシャッターに収めた。

今回も知床五湖には寄ったのだが、あいにく曇り空であるため、知床連山も五湖に映る山並みも眺められない。シラカバからのぞく湖水の風景は、信州あたりでも見られそうなものである。ただ、ここがヒグマの生息地であることを忘れてはならない。売店で食べたコケモモのソフトクリームの、さわやかな甘酸っぱさは今も記憶に残っている。

ウトロに戻る途中、知床自然センターに寄ることにした。百平方メートルを八千円で買うことで、開発から知床の自然を守る運動があるのを知った。その時点ですでに九七・二パーセントの民有地が買い上げられ、開発が放棄された草原には植樹がされ、百年後には森林が復活することを目指しているという。自然センターの大スクリーンに、晴れ上がった知床の自然が

映し出されていた。知床硫黄山の上空をヘリコプターで越える辺りは、かなり迫力が感じられた。先端の知床岬まで船で回れることを知り、僕も行きたくなってきた。

バスの時刻まで余裕があるので、オホーツク海側の崖にあるフレペの滝を見ることにした。山道をぐつと下っていくと、ササの草原が続くので、ヒグマが出てこないように、手を叩きながら進んでいく。

展望台までは二十分もかからなかった。小さな崖が海へ突き出し、流れ下っていく川が直接、波のしぶきに注いでいる。その姿から、乙女の涙とも呼ばれている。いかにも知床らしい風景である。崖の下はウミウなどのコロニーとなっている。天売島てうりとうの風景とイメージが重なった。

手つかずの自然というものは、こゝういうものを指すのだろう。下の岩場は海鳥の羽と糞で、白い斑点模様となっている。ようやく静かな所に出られたという感じだった。林の奥からはエゾシカの親子がこちらをのぞいていた。

知床自然センターの前でバスに乗り、今度はオシンコシンの滝に向かった。高さは八十メートルあり、崖の途中で左右に分かれている。左側は磨かれた岩肌を滑るように、右側はあらゆる力の発散して豪放に。アイヌ人はここを、チャラツセ・ナイ（滑り落ちる川）、もしくはオシユンク・ウシ（エゾマツの群生する所）と呼んだ。それがオシンコシンの語源である。「ここは本土にある滝と違うね」と、僕は文学青年と語り合っ

た。白糸しらいとの滝にしても那智なちの滝にしても、日本画となるような、日本的美意識の枠の中にはまっている。ところが、このオシンコシンの滝は、下に向かうにつれて末広がりになり、豪快なまでに力を謳歌わうかしている。周囲に響き渡る音にも生命がこもる。絵画の枠の中に収まりきれないのだ。とにかく、存在感に圧倒されてしまっていた。

水しぶきを浴びながら、ただただ感嘆していた。腹の底に伝わってくる振動に、魂を揺さぶられながら。下において滝の全容を眺めていると、バスが少し早めにやって来た。

翌日は雲が多かったが、文学青年とともに船で知床岬に向かうことにした。前日の夜に予約しておいたのである。ユースホ

ステルの車で港まで送ってもらった。

岬に向かう船は漁船を転用したものだ。案内してくれたおじさんは、行政について手厳しい批判をしていた。林道は知床大橋より先は通行止（その時点では土砂災害で、一つ手前のカムイワツカの滝まで）なのだが、国立公園に指定される前年に、林野庁が強引に巨大な鉄橋を架けた。国立公園になり一般車の通行が禁止されたので、結果的には役立たずのまま、補修費ばかりかかるようになってしまったというのである。

知床の民有地を個人が八千円で買い上げて自然を守るナショナルⅡトラスト運動にしても、町長はそれを寄付だとして町有地だと言い出したが、これは詐欺ではないかとも。

木が伐採されたために、切り株や土砂が海に流れてしまうの

を防ごうと、砂防ダムを造ったのはいいが、鮭が遡上できなくなってしまう。そこで鮭の人工孵化を始めたのだが、川を遡上する前に鮭を捕らえるため、オジロワシなどは餌がなくなり、絶滅の危機に瀕する一方、鮭が増えすぎてプランクトンが減り、小柄な魚ばかりになってしまった。昔の鮭は大柄でずつとおいしかった。おまけに獲れすぎて、サンマより安くなってしまった。

イルカも乱獲されて、余り姿を見せなくなった。というのも、他県の漁民が捕らえたイルカの肉を鯨と偽って、スーパーなどに流しているからで、一般の消費者はだまされるかもしれないが、漁師の口はだませないとも。

ロシアはアムール川流域の樹木を伐採して、日本に輸出して

いるが、森林が減少した結果、川の水量が減り、流水が少なくなつて、豊富だったプランクトンの発生も減少し、それを餌とする魚類も同じ運命をたどっている。人間が自然をコントロールしようとする、それまで保たれていたバランスが崩され、思わぬ副作用が出てしまう。人間がなすことなど、自然の仕組みを前にしては浅はかなあがきに過ぎないという点を強調していた。

その間にも、船はぐんぐん岬に向かって進んでいく。幌別川にかかるスロープ状の橋は、カムイワツカへ向かう道に通じている。岩尾別川には鮭の人工孵化場がある。左方にはルシャ山、右方には羅臼岳が見える。知床硫黄山は頂上が三角の山で、昭和十（一九三五）年の噴火では、大量の硫黄が噴出して、大も

うけをした人がいたという。

その先、知床岳までの間は山並みが切れて、風の通り道になつている。確かに、灰色の雲が谷に沿って伸びており、おじさんの話していたとおりに、にわかには風が強くなって、波も荒くなつてきた。

白波が砕けるたびに、ばしやんばしやん、船の舳先へさきからしぶきが飛ぶ。上下左右に大きく揺れるたびに、ズボンがじつとり濡れていく。長袖の上に薄手のジャンパーを羽織っていたのだが、それでは間に合わず、リュックサックを抱え、身を縮こまらせていた。文学青年はヤツケのフードをかぶり、寒さに耐えかねた様子。女の子たちも毛布をかぶって、身を切る風をひたすらこらえていた。真夏でこの寒さとは！ さすがオホーツク

海である。

「あつ、熊がいる！」

強風にあおられながら、岩場の続く海岸線に目をやる。確かに茂みから見え隠れしている焦げ茶の頭は、ヒグマのもののおうだ。ただし、望遠鏡がないので、全身を目にすることはできない。

ここ知床半島では、ヒグマが番屋近くに現れることがあるが、お互いに距離を置いて無視し合うことで、共存することが可能になっているというのだが、半島の北半分が立ち入りを制限されている点が大きい。

番屋の脇を通ると、ウミウのコロニーがあり、岩場が糞で斑まだら状に白くなっている。知床岳を過ぎると、やがて、折り返し地

点の知床岬が見えてきた。先端は平らで樹木がない草原になっている。

僕はかつて旅した下北半島のことを思い出した。津軽海峡の出口はこのように、波打つ草原が広がっていたからである。

「尻屋崎には馬がいたんですか」と文学青年が尋ねた。

「牛の方が多かったな。でも、家畜がいると、生態系を壊していくからなあ」

青年は髪が額にかかるのも気にせず、岬の先端を眺めながら、あの上で寝っ転がってみたいなあ、とつぶやいた。

船がUターンしたので、座っていた方は海側になってしまった。やむなく向きを変えて、甲板の少し高くなったところに正

座した。

帰りは行きよりも海岸線に近い方を通った。岩場にかなり近づくと、跳ね返ってくる波で、船は大きく横揺れする。また、漁網の位置を示す浮きも避けていくので、船はジグザクに航行していく。

「熊だ！ 船の進行方向正面」

先ほどは全身の形も分からなかったが……。僕と文学青年は、船べりを伝って舳先の方に駆け寄った。確かにいる。まだ若い黒いヒグマだ。崖の下のかさむらを、野草を食べながら移動している。緑の中から現れたり隠れたり、四本の足の動きまでくつきり見える！

次に目に入ったのは、オジロワシのつがいだ。生ある限り、

夫婦は別れ別れになることはない。ウミウのコロニーも、岸から十メートルぐらいまで近づくと、鳥たちの羽ばたくさまや、巢から顔を出す雛ひなの姿まで、ひしめくように暮らしているのが見える。切り立った崖にしか楽園を築けぬのは、気の毒なようではあるが、見晴らしが素晴らしく、狩りをするのにも、巢立ちにも最適だからだろう。

知床五湖の下にある崖に近づく。第一湖からしみ出た水が、滝となって海にそそいでいる。黄緑色の苔こけが流れに沿って生えている。ひかりこけとけと呼ばれるもので、これをもとに、武田泰淳は同名の小説を書いたのである。

難破という生死の境をさまよう状況で、人肉を食うか餓死するかという選択が迫られる。極限状態を象徴するものとして、

ひかりごけが用いられているのである。実際に近辺で起きた事件と、その地の鮮烈なイメージを結びつけたところに、この作品が成功した鍵があると、阿刀田高あとうだたかが書いていた。

行きに見た岩尾別川、フレペの滝などを眺めているうちに、オロンコ岩、ウトロの町並みが見えてきた。時刻を見ると、午後二時二十分。船は十分後には、出港した港に戻ったのだった。「疲れているんだったら、まだ羅臼行きのバスに間に合うから、乗っていった方がいいんじゃないですか」と文学青年が言った。出会ってから行動を共にしたので、別れを惜しみたかったのだが、言葉に従うことにした。いくら仲良くなったとはいえ、それは旅の間だけのことと割り切つて。写真を送つてあげるよと言つて別れた。

羅臼行きのバスに乗り込んだ。半島の中央にそびえる円錐形えんすいけいの羅臼岳は、見る見る麓から雲に隠れていき、峠に達する頃には、霧の中に包まれてしまった。道の両側はかなりの残雪が、亀甲状にひび割れて谷間を覆っている。

文学青年と別れて、心の中に穴が開いていた。これが旅なんだと、平静を装っていたけれども、森繁久弥もりしげひさやの「知床旅情」で歌われた里に到着した。下り立おつた羅臼の町は、厚い雲の下で息を潜めている。さびれているというか、ウトロのような活気がない。若者の姿はまれで、温泉での療養に訪れる中高年の男女が目につく。

次の宿泊地、中標津なかしべつに向かうため、釧路行きのバスに乗り換

えた。国鉄民営化の数年後まで生き延びた標津線も、今やくさむらの中に埋もれている。並木の間を走る今はなき姿を思い描き、車窓から路線の跡を探っていた。

トドマツの白い骨

父は生前、中学や高校で国語を教えていたが、若いときは社会科も担当させられたらしい。その証拠に、書棚には教員向けの地図帳が並べられていた。小学生だった僕は、日本地図を見ていると、地形から風景を想像したりしていた。奇妙な形から幼い心をとらえたのが、朱鞠内湖と野付半島のつげだった。

前日に中標津に泊まった僕は、根室海峡に突き出た前髪のような野付半島と、砂の岬（アイヌ語のオタエトウ）に囲まれた湾、尾岱沼おだいとうに向かっていた。標津のバスセンターに向かうと、トドワラ入口までのバスは運休している模様だった。観光船も時刻表に載せてある便が運航していないところを見ると、それ

だけさびれてしまっているのだろう。

貸し自転車で行くことにした。野付半島の付け根までもかなりの距離があったが、それから先は、ひたすら直線の道が続いている。規則的に並んだ左右の電柱の先には、平坦な草原が広がっており、アザミなどの赤や黄色の素朴な花がちらほら咲くばかり。乳牛のホルスタインのほか、茶や黒の馬が放牧されており、母親の乳を吸っている子馬もいる。

野付半島は時折くびれ、道路と狭い砂浜だけになる。しばらく行くと左右に広がり、ナラの林が分布している。幹はすでに枯れ始めている。ゆっくり大地が沈降するさまを、ナラワラはありありと見せつけるのだ。

一本の木が枯れていくと、すぐ隣の方も弱ってくる。やがて

その隣も枯れてといった具合に、次々にナラの墓場が広がっていく。手前の沼地は赤紫色のサンゴ草が繁茂している。

人間による森林破壊も、同様の過程を経て進んでいく。植物は互いに支え合って生きている。一郭が崩されることで、わずかな早魃や病害虫によって活力を失い、そこで暮らす生態系も崩されていく。

トドワラ入口に着いた。「トドワラ定食」というのがあった。イカ、ホタテ、しめ鯖の刺身、焼き鮭、アサリの味噌汁、漬物、ご飯。それに甘辛団子風に作った芋団子を追加した。「こめちち」という発芽した玄米のエキスと人参の汁に、牛乳を混ぜた飲み物をぐい飲みした。

食堂を出て見物することにしたが、自転車の乗り入れは禁止されている。馬車もあつたが徒歩で行くことにした。原生花園で一番目につくのは、ハマナスである。これは実を梨になぞらえて花梨と言ったのが、なまつたのだという。群がるように生えているのは、小ぶりで可憐な薄紫の花、ハマフウロ（浜風露）である。

黄色い花が太い茎に鈴なりに咲いているのは、センダイハギ（先代萩）、ユリに似たオレンジがかつた黄色い花は、エゾゼンテイカ、別名エゾカンゾウである。これらの花はその姿に似てほのかな匂いしかない。人が種をまいたわけではないから、華麗に咲くことはないが、生命力の旺盛さには目を見張るものがある。

花の咲く道を行くと、後ろから馬車がやって来た。その先で道は二手に分かれる。一つは木道が干潟を越えて石の橋へ連なっている。いま一つはトドワラの方へと伸びている。

左方の道を選び、橋を渡って砂浜へと出た。枯れ草を踏みしめ岸辺を行くと、その先には青く塗られた鉄橋が海中を進み、観光船の栈橋へと至る。侵食されてゆく内湾では、中央の砂州の部分が、低い箇所から海水に浸され、林は小島のように切り離されている。

台風に襲われると、根元の土は洗い流され、あとは死を待つばかりとなる。人間は残酷だから、今は青々と茂るトドマツが、早く立ち枯れすればいいと思っている。というのも、トドワラのマツはほとんどが倒れ、根すらも朽ちて正体を失っているか

らだ。荒涼とした風景そのものが崩れ、白い骨に似た凄みも消えつつあるのだから。

砂浜が妙にさくさく鳴るので、しゃがんでみると、二、三センチのトンがり帽子みたいな巻き貝が、無数に落ちているではないか。一つを手にとってみると、まだ生きているらしく、体を守るふたが付いている。

野付半島に砂州が最初に出来たのは、三千年ほど前のことらしい。それから隆起と沈降を繰り返し、現在のような先端の曲がった枝状の姿になったという。外海の方は波に削られ、内湾は沈降して海水に浸されていく。その一方で、砂州の先端はここ数十年の間にも伸びている。

二時間ほどトドラの中を散策していた。道は野付埼の灯台まで伸びているが、単調なアスファルトの路面が続くばかり。
丹頂鶴たんちょうづるの営巣地にはたどり着けそうにない。干潟では鶴が五、六羽海中で羽を休めていた。一步一步を進めるたびに、首が連動して揺れている。手前に原生花園が広がっているため、人に脅おどされることもない。

カモメが魚をつかんで飛び上がった途端、それを狙ってトビが襲いかかる。びっくりしたカモメは海中に獲物を落としてしまふ。怒り狂ったトビは、しばらくカモメを追い回していたが、ついに疲れたのか、電柱の上で一休みする。

魔の湖を再訪する

翌朝、宿泊した中標津を発ち、標茶しべちやから川湯温泉行きたの列車に乗る。終点で下りてバスで摩周湖に向かう。途中、硫黄山（アトサヌプリ）に寄った。二十一歳の時以来だから、実に十二年の歳月が流れたことになる。当時はソフトクリームを移動販売する車が出ていたが、今ではレストハウスが建てられている。

巨大噴火で山頂が吹き飛んだ火山を、バスはゆっくりと登っていく。いきなり視界が開けた。カルデラの青い水面が覗いている。摩周第三展望台で下りたのは、僕ただ一人だった。これは運がいい。しかも快晴で、湖面は一点の曇りもなく見渡せる。にぎやかな第一展望台で下りるのは、魔の湖の魅力をまだ知ら

ない人間である。

湖の中央に突き出した中の島、カムイツシュの見える辺りにたたずんでいる。かつて訪れたときは、少し霧が出ていて風が冷たかった。観光バスが去ってしまったえば、沈黙だけが支配しているような趣おもむきがあった。今日は湖面がくつきり見える。アイ又はこれを魔の湖として恐れていたというが、確かに水面の青さは異常に見える。

風が吹いていても、時折白い波頭が覗くだけで、波らしい波も立たない。日がかげると、湖面はいつそう青さを増す。吸い込まれるような美しさだ。高山植物の咲く崖上から、一気に身投げしてしまっても惜しくない、もしこの湖が我が物となるな

らば。この魅入られる美しさを、アイヌは魔にたとえたのだらう。

緑が覆うカルデラ内部と、濃い青のコントラストが際立っている、まるでこの世との境界であるかのよう。湖の底からは地下水が湧いているのか。火山ガスが溶け込んでいて、元来は魚も生息していなかった。湖面までは切り立っており、近づくことができないうことで、なおさら心を奪われる。

タカがはるか下方を旋回している。それだけ高い位置から眺めているわけだ。対岸のカムイヌプリの中腹辺りの高さを、悠然と翼を広げて飛んでいる。生きる者を拒絶するか、さもなければ呑み込んでしまう魔力に耐えながら。下手に崖に近づこうものなら、湖面に叩きつけられることだろう。

釧路川をカヌーで下る

屈斜路原野のユースゲストハウスに泊まった。ここは大変な気があって、予約を取るのも容易ではない。プロの板前の腕を持つオーナーによる和食は、だしの効いた上品な京風の味つけである。食事だけでも満足してしまうが、このユースホステルはさまざまなイベントも企画している。

朝食を終えてから、少し散歩することにした。ユースホステルの前はビート畑、その先に広がる白い花はジャガイモ、紫かがった花もその一種で、ベニマルという品種だそう。黄金色に穂が直立し、遠目には絨毯のように見えるのは麦畑である。これだけ広い畑の農道を歩きながら、人っ子一人いない。中

原中也はらちゅうや訳のランボオ詩集を朗読しながら歩く。鳥のさえずりに耳を傾けながら。

十一時少し前に、カヌーを載せた車に乗り込んだ。長靴にヤツケ、それに救命胴着を身につけた。スタート地点は屈斜路湖の湖畔、釧路川へ流れ出る手前である。僕が乗り込んだカヌーは三人乗りで、前はヘルパーの女性、後ろはヘルパーの男性。三人一組で、合計二艘にそうで川下りすることになった。

ゆっくりと湖面を進んでいったが、橋をくぐったところで、川の流れの意外な速さに驚く。幅はまだ広くはないので、二級河川といったところか。川岸には木の枝が倒れかかり、水中には倒木も横たわっている。茂みの下の岩場にはアオサギがいる。

辺りには人工物が何もなかった。

カヌーを操縦する上で、一番後ろの男性の役割は大きい。僕自身も多少はかき漕いでいたが。しばらく進んだのち、淀みで休むことになった。ここは鏡の間とも呼ばれ、川底から清水が湧き出ている。水温も七度ほどで、本流と比べてかなり冷たい。底では黄緑色の水草がなびき、表面にいったばい空気の泡をまとっている。水中にはウグイの稚魚が群がり、岩の上にはカモの幼鳥ひなどりが留まっている。

水底みなぞこに根を張ったクレソンが、水面から白く可憐な花を覗かせている。川のあちこちに小さな渦があり、清水がこんこん湧き出ている。ボーリングと呼ばれるもので、上を通るとカヌーは左右に揺れる。

同じ川でも進む側によつて、かなり流れの速さが異なる。ゆるやかな淀みを探し、カヌーを止めると、櫂をテール代わりにして、お握りとお茶で簡単な昼食をとる。中州の茂みに隠れていると、アフリカのジャングルを舞台にした作品、コンラツドの『闇の奥』の一場面を思い出してしまふ。

カヌーを本流に戻した。しばらく一直線に進んだところで、正面に泡立つ早瀬が見えてきた。先を行くカヌーは激しく揺さぶられ、しぶきを浴びている様子。続いてこちらも早瀬の中へ。前の女の子と僕はこぐのをやめ、後ろの男性にすべてを任せる。前日にはここでカヌーの一艘が転覆し、泳ぐ羽目になった人があるとのこと。うねるような急流では、たとえ救命胴衣をつけていても、泳ぐのは至難の業だったろう。

前後に激しく揺れたけれども、左右に傾くことはなかった。で、難なくゴールにたどり着けた。前の女の子はびしょ濡れになつていたけれど、やすらぎとスリルが同居した、貴重な体験だった。

ユースゲストハウスに戻った後、マウンテンバイクでサイクリングした。屈斜路コタンアイヌ民族資料館に向かった。横に建つチセ（アイヌの民家）の前では、アイヌのお婆さんが民芸品を売っていた。民族の文様を刺繡ししゅうした巾着を買った。

資料館には祭祀に関する資料や、漁労に用いた丸木舟などが展示されている。これに関しては、白老のポロトコタンでも見たことがある。アイヌは縄文人が小進化したと言われるが、才

ホーツク海沿岸の民族とも混血しているのだろう。別の店で文様入りのバンダナとムックリ（口琴）を買った。そこでアイヌの衣装を着せてもらい、写真も撮ってもらった。

和琴半島を目指した。サイクリングの途中で、「屈斜路湖一おいしいイモダンゴ」というのを食べた。ジャガイモに片栗粉を混ぜ、醤油と砂糖のたれをからめたもので、素朴な味だが食べ応えがあつて飽きない。カルデラ湖の岸辺に腰を下ろし、水面を行くボートや、網を持って魚取りしている子供たちを眺めた。

釧路湿原の展望台

翌日は雲が多かった。釧網本線の塘路駅とうろで下車したが、駅前には商店が一つと、ライダーハウスがあるばかり。とりあえず、二つの川が合流する二股と呼ばれる所に向かった。ゆるやかに流れる川が、蛇行しながら合流する地点で、ここまで来ると釧路川も川幅の広い、平原を流れるにふさわしい風格を持つようになる。

川ではカヌーが滔々とゆく流れに身を任せていた。昨日の急流も素晴らしかったが、平原をゆったり進み、地平線を眺めるのも良かったろう。ただし、上流のような清らかさは、すでに失われていたが。

その後、塘路湖に沿って進み、サルポ展望台に登った。縄文海進によって内陸に入り込んだ海は、気温の低下ともに沖に退き、かつての湾が湿原へと変化したというが、残された海が下方に広がる塘路湖となった。いわゆる海跡湖である。

塘路からはノロツコ号という、釧路湿原観覧用のトロツコ列車が出ていた。遊園地の乗り物のような車両を、ディーゼル機関車が時速三十五キロののろろ運転で引いていく。

湿原は丈の低い草木しか生えない。日本で唯一地平線が見られる場所だ。アフリカの平原でも眺めるような自由がある。視界に入る広がりすべてが、自分の魂の中に取り込まれる解放感。隣の席にバード・ウォッチングをしているおじさんがいた。

「あそこを見てみる。ツルがいるよ」

民話の中にしばしば登場しながら、ビデオでしか見たことがなかった鳥が、小川の中で何かをついばんでいる。近くに障害者らしい娘さんと、お母さんが座っていた。ツルの姿を見て幼児のような純真さで喜ぶ姿に、お母さんの方も幸せそうに微笑んでいる。

他に何があっただろうか。何もないことが素晴らしい。北海道の中で自然を満喫したかったら、やっぱり道東だな。車内はなごやかな雰囲気で包まれていたが、まだ釧路湿原の一部を垣間見たに過ぎない。

釧路駅に出た。駅弁のカニ飯を食べていると、十二年前に来

た時のことを思い出した。春採湖のそばのユースホステルに泊まったんだっけ？ アナウンスに混じって、カモメの鳴き声をするのも港町ならではのでないか。

実は、もう一度しつかり、釧路湿原を見ておきたい気持ちで募っていた。一周する観光バスがあるというので、迷った末に乗ることにした。本当は車かバイクがあれば、自分の好きな場所でのんびり過ごせるわけだが。観光バスを毛嫌いするのはもったいない、限られた時間で要所をめぐってくれるのだから。

釧路空港経由でまず、丹頂鶴自然公園へ向かった。ここは柵の内側で自然に近い形でツルを飼い、人工孵化も行っている。ただし、飛び立てないように、羽の一部を切っているらしい。これではツルの魅力は半減する。湿原で自由に羽ばたく姿を思

い浮かべれば。

数ある展望台の中で、コッタロ湿原展望台は圧巻だった。高台の位置から真下に広がる沼と小川の流れ、三方に広がる草原を一望できるからだ。湿原のあちこちに、一体何羽の丹頂鶴が生息するのだろうか。

ここは縄文時代に海進し、湾が広がっていた所である。六千年前に同じ場所に立った人は、午後の日射しに輝く海原を眺めていたわけだ。午前中に見た塘路湖も、取り残された海が淡水化したもの。長い歴史の中で、海は沖へ沖へと遠ざかっていった。湿原の乾燥化は、人の手によるものだけではなかったのである。

やがてこの湿原も草原となり、歳月を経て鬱蒼とした林へと変わっていく。大雨の後に残された水溜まりが、日に照らされ干上がっていくようなことが、ここでは人間の目には分からぬ速度で進んでいく。湿原に生きる者たちの運命を左右するのは、大地を動かす大きな力である。コッタロ湿原展望台は、自然の営みの男性的な側面を垣間見せてくれた。

それに対して、釧路湿原駅に近い細岡展望台は、いかにも女性的な温かみを感じさせる。平らな草原が彼方まで続き、滔々と流れる釧路川が蛇行する。ほとんど標高の差はない。湿原において、川は気紛れに流れを変える。跡には三日月湖が、魚や水草とともに残される。

西日を浴びた湿原に、高い木はまばらにしか見えなかった。

一面黄緑色に萌もえている。川の兩岸のみが、灌木の緑に映えている。小さなことにはこだわらず、心の赴おもむくままに流れを変える川。大きな懐ふところを思わせる草原の広がり、母性的なやすらぎを感じたのは、自分だけではなかったらう。

翌日、時間を持て余した僕は、米町公園よねまちに足を運んだ。展望台から眺める風景は、横浜でよく見かけたもので、ちっとも変わり映えしない。ここには石川啄木の『一握いちあくの砂』に収められた歌碑が建っている。

しらしらと氷かがやき千鳥なく 釧路の海の冬の月かも

知床のユースホステルで出会った、啄木の史跡を巡っている文学青年のことを思い出した。彼もここに足を運んだのだろうか。

その日の昼下がり、僕は釧路空港から、羽田行きの飛行機に乘った。機内では旅の記録をつけていた。最初に飛行機に乗り遅れるというハプニングはあったが、結果的にはいい方向に進んでくれた。一面の雲海の下は青空が広がり、熾烈しれつな光線が差し込んでくる。高度が上の分だけまぶしい。

空気が澄んでる旭川

三度目の旅行から、しばらく僕は北海道に足を向けなかった。入院していた父は旅行の翌年に亡くなり、それから沖繩、小笠原、韓国、チベット、青海省など、行動の幅を広げていった。ところが、二〇〇二年に日本語の研究をするために、不惑の歳を前にして、大学院に入り直すことになり、一転して旅行の費用を工面くめんするのもきつくなかった。

それからは信州や東北など、比較的近場を巡ることが多くなった。今回、北海道を旅したときには、何と五十の坂を過ぎていたのである。鏡で顔を見なければ、とても信じられないことだが。

父が亡くなったとき、僕は祖先が生きた静岡県富士市を訪れ、先祖代々の墓に詣でたり、曾祖父の戸籍を調べたりして、自分のルーツをたどろうとした。そして、今度は友人のお父さんが亡くなり、幼いときに父親が育った名寄の家、今は存在しない家の跡を求めて、旅することになった。僕はそれに同行したというわけである。

ようやく秋らしくなった九月の末、職場での仕事を片づけて、慌ただしく羽田に向かった。出発は午後三時半となっていたが、飛行時間そのものは一時間ちよっと、五時過ぎには新千歳空港に着陸した。

懐かしの北海道だが、晴天だった東京とは打って変わり、通り雨が降っていた。到着ロビーに向かうと、友人が待っていた。久し振りだったので、話題が尽きることはない。切符も手配してくれていたもので、そのまま、旭川行きの特急カムイ号に乗車できる。新空港の地下まで支線が延びているのだ。

北海道の涼しさには驚いた。クーラー効き過ぎといったところで、上着を一枚羽織ることにした。以前は八月か九月初旬までに来ていたので、気温の低さは予想していたのだが。しかし、これはまだ序の口だった。

旭川駅に到着したのは、午後七時半。たしか低いところを走っていて、車窓から町の様子も見えたはずなのだが、何と高架上の新駅となっていた。ホームに下り立った途端、余りの寒さに身震いした。気温は十度、九月末にして真冬並みじゃないか。

とりあえず、ホテルにチェックインした。夕食は予約してなかったもので、外で腹ごしらえすることになった。

旭川の大通りの広さには驚かされた。何で広いのかというと、冬の積雪を考えてのことらしい。積み上げられた雪のために、道幅が狭くなることを見越して、道路が建設されたというわけだ。

夜の空気は身が引き締まる分、冷ややかで澄んでいる。車の交通量が少ないということもあるが、原発事故による汚染物質が舞ってないためだろうか。こんなに空気がおいしいのかと、久し振りに実感したのだった。

友人は札幌の出身なので、北海道の人なら誰でも知っているという、みよしのの餃子に連れて行ってくれた。カレーと一緒に

に食べるところが、北海道ならではのようだ。確かにシンブルながら、B級グルメの味がする。しかも、セットで五百円足らず。ただ、旅行の初日の夕食としては、ちよっぴり物寂しい。

夜道を歩いていたら、旭川ラーメンの店が開いていた。濃厚な味噌味が特徴で、肉と野菜の旨味がよく出ている。具を食べるたびに、口の中に新たな味わいが広がる。食べすぎではあったが、これは本当にうまい！

静まり返った朱鞠内湖

翌日はやや雲が多かった。ホテルをチェックアウトすると、旭川駅近くでレンタカーを借りた。士別経由で朱鞠内湖に向かうことになった。朱鞠内とはアイヌ語で suna-ri-nay 「石が高くある川」を意味し、昭和の初めまでは大地を川が流れるだけだった。自然の湖のように、変化に富んだ美しい湖岸を持つが、雨竜川を堰き止めた巨大な人造湖なのである。

なぜ訪れたかったかというところ、幼い頃に父の地図帳で見つけたとき、大きさと入り組んだ複雑な湖面に、興味をそそられたからだった。確かに、朱鞠内湖は湛水面積では、現在でも人造湖日本一の広さである。原生林に囲まれた湖面は、霧に覆われ

た神秘的な顔も見せる。

僕が二回目に北海道を訪れた一九九〇年代初頭は、まだ湖岸を深名線のディーゼルカーが走っていた。雪深い日本の厳冬地帯でのダム建設は難工事、鉄道が機材の運搬に使われたのだという。

朱鞠内湖の水面が見えてきた。すでに昼近くになっていた。高台に車を止めて、丘の上から見下ろした。水没をまぬかれた場所は、岬や小島を形作り、白みかがった青い水に囲繞されている。海岸線のように入り組み、澄み切った静謐な空気に満たされている。

展望台から下って、キャンプ場まで移動した。湖の岸边まで

はかなり距離があつた。天然の湖のように、岸边がゆるやかに湾曲している。湖水は澄みきつており、水面にはほとんど動きがない。氷水のように冷え冷えとして、凍つたような美しさを呈している。鳥の声も時折聞こえる程度で、静まり返っており、小島に生える白樺しろがほの根元を、いまだに靄が漂っている。

後ろの丘には慰霊碑が建っている。ダムが完成したのは昭和十八（一九四三）年。出かせぎの日本人、強制連行で連れてこられた中国人や朝鮮人が、タコ部屋で寝起きをさせられ、劣悪な条件で働かされていた。極寒ごっかんの気候と難工事による事故が重なり、二百名以上の犠牲者が出たとされる。生き埋めになり、最近ようやく発掘された遺骨もあるという。

冷やかな美しさ、静まり返った空気は、この地で行われた

過酷な労働による苦痛が、死後も封じられたことを反映しているのか。十月初旬といつても、本州の人間からすれば、もう晩秋のたたずまいである。しかも、山奥の人造湖であることから、人影はほとんど見られない。

恐ろしい悲劇を秘めているとはいえ、惹ひきつけて放さない美しさがあるのも事実だ。僕はしばらくここにとどまっていたかった。人の感情さえも凍らせる魅力があるのだ。また、人工のものがこれほど自然と調和しているというのも、一つの驚異だからである。

アオサギが一羽、湖面を滑っていった。対岸で小鳥が時折鳴き交わすばかり。彼方を音もなく、遊覧船が動いていく。沈黙という言葉がもつともふさわしい湖である。

かつての面影

朱鞠内湖の周囲を巡ったあと、母子里もしりのクリスタルパークに寄った。雨竜郡幌加内町ほろかないに位置し、非公式ではあるものの、マインス四一・二度の日本最低気温を記録した地区である。水晶をイメージしたモニュメントの前で、記念撮影をすることにした。資料館の中には気温の推移に関するデータが展示され、「日本最寒地域到達証明書」を、有料で発行してもらえる。

いよいよ、友人のお父さんが生まれた家、少年の頃に訪れたまま、遠い記憶にかすんだ家の跡を探す段となった。場所は中川郡智恵文村ちえぶん。現在は名寄市の一部となっている。地名はアイヌ語の「チエプ・ウン・トウ」（魚の沼）に由来する。

家はお祖父さんが亡くなった後、人手に渡って解体されたというので、当時の面影を手がかりにすることはできない。とりあえず、智恵文駅で車を止めたところに、宗谷本線の上りが入線してきた。ディーゼルカーが一両。

そう言えば、僕がまだ二十代だった頃、稚内行きちいの列車の中で、たまたま出会った大学生と語り合ったことがある。ふるさとで就職を決めるために戻ってきた彼が、宗谷線の名寄より北は見捨てられていると語っていたが、なるほどと思った。車両を改造したような駅舎で、もとより単線の無人駅である。ここに一日何本のディーゼルカーが止まるんだろう？

北海道の地名の多くはアイヌ語が起源だが、番地を言わずに「線」を用いる。例えば、智恵文一線、二線というように。大

地を大胆に区切って開発していった名残なのだろう。駅前道をまっすぐ進み、天塩川を渡った辺りは、トウモロコシ畑などが広がっている。

お祖父さんの家は、広大な農地の真ん中にあつた。隣家までの距離は、数十メートルもある。昔は農家だったというから、「大草原の小さな家」といった感じだったのか。現在は他人が新しい家を建てている。友人にとつても「ここだった」と言われても、実感が湧かないものだった。

幼い頃の記憶はそれほど遠い存在だったのである。近くには真宗大谷派の智恵光寺がある。赤いトタン屋根に白壁、いかにも開拓地に建てられた寺院といった面持ちである。アイヌ語の音を写したとはいえ、「智恵」という漢字を当てたところなど、

いかにもお寺の名前にぴったりな感じである。友人のお祖父さんとお祖母さんは、今、その境内の墓地に眠っている。

僕も父が亡くなった後、静岡県富士市、かつての富士郡伝法村にあつた本家の菩提寺ぼだいじや、幼い頃父に連れられた田子ノ浦の海を見に行ったものだ。自分のルーツをたどりたいという思いは、父を失ったことで湧き上がるから、友人がお祖父さんの家の跡を再訪した思いは、大いに共感できるものだった。

国鉄の分割民営化を境にして、北海道内の鉄道は三分の二が廃止されてしまった。道路が整備されるにつれて、一日数本しか走らない鉄道は、住民から見放されていったのである。そんな赤字ローカル線で、「赤字日本一」を誇った(?)のが美幸

線である。宗谷本線の美深ひふかから興浜北線北見枝幸きたみえさし駅までを接続する計画だったが、途中の仁宇布にうぶまで開通したところで、一九八五（昭和六十）年に廃止されてしまった。

ところで、旧美幸線の一部でトロツコを走らせているという情報を耳にした。観光客向けに、廃止路線の一部を復活する動きが、日本各地に広がってきており、鉄道マニアにとってはうれしい傾向である。

以前、宮崎の旧高千穂鉄道の路線跡を、トロツコで走つたのが忘れられず、今回の北海道旅行でも予定に組み込むことにしたのだ。旧美幸線のトロツコに乗るには、旧仁宇布駅に回る必要がある。智恵文を立った僕と友人は、トロツコ王国美深と名を変えた旧美幸線の終着駅に向かった。

トロツコを走らせている区間は、旧仁宇布駅から、高広の滝までで、そこからUターンして戻ってくるから、往復で十キロあり、一時間は見ておいた方がいい。十分前になったところで、待合室で運転に関する注意事項の説明を受ける。実際に出発したのは午後三時。運転は自動車免許を持っている人が行うので、友人にやってもらうことにして、僕はビデオを撮影することにした。

十月の北海道は、本州の人間からすれば、初冬ぐらいの寒さはある。手が凍えるというので軍手は借りていたのだが、ジャンパーを着けていても震えるほどだった。先を走っている男性は、一人でビデオ撮影もしているらしく、アクセルをかけようとなないので、ノロノロと進んでいくしかない。

途中無人の踏切がいくつかあるのだが、廃線のため、車優先となっており、トロッコの方が停止しなければならない。橋は欄干がないので、徐行運転する必要がある。

ペンケウニツプ川沿いに敷かれた軌道を、白樺の林や色づいた広葉樹の間を抜けていった。余りの寒さに震えたが、速く進めないし、線路は続くよどこまでも、といった感じである。片道だけで三十分近くかかってしまった。レールの枕木を見ると、かなり腐食している。これでは、スピードを出したくなくなるのも分かる。

折り返し点の高広の滝は、レールが弧を描いているのだが、余りに急なカーブなので、急ぐと脱線してしまいそうである。坂道になっているので、遅すぎると停止してしまう。

帰り道は、前のトロッコが速く進んでくれたおかげで、快適に進むことができたし、風に当たりながら、ビデオを四方に向けて余裕もあった。小雨がぱらついてきたものの、本降りになる前に、出発地点に到着できた。

凍えていたので、駅舎では甘酒を飲んでストーブに当たっていた。旧美幸線のホームに上がったたり、放置された寝台車両の中を覗いたりした。

緑の原野はいずこに

その日は歌登うたのぼりのホテルに泊まった。美幸線が北見枝幸まで開通していたら、そこにも駅が作られたはずである。ちなみに、一九七〇年代には、橋やトンネルを含めて路盤は完成し、線路を引くばかりになっていったというから、鉄道建設を進めていた側にとつては、仁宇布までで廃線にされたことは、無念の一語に尽きるだろうが、経費の面では壮大な無駄遣いをしたことになる。

翌日は朝からとても天気が良かった。午前九時にチエツクアウトし、友人の勧めでサロベツ原野に向かうことになった。歌登からはひたすら車で山道を下っていくと、宗谷本線の音威子おといねっ

ぶ府駅が見えてきた。地名の由来は、アイヌ語で「濁った川」を意味するという。中川郡の村であり、かつてはここから天北線が浜頓別はまどんべつ経由で、稚内まで延びていた。

「音威子府に行ったら、蕎麦そばを食べるんだよ」

これは友人がおばさんから、口癖のように言われてきた言葉だそうだ。ここで小休止することにした。人気ひとけのまばらなさびしい構内である。

昔はプラットホームに蕎麦屋があつて、乗客も蕎麦が食べられるように、駅にしばらく停車していたとのこと。改札前の駅舎で、老夫婦が出してくれた蕎麦は色が濃く、濃口のだし汁がかけてあつた。寒いので瞬く間に平らげてしまった。

車は天塩川に沿って道を進んだ。若い頃、稚内まで宗谷本線に揺られたことがあった。二時間経つても天塩川沿いで、全く代わり映えのない風景に退屈したものだ。道路は川の左側、宗谷本線は対岸の右側を走っている。やがて、天塩川は左に折れて日本海に注ぐ。

幌延ビクターセンターに到着したのは、昼下がりのことだった。彼方には利尻島が見える。あの島の海岸線を、自転車で駆け巡ったのを思い出す。よく見ると、山頂には雪が積もっている。もう冬が訪れていたのだ。いつか機会があれば、利尻山に登りたいものである。

センターの入口で記名した後、湿原の動植物の写真を見る。まだ咲いてる花などあるのだろうか。エゾリスやエゾシカ、キ

タキツネも住んでいるらしい。少し離れた位置にある、鉄骨を組んだ展望台上った。ここからは、サロベツ原野全体が見下ろせる。何だか秋の装いである。手前にあるのが長沼、その先にはパンケ沼が見えるが、そこまでは歩けそうにない。

この原野はかつて海底だったという。標高はせいぜい二メートルといったところ。もし津波が押し寄せてきたら、展望台にたどり着けるかどうか、生死の境を分けることになる。

展望台を下りると、湿原の木道を歩いていった。以前、友人がここを訪れたのは真夏で、草が青々して花々が咲き乱れていた頃だった。今、すでに初冬の趣となつて、ほとんどが枯れ草、広大なモノトーンである。

笹が繁殖したせいで、この湿原も乾燥化が進んでいるという。

手前に長沼が見えてきたが、渡り鳥はまだ来ていない。季節としては中途半端である。花もなければ鳥の姿もなく、あるのは荒涼とした光景と風の音だけ。

谷地眼やちまなこというのは、湿原に出来た泥の深み。牛でも落ちたら、呑み込まれてしまう。深さを測る棹さおが設置してあるので、実際に垂直に潜らせてみると、五メートル以上あった。湿原がかつては海だった証拠で、泥炭が均等には積み重ならなかったことを示している。

木道は途中で歩幅ほどの踏み板に狭まり、枯れ草に埋もれかけていた。行けども行けども風景は変わらない。パンケ沼はるか彼方である。人が通らなくなった木道は、すでに朽ち始めていた。歩くうちに二度も踏み抜きそうになった。危うく足を

くじくところだった。

足元は湿原の沼に沈みつつあった。友人が小走りで渡ろうとしたが、靴の中に水が入ってしまった。もう先に進む気はなくなった。戻ることにしたら、パラパラ降り出した。ふと木道の横を見た。茎が枯れたエゾリンドウが、押し花のように紫の花だけは色を変えずにいた。本降りにならないうちに、何とか幌延ビクターセンターにたどり着いた。

友人の話によると、以前感動したサロベツ原野は、幌延周辺ではなく、豊富とよとみの湿原センター周辺だったのだそうだ。車に乗り込み、海沿いの道を進んで、湿原センターに到着した頃には本降りになっていた。

拍子抜けしたまま、稚内方面に向かつて、海沿いの道を走っていった。すでに雨は上がっていた。道からシカが二頭飛び出そうとして、こちらを見ている。しばらく行くと、キツネが前方を横切った。

ノシャップ岬に到着した。アイヌ語のノツ・シヤム（岬が顎のように突き出たところ、または、波の碎ける場所）に由来する。風が強いせいだろう。辺りには低い木と草しか生えていない。

空はすっかり晴れ上がり、礼文島の平べったい稜線に、太陽が没しようとしていた。そそり立つ利尻島は、すでに色を失っていた。空が哀しみを帯びて、赤く燃え上がっていた。人々は立ち止まり、息を吞んで眺めていた。北海道に来て、これほど

美しい太陽を見たのは初めてだった。

稚内の町は狭い平地の背後に、せり出した高い丘が控えている。その上には自衛隊のレーダーが設置され、手前の台地には霊園が広がっている。宗谷本線の沿線には、牧場や草原が広がっているのに、北端に近代的な都市が築かれたのは、ロシアから北海道を防衛するためである。日露戦争から終戦までの間、南樺太が日本領だったので、国境ははるか北に移動していたけれども。ソビエト連邦崩壊後は、稚内からコルサコフ（日本名大泊）までの定期航路が再開している。

その夜は市内のホテルに宿泊した。夕食はかなり豪華だった。蛸たこしゃぶは、沸いたお湯にまず野菜やキノコ、ラーメンを入れて後、薄くスライスした蛸を、さつと湯通しして、味噌だれで

いただくものである。海老やホタテの刺身、ニシンの麴漬こうじけもあつた。タラバガニを半分にしたものが、一人一人に付けられていた。

大浴場の浴槽に浸ひかった。塩化物・炭酸水素塩泉というから、重曹を含んだ温泉である。柔らかな泉質で肌がすすべになり、適温でのんびりと疲れを癒せた。

どうせ雨だろうと思っていたら、快晴に近いほど晴れ上がっている。チェックアウトして向かった先は、稚内市内の大沼である。アイヌ人は「シユプントウ」、ウグイの沼と呼んでいた。砂州で海と隔てられた海跡湖である。ちなみに、渡島半島の大沼の方は、駒ヶ岳の噴火による堰止湖せきとめこである。

国道四十号線を行くと、展望台で車が止められるようになっていいる。ここから下りていくことにした。一眼レフのカメラをいじっている、友人が先に向かつて様子を見てきた。

「下の方に行くと、すぐ眺めがいいところがあるんだ」

階段を下りていくと、大沼の全貌を見渡せる地点まで来た。緑の草に囲まれ、温かな光に包まれた水面が、無数の光の粒を反射している。稚内はサロベツ原野と比べて、かなり温かいのだろうか。

大沼の北側へ車で下りていき、海側の平地へと出た。岸边には大沼野鳥観察館がある。数ヶ所に望遠鏡が設置されている。白鳥が来ているのかと眩くらくと、所員のおじさんが、あの望遠鏡で見られると指さしてくれた。

確かに白鳥が二羽、沼のほとりで羽を休めている。ただ、首を胴体につけているので、白い塊にしか見えない。

沼のほとりを歩くことにした。丘で海峽の風が遮られるため、ここはまだ初秋のように、草も青々としている。風がないので、沼の水も太陽の光を満面に浴びている。白鳥が首を上げているので、すかさず写真に撮影した。

水面ぎりぎりを小鳥が群れをなして飛ぶ。アオサギが羽ばたきながら着水し、湖面で安らいでいる。草原を見ると、ピンクや黄色い花が、まだみずみずしい姿で咲いている。

「以前見たサロベツ原野って、こんな感じだったのかな」

これだけの広さに、人の姿が一つも見られないことが素晴らしい。オフシーズンで平日ということもあるが。海側の空を飛

行機が下りていく。稚内空港にほど近いのである。声問川こえといがわへ続く水門の手前まで行ったところで、野鳥観察館へ引き返した。所員の話によると、今年はまだ渡りの数が少なく、年によっては十月の初旬に二千羽の白鳥がひしめいている。餌付けえづけをしているということもあるが、対岸にいる鳥は自然に生えた水草を食べているという。

次に向かったのは、宗谷岬だった。ロシア人に択捉島を奪われて以来、北海道最北端の地となった。記念碑の前で写真を撮ったのだが、歌謡曲「宗谷岬」(吉田弘作詞・船村徹作曲)が、右隣の石碑から流れてくる。

「サハリン(樺太)は見えるかなあ」

「稜線のようにも見えるけど、雲かどうか分からないね」と友人が答えた。

宗谷海峡には海底トンネルを掘るという話がある。青函トンネルの場合と比べると、本州と北海道には地質の違いがあり、断層を貫く大工事だったが、北海道とサハリンの間には違くないから、青函トンネルほどの難工事にはならないという。シベリアとサハリンの間の間宮海峡に、海底トンネルを掘る構想があり、それだけでは費用対効果が小さいので、宗谷海峡にもトンネルを掘って、シベリアと日本を鉄道でつなぐことに、ロシア側は積極的なのだが、日本側は一部の鉄道マニアが議論しているに過ぎない。

「日本とロシアは仲が悪いからね」

北海道生まれの友人も、これには否定的な考えである。やはり、ソビエト連邦が日ソ中立条約を一方的に破棄して、満州の日本兵をシベリアに抑留し、南樺太と千島列島を占領したことに不信感がぬぐいきれないのだ。しかも、スターリンは北海道を二分して、留萌と釧路を結んだ線の北半分まで、併合しようと画策していたのだから。

日本人がロシアに関心を持つのは、文学や音楽などの文化面に限られるのに対し、ロシア人は日本人が思う以上に、日本の経済・文化に関心を持ち、親日的であるのだが。

オホーツク海に沿って、車を南下させていく。かつて天北線が走っていたコースである。向かっているのは浜頓別の町であ

る。稚内からは百キロ近く離れている。薄日が射しているためか、海の面が緑色に見える。風いでも冷ややかで、人を受け付けようとしなない。

「僕が二十代の頃、初めて、オホーツク海を見て、色が違うのに驚いたんだよ」

友人も遠目ながら、非情な色に目を見張った。右折して浜頓別の中心に入る。住宅街が広がっている。天北線の駅がどこにあったか分からない。クツチャロ湖畔に向かった。「クツチャロ」とは、喉元を意味するアイヌ語で、湖沼こしやうの出口を表している。海跡湖であるから、波のない岸边といった感じで表情に乏しい。渡り鳥の姿もまだなく、原野は枯れ草ばかりである。

ちよつと中途半端なので、ベニヤ原生花園に寄ってみたが、

またもや雨がぱらついてきた。木道で岸まで歩くと、三十分近くかかるだろう。海まで歩くのはあきらめ、展望台からオホーツク海を眺めることにした。ガラス越しではあるが、海面はすでにモノクロで、辺りに人影はない。さびれた感じである。

あととは帰るだけ。峠をひたすら下っていく。名寄辺りから雨の降りが激しくなった。途中、トイレ休憩はしたけれど。旭川のレンタカーの店に、車を返したのは午後七時過ぎ。雨はようやくやんだ。ベンチに腰を下ろす。元の地点に戻ってきてしまったわけだ。初日の夜のことを懐かしんだ。

午後九時半に札幌駅に到着。友人と別れて、僕は一人で薄野すすきののビジネスホテルに泊まった。だが、僕の旅はまだ終わらない。

身の毛もよだつ迫力

朝になった。天気予報を見ると、どうやら雨降りである。一度は訪れたいと思っていた支笏湖しこくこだが、どうしようかと迷った。とりあえず、大通公園に行ってみた。最後に足を運んだのは、僕が二十八歳の時。まだ希望に満ちあふれていた頃で、ちょうどエリツインが、ソビエト共産党と闘っていた時期だったな。テレビ塔の展望台に上ってみた。樽前山の方は霧がかかっている。やはり、雨が降っているのだろうか。下におりると、すでにやんでおり、雲間から日が射してきた。これなら支笏湖に行けそうだ。

新千歳空港駅に到着すると、支笏湖行きのバスに乗り換える。

千歳市街を抜けると、どこまでも直線の道が続く。山道をダラダラ上っていく。多少カーブしても、ひたすら直線の道を進む。札幌からだときつい山道を越えるのだが。「高校の頃、その道を支笏湖まで歩かされたんだよ」と、友人がぼやいていたのを思い出した。

いきなり、バスは谷底に下っていく。どこまでも地の底へ落ちていくみたいに。終点に到着したが、支笏湖の湖面は見えない。さらに徒歩で下りにいく。

山体を吹き飛ばした巨大なカルデラには、溢れんばかりの水が満ちている。海の潮目のように、手前が青、沖が緑に染まり、長々と湖面に線が引かれている。しかも、うねりが高く、岸に近づいた波は、荒海のように岸壁を打ち、鈍いうなりを上

げて飛沫を上げる。

三六三メートルの深さを誇る湖は、底が海面下にまで達し、琵琶湖に次ぐ水量を誇る。それほどの水を抱え込んでいるため、波が立つたびに、たぶんたふんと深みから音がする。人を寄せつけようとせず、迂闊うかつに近づく者を湖底に引きずり込み、二度と地上に戻さないかのように。

この湖の主は深みに姿を隠している。分身である風不死岳ふうぶしだけと樽前山は、黒雲を山上にいただきながら、湖面全体に睨みをきかす。アイヌの神話でも、この湖には怪魚が住んでいて、地震を起こしたり、刃向かう者を湖底に引きずり込んだという。

今までこれほど恐ろしい湖を見たことがない。支笏湖、アイヌ語のシコットー(大きな窪地の川の湖)が語源だが、日本語に

なった途端、死骨という陰惨なイメージをまとうようになった。その点では、アイヌ語のウシヨロ(入江)が、下北半島の恐山の語源であり、死者が集まる霊場となった経緯と似ている。生贄いけにえとなった者の骨を水底に溜め込むかのように、湖底には流木が水草にからまっているという。

雨が降ってきた。レストランで遅い昼食をとった。その間に、通り雨は過ぎていった。ビジターセンターを見学する。支笏湖の成り立ちに目を見張った。カルデラが形成された三万二千年前、火砕流が札幌を襲って日本海に達したこと。円形のカルデラに風不死岳、次いで樽前山が生まれ、現在のいびつな円形の湖になったことなど。湖畔に生息する野鳥や動物、熊やウサギ、

リスなどが、写真や剝製で展示、説明されている。アイヌのおばさんの店に寄り、ムックリ（口琴）を目にする。懐かしくな
って買った。

岸辺を歩くことにする。雲間から日が差ししてきた。湖の怒りは解けたようだが、広大な水面は底知れぬ力をたたえている。山線の鉄橋のたもとに立った。旧王子軽便鉄道が、苫小牧工場から湖畔まで引かれ、資材以外に観光客も運んだことを知った。廃止されたのは一九五一（昭和二十六）年だという。

レールが外された鉄橋は、今は観光客の遊歩道の一部となっている。湖水に触れられる所まで来た。緑がかつた北の海を思わせる湖水に、恐る恐る手を伸ばす。冷たい。冷蔵庫で冷やした水のような。こんな湖に落とされたら、たちまち心臓が止ま

ってしまう。やがて日は暮れてゆき、ようやく湖も眠りの時を迎えた。

晴れ上がった空に闇が迫りつつあった。波も静まって、昼間の恐ろしい風貌も影を潜め、威厳に満ちた余裕を湛えている。藍色に変わった水面と、燠火に似た残照のコントラストが美しかった。

厳冬の寒さが追ってきた。風邪を引いてしまいそうだった。売店に駆け込むと芋餅を食べ、コーヒー牛乳を温めてもらった。精気を養ったところで、見納めにもう一度、湖畔まで下りていった。

湖は夢うつつにまどろんでいた。だが、闇に覆われながらも、水底の主が目を閉ざすことはないだろう。黒い水面は息をして

いる。夜明けを待っているのだ。支笏湖の迫力に圧倒されたのは、旅の締めくくりとしてふさわしかった。

階段を上ってバス停に出ると、すでに電灯がともっていた。待合室で寒さをしのいでいる人もいる。新千歳空港行きバスに乗り込んだ。飛行機を待つ間、携帯電話をチェックすると、友人からメールが来ていた。

「支笏湖に行けたんだね。もうすぐ北海道から内地に行くんだね。今回の旅は非日常的で思い出になりました」

一日だけの一人旅だったが、途中で別れた彼の言葉を聞くと、ちよっぴり心が和んだ。午後八時発の東京行き日航機に乗り込む。第四回目の北海道旅行は終わった。

阿寒湖畔に日は落ちて

北海道を旅するのは五回目である。前は二〇一四年だから三年ぶり。では、今回の旅の目的は？ と問われたら、若き日に訪れた地の再訪と答えよう。同じ場所を繰り返し訪れても、初めての時の感動はないと言われそうだが、三十年余りの歳月を経ての再訪なら、これはわけが違ってくる。

お盆明けの八月中旬、友人と羽田空港を飛び立った。窓の外は雲海が広がっていたが、風は強くかなり揺れた。到着三十分前には、襟裳岬えりもみさきが見えてきた。高度が下がっていたので、波打ち際の様子まで見える。あれが釧路の街だと思ったたら、低空で通過してしまう。空港は釧路湿原の方にあるのだ。

午後二時半前に着陸。到着ロビーに出た途端、余りの寒さにくしゃみが出た。とても真夏の気候とは思えない。北海道の中でも道東は気温が低く、八月でも二十度を切る日がある。原因は寒流が流れる上を渡った風が、雲や霧となって太陽光線を遮るからである。

レンタカーの会社の車に乗り込み、向かいの営業所へ送ってもらおう。数台の車を紹介され、グレーの最新式を借りる。

「釧路湿原で一番近い場所はどこですか」

教えてもらった地点をナビに入力。あとはアナウンスに従っていくだけ。若い頃のドライブとは大違いだ。すぐに出発！天候はまずまず、雲は多いが日が射してくる。

釧路市湿原展望台は、道道五三号線沿いにある。西洋風の城

をイメージした茶色い建物。入館は有料で五百円ほどかかる。ここからは、壁と林で視界が遮られている。中には「水の大地」釧路湿原を再現したジオラマや、ライブ映像も見られるようだが。ガラス越しではなく、肉眼で観察したいと思っっているなら、サテライト展望台というのが遊歩道の先にあるらしい。広葉樹の林の中をしばらく歩いていったが、視界はなかなか開けてこない。

ようやく展望台に到着した。以前に釧路湿原を訪れたのは、二十年ほど前のことである。どうも記憶していたイメージとは異なる。それもそのはずで、細岡展望台とは反対方向から、湿原を見ているからだ。ここからだ、と、視界は開けていても、地平線も川の流れも見えない。しかも、南側には釧路市街の住

宅地や煙突が見える。ちよつと絵にならない感じだ。

写真とビデオで撮影。元来た道を戻らずに、順路を一周することにした。谷に下りていき、つり橋を渡り、山道を上つて元の場所にたどり着いた。登山しているように汗ばんでいる。元の茶色い建物が見えてきた。レンタカーに乗り込んで、あとは阿寒湖を目指してひた走りする……。

阿寒湖はカルデラに出来た堰止湖だという。南東側から阿寒川が流れ出している。そのあたりは箱根カルデラに出来た芦ノ湖とよく似ている。毬藻まりもの生息地として有名である。湖岸近くまで原生林が茂り、道路が接しているのは、南側の阿寒湖温泉だけ。遊覧船に乗らなければ、湖の全貌をうかがうことは難し

い。

ニュー阿寒ホテルシャングリラに到着した。チェックインして客室に荷物を置いた後、阿寒湖の湖畔を散策することにした。ちよつと日暮れ時だった。山影に日が沈むと、空はゆつくり色あせていく。その時、遊覧船が船着き場に近づいてきた。紫色を帯びた湖水が、ゆらゆらとさざ波を寄せてきた。岸でちやぷちやぷ戯れている。他の音は消えてしまった。シャッターを切る。詩情を醸かもし出す風景だった。

夕食はバイキングだった。寿司や蟹の他、スペアリブなど多数の肉料理があった。部屋に戻ると、阿寒湖の湖上に船が浮かべられ、お盆の送り火を載せた灯籠流しが行われていた。赤い光の点が無数広がり、黒い湖面をほのかな光で彩っている。

さて、午後十時を回ったところで、屋上にある露天風呂に向かった。海水パンツをはいて外に出ると、夏といっても北海道の夜は寒い。上に出た途端、目を見張った。屋上の端まで、厚いガラス張りのプールとなっており、ぬるめの湯が張ってあったからである。

阿寒湖の湖面はすでに闇の中に沈んでいた。雲が多いせいか、星は余り見えなかったが。その代わり、向かいのパネルに光の祭典のような映像が現れ、ロマンチックな音楽が流れていた。浴槽の中は薄暗いので、互いの顔もぼんやりしか見えず、人々の歓声やささやきが響く。何とも幻想的な空間だった。

カプルや友人と肩を並べて、暗い湖面を見下ろすのもよし、水面を照らす光の戯れの中で、手を握り合うのもよし、童心に

返って皆はしやいでいる。このホテル最高のもてなしだった。

サロマ湖は変われど

翌朝は雲が多かった。阿寒湖はろくに見ていないのに、友人の望むままにオンネトーに向かっていた。アイヌ語で「大きい沼」を意味するのだという。何だか聞いたことある地名だと思っただが、オンネトーは根室半島の付け根に同名の塩水湖もあり、温根沼という漢字が当てられている。

今回向かったのは、足寄町あしよろにあるオンネトーで、時間によって水面の色が変わることから「五色沼ごしきぬま」とも呼ばれる。ただし、「五色沼」は裏磐梯うらばんだいにもあるから、地名の重複ちゅうふくを避けるのは容易ではない。雌阿寒岳めあかんだけの噴火による堰止湖で、サンショウウオやザリガニが生息している淡水湖である。

オンネトーの水は緑がかっていた。これは雲が多いからだろうか。雲が切れるにつれて、岸辺の葦が照り映えてきた。ただ、雌阿寒岳は雲がかかり、山頂が見え隠れしている。ふたたび車に乗り込むと、岸に沿って進んでいく。南の端には国設野営場、キャンプ場があった。

その辺りは水深が浅く、水底は土の色を映して、茶色から黄色、緑色へとグラデーションを作っている。セミが鳴いているのだが、本土のものと比べると妙に甲高い。エゾゼミというらしい。

オンネトーをあとにした。今回の北海道旅行は、大学生の頃に訪れた土地を、五十過ぎとなって再訪しようというもので、

サロマ湖は二十一の時から目にしていない。一体どんな感慨を抱くだろうか。

目的地はサロマ湖畔のワツカ原生花園。サロマ湖とオホーツク海を仕切る砂州にある。カーナビで検索すると、午後四時過ぎに到着と出た。ただし、実際にはそんなに時間はかからないだろう。道がすいているし、ほとんど信号がないからだ。

しばらく進んでいくと、道の駅が見えてきた。かつての北見相生駅である。国鉄が分割民営化されて以来、北海道の鉄道は三分の二が廃止されてしまったが、僕らが学生の頃には、まだ鉄道網が存続していたのだ。そこは石北本線の美幌駅から延びていた相生線の終着駅だった。今はレールと車両を残す鉄道公園に変わっていた。客車はライダーハウスとなっており、一般

の入場はお断りであった。

能取湖が見える。遠浅の岸边はなだらかなカーブを描いている。サンゴソウはまだ赤らんでいなかったが。記憶がよみがえってきた。二十一歳大学三年だった僕は、初めての北海道旅行で、網走から湧網線のデイーゼルカーに乗って、今日にしている風景を見たのだった。紅に染まったサンゴソウ。聞いていた通りだ……。思い出したというだけではない。かつて目を見張った時の感動まで、よみがえってきたのだ。青年だった頃の自分が、心の中にまだ生きていた。

時計を見ると、午後二時過ぎである。湖岸にある食堂に入ると、広い店をお婆さんが一人で切り盛りしていた。地元の人が

懇親会こんしんかいを開いていた。僕と友人は、帆立貝入りのカレーを食べた。店の壁には、湖岸を走っていた湧網線の蒸気機関車とディーゼルカーの写真が飾ってあった。かつての線路跡は、今ではサイクリングロードとなっている。車窓で眺めたのと同じ風景を、ペダルを踏みながら楽しめるというわけだ。

オホーツク海が近づいてきた。常呂川ところがわを渡っている。海側にはかつて湧網線が走っていたはずだ。恐らく坂の上辺りに常呂駅があったのだろう。人気のないさびれた無人駅で、低いホームに人影が現れるのは、ディーゼルカーがゆっくり入線してくるときぐらい。廃止された現在の方が、よほど開発が進んでいゝる。あの孤独なランナーの休息所が、バスターミナルに姿を変えてしまったとは信じたくない。

栄浦大橋さかえうらを渡ると、ワツカ原生花園に到着した。ワツカとはアイヌ語で水を意味する。ネイチャーセンターに駐車したのだが、大学生の頃の記憶と一致しない。あの時は栄浦までバスが出たのだが、湖の東側から出てくって回っていった気がする。頭が整理されないまま、ネイチャーセンターで自転車を借りることにした。午後三時過ぎだった。五時半までに戻るように言われた。

友人と走っていくと、後ろから馬車が走ってきた。のどかな感じがして、ハマナスの咲く草原としっくり合う。しばらく進むと、T字路に出た。どうやら馬車はここで引き返すらしい。左に曲がっていくことにした。

オホーツク海もサロマ湖も見えない、砂洲の中央を走っているからだろう。空は快晴になっていた。海は青いが緑がかっている。かつての記憶と、目に映る光景が噛み合わない。あの日は海も冷たい緑色だったし、オホーツク海にたどり着いてから、ヒッチハイクもしてしまった。歩道をちよつと広くした道路を、軽トラツクが通過していった。あんなのに乗せてもらったんだな。竜宮街道という名で思い出した……。

ようやく合点がいった。当時は栄浦大橋がなかったのだ。竣工しゅんこうしたのが昭和六十三年だから、前回訪れた四年後ということになる。ワツカネイチャーセンターもなかったはずだ。やはり三十年余の歳月の隔たりは大きい。

自転車で二キロも進むと、湿原の彼方にコンクリートの橋が見えてきたが、あんな丈たけの高い無機質な物はなかった。風景に合っておらず、何だか浮き上がってしまっている。あの日の僕は、名古屋大学のカップルと一緒に、営林署のおじさんから、オホーツク海でのホタテ貝養殖や、次々に押し寄せる流氷について教えてもらったのだった。

橋はもつと低かったはずだ。湖口に流れ込む海水が、貼り付けられた鉄板をはたはたと叩いていた。水面はすぐそこに見えていたのに、今でははるか見下ろす形になっている。

橋を渡って、植林した林の脇を進んでいくと、ついに行き止まりとなった。砂州を縦断じゅうたんすることは想定されていない。群生する杉はかつて見た時よりも高く、鬱蒼と光を遮っている。

昼なお暗い先にはオホーツク海があるのに、波音すら聞こえてこない。

行き止まりの手前に、湧き水が出る箇所があった。ワツカというアイヌ語は、飲める水を意味している。砂州だと塩水しか得られそうにないのに。水飲み場にはキツネが出てきた。人を恐れる様子はない。動きはすばしっこいから、ビデオで追っかけてるうちに見失った。人工の林もすっかり風景の一部となっている。棲みついた最初のキツネは、この砂州をてくてく歩いてきたのだろう。かつての僕のように。

日はすでに傾いていた。もう戻らなければならぬ。自転車にまたがったまま、橋の上から、オホーツク海とサロマ湖を仕切る砂州を見下ろした。湖面は光を受けて輝いている。海は風

いで遠方がかすんでいる。三十年前とは変わってしまった。ここにはまだ野生の大地が残っていた。原生花園には白い花、黄色い花、赤いハマナスの花と実もあった。視界が大きく広がって、とらわれない開放感があった。大学生の頃の自分には見れなかったが、かつて足を運んだ地に立つ実感はあった。

空には月はなかった。月を見て、地球と見紛みまがうこともなかった。あの日よりも温暖だし、海も緑がかっていない。横には友人もいて、孤独でもない。ただ記憶の中では、かつての自分が生きていた。

そのとき、砂浜に不思議な物を見つけた。もちろん、幻覚ではない。枝を円錐状に支え合わせて、テントの骨のように組ん

であった。燃え上がる炎を、イメージしているのだろうか。動きを止めた火は、海岸に作られたオブジェに見える。作った人間はいなくても、意思が形を取った存在だった。

時間に余裕があるので、T字路の箇所を越えて走っていく。そのとき、かつての記憶がつぶさよみかえった。ああ、この風景だ。あの日より晴れているが、日も西に傾いているが、確かにこの風景だ。坂道を下っていく。かつてはここを反対に上って、初めてオホーツク海を目にしたのだった。そこには緑がかった、冷たい北の海があった……。

もう戻らなければならぬ。日が傾いた中を、必死に自転車をこいでいく。ネイチャーセンターに着いたのは、五時半少し過ぎだった。車に乗り込むと、僕は一方的にしゃべり続けた。

友人は圧倒されている様子だった。過去と現在を照合する独り言に。

知床は記憶の果てに

サロマ湖との再会を果たした僕は、その夜、網走湖畔のホテルに泊まった。窓の向こうに広がる湖は、対岸まで緑色によんでいる。動きのない動画を見せられているような。阿寒湖がどれほど美しかったか、改めて感じさせられた。朝風呂を浴びて朝食をとると、急いで車に乗り込んだ。

いよいよ、知床に向かって出発！ 網走市内はすぐに通過し、釧網本線に沿っていく。友人の話では、北海道では列車を汽車と呼ぶんだそうだ。電化されていない路線が多いからだろう。おしゃべりするうちに、小清水の原生花園に寄りたいと言われた。

本当は早く知床に向かいたかったのだが。駐車場に下り立つと、すぐ脇に原生花園駅があった。こぢんまりとした可愛い駅だ。そのとき、過去の記憶がよみがえった。déjà vu、既視感があったのだ。三十三歳の時、知床を二度目に訪れたとき、女満別空港発ウトロ行きのバスは、乗客が僕しかいなかった。運転手がとても気さくな人だったので、勧められるままに下車し、目の前の風景を写真に収めたのだった。踏切があったのも、目の前に瀟沔湖とうふつこが広がっていたのも思い出した。

駅前からは視界を遮る物は何もない。彼方の対岸まで、湖岸に広がる原野を一望できるからだ。柔らかな日射しが水の色も、草花の色も鮮やかにしている。標高の低く細長い地形は、サロマ湖で見たものと似ている。湖が汽水であること、海から湖を

仕切るのが砂州である点でも同じだ。唯一の違いと言えば、国道と鉄道が砂州を縦断している点だろう。

今回は原生花園の丘の上に立ち、オホーツク海の方も見下ろした。ここはワツカ原生花園よりも花が咲いている。黄色や白、赤いハマナスに混じって、だいだいいろ 橙色の百合なども咲いている。花の間を蝶が舞っていた。植林などされておらず、開放感が味わえるはずだ。

ちなみに、原生花園駅は臨時駅で、ゴールデンウィークから十月末までしか止まらない。北海道の冬は長い。周辺には民家がないため、観光客が来なければ、乗降する客もないのだ。無人駅ではあるが、今日は保線員が大勢来ていた。一年の大半は広大な湿地帯といった感じだが、花の美しい期間だけが、人

々のにぎわいが見られる。行く手の斜里岳は、山頂だけが雲をかぶっていた。

知床の玄関口は知床斜里しれとこしやり駅だが、レンタカーなので通過した。いよいよ知床が近づいてくる。北海道の中で最もワイルドな自然が残っていて、それを目当てに若者が集まってくる。僕の青春の思い出が詰まっている地だ。とりわけ心をとらえたが、雄壮な姿の滝だった。その一つが、知床の中心ウトロに入る前にあった。オシンコシンの滝である。

三十三歳の時の旅では、「知床夕陽のあたる家」ユースホテルで知り合った文学青年と、滝の下まで上っていったはずだ。道路脇からでは、滝の一部を左方からしか眺めることができた。

いので。行き当たりばつたりの僕とは大違いで、下調べをよくしていた。

車を止めて階段を上っていく。轟とどろく音はもう聞こえる。三分ほどで、滝の全貌が眺められる地点に着いた。流れ落ちる水は大きな岩に遮られ、三方に分かれるのだが、真ん中の勢いが最も強く、岩を滑り落ちる間に、右手の流れを凌駕りようがしていく。水しぶきがここまで飛んでくる。左手の流れは水量は少ないものの、網のように広がっていき、苔むした岩の美しさを際立たせる。型破りなところが、また魅力なのである。

トンネルをくぐるとウトロの町が見えてきた。初めて訪れたのが二十八歳の時、二度目が三十三歳の時で、それから二十年

ほどの歳月が流れていた。駐車場に下り立った僕は、啞然あぜんとしてしまった。記憶の中のウトロと、すっかり変わってしまったからだ。

これは知床が世界遺産に指定され、国内外から観光客が押し寄せるようになったことと無関係ではない。僕の知っているウトロは、知床を旅する拠点の町だったとはいえ、どこか辺境らしい荒涼とした雰囲気ふんいきが漂っていた。

ところが、ウトロのシンボルだったオロンコ岩も、二階建ての立体駐車場やみやげ屋、世界遺産の案内所に半ば隠なれてしまいい、岩の全貌を拝むことができない。観光地化されてしまい、この町が持っていたすがすがしい空気が、失われていたのだから。

コンビニでお握りを買ひ、車内で食べた後、知床自然センターの駐車場まで行くことになった。友人の話では、カムイワツカの滝までの乗車券は、そこで買うことになるからということだった。行く手の道を見ると、ものすごい急坂が続いている。二十八歳の時、知床五湖まで自転車で行ったことを話すと、友人は信じられないという顔をした。若かったから、平気で無茶をやったのだった。たしかに、ウトロからの上り坂は、登山道にしか見えなかったから。

知床自然センターで駐車した。そこからはシャトルバスに乗り換えることになる。その前にコケモモのソフトクリームを食べようと、友人を誘った。以前、知床五湖で口にしたのを思い出したからだ。血のような色をしていて、ハスカップよりも酸

味があり、さわやかな香りがする。ちなみに、ハスカップで作る「よいとまけ」というお菓子は、とまこまい苦小牧の名産である。

どうしようか迷ったが、最初にカムイワツカ湯の滝まで、バスで行ってしまったことにした。時間が押していたし、席がすいていたので。発車した途端、アナウンスが入った。カムイワツカの滝は四段になっているが、落石のために一ノ滝までしか行けないというのだ。

青天の霹靂へきれきという奴だった。湯の川を四ノ滝まで登って、滝壺にたまった温泉に浸かる醍醐味は、もはや味わえないというのか。三十三歳の時、文学青年に誘われて、四ノ滝まで登ったときのことを思い出した。滑りやすく傾斜のきつい川底は、裸足はだしでは危険だし、サンダルでは脱げてしまう。上に行くほど水温

は上がっていき、滝を越えるときにはほとんど四つん這いだつた……。

滝登りのワイルド感や、湯に浸かる人々の交歓こうかんも、過去のものとなってしまうたわけか。カムイワツカの滝の魅力がなくなってしまうた。一ノ滝までだったら、奥多摩おくたまあたりの滝と大して変わらない。

知床五湖は後回しにして、終点のカムイワツカ湯の滝でバスを下りた。僕が初めて知床を訪れた一九九一年(平成三)当時、バスはさらに先の知床大橋まで延びており、しかも自家用車もバイクも自由に出入りしていた。ただ、二度目の一九九六年(平成八)には、落石の危険があるとして、知床大橋への通行は禁

止されてしまった。

さらに、現在では知床五湖より先は、シャトルバスへの乗車を求められているわけで、世界遺産指定による観光客の増加を見越して、安全最優先の措置が執とられた結果らしい。訪れているのは中高年と家族連ればかりで、かつてあふれるほどいた大学生の姿が、まばらにしか見られなかった。

カムイワツカの滝を登ることが、ほぼ不可能になったのが大きいのではないか。若者の冒険心をくすぐる湯の滝上流への立ち入りが禁止され、知床の大自然を肉体で感じる機会を奪われたことが、魅力をそいでしまったとしか思えない。

ユースホステルの激減も、一つには少子化の影響や相部屋を嫌う内向的傾向が大きいのだろうが、今の若者は学費のために

アルバイトに追われ、ブラックバイトで長い休みも取らせてもらえないという。知床で青春の思い出を作ること、今の大学生には贅沢ぜいたくになってしまっているようだ。

ショックだったのは、滝登りできなくなったことだけでは無い。知床大橋の方面も通行止のまま、カムイワツカ展望台までも行くことができなかったことだ。かつて歩いた道も立ち入り禁止となっていた。知床硫黄山の登山口も、その先にあるので、登山を希望する者は自己責任で申請してから、立ち入り禁止区域に入ることになる。

たしかに、空の色も滝の入口も、当時のままだったけれども、入れないところばかりで、記憶をたどることができない。世界遺産になったせいで、安全性が重視されるあまり、あれもだめ、

これもだめとなり、自然を外側から見られなくなったというわけだ。

万一事故が起きても、昔の人間だったら、運が悪かったと諦めるだけだったが、外国人観光客が増え、もし安全管理に問題があると、億単位の損害賠償を請求されたため、事前に行動に制限をかけてしまったのだろう。

やせこけた子ギツネが、物ほしげな顔をして、砂利道を通り過ぎていった。餌付けされたギツネは、車に近づくことで轢ひかされてしまう。ギツネに触るだけでも、エキノコックス症に感染する恐れがある。哀れな感じがしても、座視しているしかなかつた。

バスに乗って知床五湖に戻った。以前とは違って、ビデオと係員によるセミナーを受けてから、五湖を回るようになっていた。これも世界遺産になって、観光客が増えたことへの対策だろう。まず、熊と出会わないことを第一に考え、手を叩いたり、話をしながら進み、熊と出くわすような事態は避ける。食べ物は持ち込まず、やむを得ない場合は、匂いの漏れない袋に密閉する。

熊と出会ってしまったら、静かに退散し、騒いだり駆けたりして、熊を興奮させてはいけない。熊は威嚇いかくのために襲いかかり、すぐに引き下がるはずだが、続けて襲ってくる場合には、首の後ろの急所を手で押さえたり、熊撃退用のスプレーを使うなどの方法があるとのこと。

セミナーには十五分以上かかってしまった。一湖から五湖まで回るのに、徒歩で一時間半かかるというのに。最終バスの時間を考えると、あと五十分しか残っていない。車は知床五湖の駐車場にも止められたのだが、カムイワツカ湯の滝行きの切符は、知床自然センターでなければ買えなかった。どう考えても、時間に余裕がなければ、見て回れないようになっていたのだ。

一湖のみなら、半分程度の時間で歩けるのだが。それでも、五湖全部回れたかった。僕は諦めるというのが好きではない。これほど晴れ上がった天気には、知床で巡り会ったこともなかった。急いで写真や動画を撮って、一周しようということになった。熊を避けるために大声で話しながら。

屋外おくがいに出た。見上げると、上空は青く澄み渡って、雲はわず
かしか見えない。かつて二度訪れたわけだが、いずれも山は雲
に隠れ、湖水も木々の緑を映すばかりでよどんでいた。絵葉書
で目にする風景など、作り物じゃないかと思っていたのだが。
五湖の前に立つと……、あまりの美しさに声を失った。

水面に映った知床連山は、鏡を見るようにくつきり浮かび上
がっていた。湖岸の樹木も枝から葉の一枚まで映えている。雪
のない季節だが、ちょうど連山の上にかかった白い雲が雪のよ
うで、色彩から見ても完璧かんぺきな美しさだった。青い湖水に映った
像は、本物の空よりも青く、木々の輪郭を際立たせていた。し
かも、ほとんど沈黙の世界。カラスさえも周りに配慮して、大
人しく羽を休めていた。

五湖の眺めは素晴らしかった。それから四湖、三湖と左回り
で巡っていく。三湖のゆったりした湖面もよかったが、五湖の
完璧な美しさにはかなわなかった。木々の枝が伸びて、知床連
山の全貌を眺めることができなかったから。

友人が慌てだした。このままじゃ最終バスに間に合わない。
写真もそこそこに駆けだした。でも、鏡のような風景を撮影し
ないではいられない。大ききで言えば、二湖の方が奥行きもあ
るし、青い湖面に浮かぶ水草も鮮やかだ。五湖のこぢんまりと
した完璧さより、連山を背景にした水の広がり、魂の安らぎ
を感じるかもしれない。

シャッターを切ると、もう友人の姿はない。全速力で走るし
かないようだ。ようやく木橋が見えてきた。これも以前来たと

きにはなかった。熊が出てきても、橋の上からなら襲われる恐れはない。足腰に自信がない老人や、ハードスケジュールで連れ回される団体客には、手軽に一湖のみが眺められるわけだが、五湖の美しさに堪能たんのうしたかったら、やはりすべての湖を見て回る必要がある。

友人に追いついたときには、もう心臓がバクバクして限界に達していた。彼だけがバスに乗り、知床自然センターに戻って、知床五湖まで車で迎えに来てくれるというのだ。それならお任せすることしよう。ゆっくり動画でも撮ることにした。

時計を見ると、まだ三分ほど残っている。林の向こうにはバスの姿もあった。もしかすると間に合うかもしれない。ひた走りして乗り込むと、後ろの席に友人が座っていて、手を振っている。

る。その時、バスは発車した。

ウトロに戻ると、港の方へのつぼビルが建っていた。知床ノールホテルである。チェックインするとき、受付にいた若い男女を見て、モンゴル人と分かった。僕は本職が日本語教師だから、言葉の意味は分からなくても、音の響きから見当がついてしまうのだ。外国人が経営するホテルだとは聞いていたが。ふるさとのモンゴルに似た、北海道の自然に魅せられたのだから。

シンプルで無駄がない感じがしたが、簡素ながらも奇抜なデザインが施ほどこされている。白と青を基調とした現代アート風のデザインだ。まるで美術館にいるかのように感じた。とにかく

新しく清潔な気がした。スタッフを見ると、モンゴル人以外にベトナム人も採用しているようだ。モンゴルの馬頭琴ばとうきんの音楽がかかっている、レストランのテーブルには、岩塩で作られた口ウソク立てが並んでいる。

四階の部屋に入った。ちょうど日没の間である。もし最終バスに乗れなかったら、オホーツク海の夕陽を眺めることはできなかったろう。赤く大きく悲しげな光を放っている。この高さからだと、オロンコ岩の下を隠していた建物も目立たず、かつてのウトロの雰囲気を醸かもし出している。

海面近くに雲があるため、赤い太陽は雲の中に沈んでいく。知床でも夕陽が見られるのは、北西のウトロ側である。ゆつくりと日が落ち、夜が訪れると、ウトロの町も眠りについてしま

う。午後十時過ぎでも深夜のように、人影も乏しく車も走行しない。

時を止める湖面

東京では豪雨が降ってるらしい。北海道に来てから、初めて雲の多い朝を迎えた。知床五湖の鏡のような湖面が、木々や連山、青い空を映しているさまも、今日は拝めないのかもしれない。昨日は本当に運が良かったのだ。

モンゴル人が経営するホテルをチェックアウトして、レンタカーは南に向かって走り出した。どんどん雲が切れて、天気が良くなってきた。釧網本線に沿って進んでいく。川湯方面に向かって峠を越えたところで、遠くに岩肌がむき出して噴煙を上げる火山が見えてきた。硫黄山、アイヌ名アトサヌプリ（裸の山）である。なるほど、木も草も生えていない。裂けた山腹か

ら硫黄とガスを噴き出している。

摩周湖に向かう途中で右折して、硫黄山に寄ることにした。屈斜路カルデラは四万年前の巨大噴火の後、この硫黄山と摩周火山を生み出したという。屈斜路湖を含めて外輪山の内側は、かつての火口だったわけだ。規模としては阿蘇カルデラをしのごく日本最大である。

川湯温泉からバスで摩周湖に行く場合、硫黄山を経由するようになっているが、現在では本数が極端に減っている。それは摩周湖へ行くバスも同じで、摩周第三展望台で下りて、次のバスで第一展望台に移動なんているのも難しくなっている。

硫黄山の駐車場に友人は車を止めた。僕はこれで三度目になる。初めて来たのは、二十一歳の時だった。サークルの仲間にな

教えられて、移動車で販売していたソフトクリームを食べた。二度目は三十三歳の時で、開業したレストランで売っていた。今回もまた、乳脂肪分たっぷりのソフトクリームを食べた。

レストランの裏側では、崩れかけた山体のあちこちから、硫化水素が噴き出している。卵の腐った匂いが漂っている。噴き出すガスで、ところどころ霞かすみがかかっている。平野の真ん中に、何でこんな荒涼とした山が、と思ってしまうのだが、ここはカルデラの内側である。火口の底を歩いているというわけだ。地下深くには遠い未来に巨大噴火を起こすマグマが、今も眠っているのだ。辺りに響く轟音ごうおんは、魔物のいびきを聞いているようなものだ。

いよいよ摩周火山を登っていく。急カーブの整備された道路は、通る車もまばらである。火山の上から三分の一が吹き飛んで、そこに水がたまって摩周湖が生まれたという。山腹からいきなり湖水が見えると記憶していたから、登りきる直前からビデオ撮影を始めたのだが、結局、車からは湖水は見えなかった。駐車場に車を止めた。硫黄山や屈斜路湖が遠方に見渡せる。

ここからの眺めも素晴らしいのだが、木の階段を登っていくと、摩周湖が姿を現した。湖面ははるか下方にある。崖の上から見下ろすといった感じである。これで三度目なのだが、今回も雲一つ、霞もかかかっていない。水深が深く、流れ込む川も流れ出す川もないため、水面はほとんど波立たず、空の青をより深くした摩周ブルーである。絶壁に近い火口に、しがみつくように

高原植物や、白樺などが生えている。対岸に見える急峻な山が摩周岳、アイヌ語ではカムイヌプリ、神の山という意味である。大きく口を開けた火口は、ここからはわずかしか見えないが、茶色い無気味な喉のようである。

これほど深い青をたたえる湖は、日本にはほかにない。内側を覆う草木と、無機質なカムイヌプリのコントラスト、中央に浮かぶ小島、カムイツシュは緑で覆われているが、湖底からそびえる火山の頂^{いただき}である。この組み合わせが、摩周湖のブルーをさらに際立たせているのだ。

それにしても、この湖の印象はほとんど変わらない。ただ、ああと声を洩^もらしたきり、言葉を失ってしまうのだ。言葉を吸い込んでしまうのだろうか。言葉だけじゃない。時すら止めて

しまう力がある。二十一歳の時に覚えた感動を、初老の年になってもしてるのだから。時間なんでものは、古代インド人が考えたように、自我が抱く幻なのかもしれない。あの時の僕と今の僕は、内面ではほとんど変わっていない……。

人が周りにいなければ、鳥の声、虫の声さえ聞こえる沈黙が支配する。白樺に留まったカラスさえ、辺りの静寂に耳を傾けている。眺めていても飽きることがない。ハイビジョンの4K画面を見ているように、色そのものが快樂なのだから。

唯一の悩みは、飛んでくる虫だ。季節にもよるのだろうが、羽蟻の数が半端じゃない。払っても払っても飛んでくる。そして、動画を映している腕や顔に留まる。カメラが手ぶれを起すから、じっと耐えているしかない。

しばらくすると、薄雲が上空に現れた。湖面は幾分白んできて、感動させる青さは薄れる。摩周湖は霧や雲に閉ざされることが多く、くつきり湖面を仰ぐことができるのは運がいい。ただ、摩周ブルーを目にした人は婚期が遅れるというジンクスがある。三度訪れて三度ともくつきり湖面を拝めた自分は、やはり結婚とは縁がない人間だった。

第一展望台に移った。坂道をかかなり下ったので、さわやかな空気ではなく、少々暑くなつた。標高が低くなつたばかりでなく、売店には観光客があふれているから、騒がしくて湖面に漂う雰囲気が感じられない。カムイヌプリやカムイツシュを真横から見ることになるため、構図としても面白くない。第三展望

台に売店が作られなかったのは、偶然ではなく神の采配である。

このまま弟子屈てしかがに出してしまうのかと思つたら、友人は屈斜路湖も見たいと言ひ出した。「ただ、大きいだけの湖だよ」と僕は答えた。美幌峠からの眺めなら見たいが、車はどんどん下ると、東の方にハンドルを切つた。ナビを検索しながら進むと、和琴半島わごとが出てきた。

和琴半島にはかつて来たことがある。三十三歳のとき、今から二十年余り前のことである。屈斜路原野のユースゲストハウスに泊まり、釧路川でカヌー体験したあと、サイクリングでここに立ち寄り、腰掛けてボート遊びする人を眺めながら、旅日記をつけていたのだった。

でも、来てみたら良かった。大きな湖であるだけに、懐ふとこころの

深さが感じられる。半島の西側は砂浜が広がり、キャンプ場も設けられ、打ち寄せるさざ波に、夏の日射しが戯れている。子供たちが水辺に駆け寄る。カップルが並んで写真を撮る。女性的な優しさが広がっている。

半島と言っても、付け根の部分は数十メートルしかない。半島の中央にはかつての小火山、和琴山がそびえ、辺りは深い森となっている。湖岸に近い所には露天風呂もあって、海水パンツをはいた若者が入っている。湯の温度は四十度以上あり、結構熱く感じられる。

半島を横切る形で東側に出ると、湖の様子は一変する。摩周湖ほどではないが、深く青い色をして、湖岸にしぶきを上げる湖水は、たふたふ音を立てている。深い音はそれだけ多くの水

をたたえ、水底みなそこが知れぬことを意味している。おおらかでありながら、大きな力をはらんでいるのを見せつけられた。いかにも男性的な力を誇示している。和琴半島を境にして、これほど異なる様相を見せる屈斜路湖は、大きさに見合うだけの包容力もあるのだ。

釧路湿原は東から

あとは釧路湿原へ行くことになっていた。今回の旅の始めに、釧路市湿原展望台に寄ったわけだが、どうも本物を見た気がしない。これぞ釧路湿原といった光景を目にしなければ、再訪した気にはならないのだから。

今回は二回目で、前回は二十年余り前になる。あの時と同じアングルから見たい。僕はコッタロ湿原展望台に行こうと言った。そこは湿原の外れで、コッタロ川の上流、塘路湖よりも北にある。舗装されていない駐車場に車を止め、見上げるほどの急階段を登っていく。しかし、そこで終わりではなかった。さらに山道をぐんぐん上っていく。息切れしそうになって、よう

やく木に囲まれた展望台まで登りきった。

ここからは湿原を斜めに見ることになるので、視界はそれほど開けていない。ただし、コッタロ川の形作る、入り組んだ川の水底と、鮮やかな草原のコントラストがすぐ真下に見えるのだ。カメラで接写するように、湿原の細かい点までくつきりと。

高台まで登りきるのは、老人には無理である。見下ろす湿原は鮮明な色で迫ってくる。葦原の間に白く見える点、目を凝らすと動いている。カメラで拡大してみると、丹頂鶴の形、頭の赤い色まで認められた。躍動する湿原の生命を感じさせる点で、やはりコッタロ湿原展望台からの眺めは男性的だ。

「時間的に厳しいんじゃないかな」と友人は答えたが、どうし

でも細岡展望台が見たいと、僕は言い張った。あれを見なければ、最高の眺めを目にしたことにはならないのだから。砂利道を走っていくと、小石がはじき飛ばされ、車にぶつぶつかかり、土煙で車の後ろは見えなくなる。

「今、釧路湿原の中を走っているんだよ」と友人は言った。釧網本線の踏切を渡ると、ようやく舗装された道路に出たが、メインテナンスがされていないのか、ひび割れがひどく激しく揺れる。

細岡展望台は細岡駅ではなく、釧路湿原駅に近い。駐車場に車を止めて、やはり坂道を上っていく。コッタロの方とは違って、だからだ坂の砂利道である。遠望するためには、途中の階段は登らずに、坂を上りきる必要がある。

標高は余り高くないが、視野が開けている。釧路湿原をスキヤンするように、パノラマの眺望が見渡せるのだ。草に覆われた湿原をゆるやかに流れる釧路川、光を反射する水面、川岸で風になびく木々の枝まで見える。視野の届く限り、ほとんど人工の物は目に入らない。なだらかに伸びる地平線、雲間から下りる光線まで、湿原のあらゆる姿を遠望させてくれる。

広大な湿原の中に、すべての生命が宿っている。縄文時代が終わって、海面が遠くに去ってから、命の受け渡しを繰り返しながらも、この光景は大きく変わることなく続いている。悠久ゆうきゆうの時間を経ても変わらない自然のおおらかさに、女性的な優しさを感じてしまうのだ。

今回の北海道旅行は、大学時代および三十代前半の、まだ青春の最後を惜しんでいた頃に訪れた地を再訪し、懐かしい大地とかつての自分に再会する旅だった。三十年、二十年の月日の隔たりは大きく、特に知床の変化には失望させられた。すっかり風景が変わってしまい、記憶と噛み合わないことが多かった。その反面、摩周湖や釧路湿原の風景では、長い時を経ても変わらぬ自然、年齢を重ねても生き続ける自分を確かめることもできた。「不易流行ふえきりゆうこう」という言葉があるけれども、変わらぬものと変わりゆくもの、その二つを結びつけるのは、時間とともに生きる自分自身だった。

あとは釧路市内に入り、レンタカーに給油して車を返した。

荷物を背負って空港に着いた頃には日が暮れていた。シマフクロウと丹頂鶴の剝製が飾られ、ライトアップされていた。チェックインしたものの、東京が雷雨のために離陸が遅れていた。午後九時十分前、羽田行きの最終便は動き出した。すぐに釧路市街が下に見え、北海道は遠ざかっていった。

幸福駅に千社札？

北海道胆振いぶり東部地震が発生し、北海道を旅行する観光客が激減した。とりわけ、海外からの観光客が。そこで、地域振興のために、格安のチケットが提供されていた。オフシーズンなら、ホテル代を含めた旅行料金が、正規の半額だったりした。

わざわざ北海道に行くのに、一泊で帰ってきてしまうなど、初めは気が進まなかったのだが、二万円のホテル付きだと友人に言われた。行き先は帯広おびひろ。二人とも通過しただけで、よく知らない街だ。晩秋とはいっても、雪が降って路面も凍結するから、車の運転はしたくないとのこと。

この時期は、本土の人間にとっては真冬と同じである。太平

洋側で雪は少ないが、昼間でも氷点下だったりする。観光施設の多くは、十月までで閉鎖してしまう。旅行だけが決まって、訪問する先が決まらない。とりあえず、とち帯広空港に近い、旧広尾線ききゅうひろおせんの幸福駅を訪ねることにした。

十一月末の勤労感謝の日だった。快晴で雲一つない。十一時三十五分に、羽田空港を出発した。房総半島まで望めるほど、上空も晴れ上がっている。やがて窓から見えたのは、霞ヶ浦と北浦。東北上空は雲が多かったが、北海道が近づくると雲が晴れてきた。日高山脈を横切ると、平地でもうっすら雪化粧している。昨夜一センチほどの積雪があったのだ。

午後一時にとち帯広空港に着陸した。天候は晴、気温は零

度で真冬並みの寒さだ。厚手のセーターにジャケット、その上にコートを着て帽子をかぶると、着ぶくれして雪だるまみたいになったが、それでもまだ寒い。カイロを背中と靴の中に入れた。

これから向かうのは幸福駅。といっても、鉄道が走っているわけではない。かつて帯広と広尾の間には、広尾線というローカル線が通っていた。昭和の初めに開通し、日高本線と接続する計画だったが、さまに類似と広尾の間について線路は敷かれず、国鉄が民営化する直前に廃止されてしまった。一方の日高本線も、二〇一五年（平成二七）の台風で海岸の線路が流出し、類似とむかわ鶴川の間は、廃止される流れとなった。

さて、空港に到着後、あわただしく帯広駅行きのバスに乗った。旧広尾線の幸福駅までは十分弱。下車する人が多いと思っていたが、下りたのは友人と僕の二人。しかも、周囲には何もない。あるのは雪化粧した畑ばかり。気温は零度で、日差しは暖かだが、じっとしてただけで震える寒さだ。

あぜん啞然とした。自分はこれを見るために、北海道に来たというのか。彼方にオレンジ色の気動車が二両見える。あそこが幸福駅というわけか。晴れ上がった青空だけが救いだっただ。

とにかく空気が冷たい。寒いから余計に腹が減る。熱いラーメンでも食べたいな。思った途端に無性むしょうに食べたくなり、幸福駅がラーメン屋に見えてきた。これは廃線当時の建物ではない。老朽化した駅舎の代わりに、廃線後に再建された物だ。駅

のプレートだけは縁が錆びているから、かつての駅舎の物が取り付けられたのだろう。

駅舎の中は、愛国駅から幸福駅行きの巨大な切符が、千社札のように貼ってある。しかも、壁がすっかり隠れ、切符の上に乗切符が重なっている。二人の幸せを願うメッセージも書かれている。駅舎の前には鐘が吊してあり、カップルが二人で鳴らして、幸福駅行きの切符を貼る。見れば、ここに来ているのは、若い人ばかりだ。

オレンジ色の車両が二両、残された線路の上に設置されている。向かって左は、当時の車両のまま、中は風がない分暖かいが、何だか錆臭いような。ブルーの直角に向かい合った座席。ただ、厳寒の北海道らしく、車両の前後は壁で仕切られ、その

先にしかドアがない。寒気が直接客車に入らないようにするためだ。

もう一つの車両は、内部がすっかり新装され、しゃれた椅子とテーブルが並べられていた。壁には幸福駅で結婚したカップルの写真が並べられている。広尾線が廃止される前から、愛国（愛国駅）から幸福行き（幸福駅）が売っていたから、廃線後もここは若いカップルの聖地になっているのだ。

店舗の中で開いているのは、幸福駅の切符や小物などのお土産を売っているおばあさんの店だけ。食べ物売っている店はない。喫茶店などは冬眠の期間に入っていた。友人は弟と自身のために、幸福駅の切符を買っていた。今日の日付も入れてくれるとのこと。

ここで一時間半近く過ぎすのはきつかった。先ほどバスを降りた所は下車専用だというので、路線バスの停留所まで歩いていった。日が当たっていても、吹きさらしで待つのはつらい。しかも、まだ三時にもなっていないのに、日は西に傾いている。本土の東端にある道東では、東京より三十分も早い四時過ぎには、日が沈んでしまいうらしい。

バスに乗り、次に下りたのは旧愛国駅。ここにも広尾線のホームが残っている。ただ、交通記念館になっている愛国駅の建物は、新装されている。中には広尾線関連の写真が多数飾られている。広尾線廃線直前の様子、バイクで集まってる若者などを見ると、当時大学生だった僕らの世代が、夏休みに北海道を

長旅していたことを思い出した。あの頃の若者は明るくて希望を持っていたし、決して贅沢ぜいたくはしていなかったけれど、経済的にも余裕があったのだな。

愛国駅には蒸気機関車が保管されているはずだが。いやな予感。何とブルーのビニールシートで覆われている。雪が降る季節ながらも、錆防止のためなんだろうが、何とも味気ない。観光客は来ないものと、ハナから決めてかかっている。かつてのホームに立っても、その先を横切るように住宅が建ってしまった。実に興醒きようざめだ。

周辺は住宅街だったが、ラーメン屋はなかった。その代わりに、コンビニのセイコーマートを見つけた。バジル味の鶏の唐揚げと、味噌のカップラーメンを食べた。元気が出てきた。

もう薄暗くなってきた。帯広駅行きのバスに乗った。到着すると、すっかり暗くなっていった。溶けかけた雪は凍り、溶けていた場所には霜が降りていた。まだ秋だというのに、道東は氷点下の寒さになっている。

ホテルにチェックインした。疲れたのでちよつと仮眠した。夕食はついていないから、外に食べに行くことに。友人の話では、帯広駅の北側に繁華街があるとのこと。

まだ八時前だというのに、帯広駅の南口には人影がない。広い道路にイルミネーションが輝き、車の往来はあるというのに、真夜中のように人影がない。宇宙人が何かがやって来て、人間をすべて連れ去った後みたい。いくら厚着をしても、外

にいるだけで体が冷え切ってしまう。立ち話など誰もしていないし、歩きスマホも見かけない。とにかく、建物の中に入るか、帰宅することしか考えないだろう。

駅の北口に出たら、少し人影が見られるようになった。旭川のように大きな街ではあるが、やはり人の往来は少ない。飲み屋には結構人が集まっていたが。

結局、ラーメンと帯広名物の豚丼が食べられる店に入った。特旨塩ラーメンと豚丼の小を注文した。豚丼の豚肉は、甘くてしょっぱいタレをつけて焼いている。旨塩ラーメンは、出汁だしのよく出たこってり味で、具だくさんだけれども、かなり塩分が強い。普段はラーメンの汁を飲んでしまう自分も、残してしまつた。かなり喉が渇くと思つたからだ。

「これが北海道の味なんだよ」と友人は言う。東北出身者が中心に開拓したから、塩分が強い料理が多いのだろう。

店の中はストーブを焚いていたから暖かかったが、外は氷点下の寒さである。二十度の温度差はきつい。鼻水が出てきて、息が詰まりそうになった。いやがらせでも受けている感覚だ。「北海道に住んでいたから、こういうのは普通だと感じていたんだ」と友人は言った。それでも、歩き続けているうちに、ひどい寒さに慣れてきた。

ホテルに戻り、温泉に入ることにした。モール温泉といって、植物性の黒っぽい温泉。十勝川とかがわ温泉から引いてきているという。実際に入ってみると、色は黒と言うより茶に近かった。寒冷的な気候で植物が分解しきっておらず、草の香りがまだ残っている。

アルカリ性がかなり強く、肌がすべすべする。

余りの寒さに葡萄も冬眠？

北海道はかつて、縦横無尽じゆうおうむじんに線路が延びる大地だった。鉄道によって開拓が進められたといってもいい。国鉄時代に張り巡らされた路線も、JR発足前後に三分の二が廃止されてしまった。名寄本線なよろほんせんや羽幌線はぼろせん、天北線てんほくせんなど、百キロを超える長大な路線も姿を消した。ほどなく、留萌本線るもいほんせんの全線、日高本線の大半、根室本線や札沼線さつしやうせんの一部も姿を消すことだろう。

ただ、北海道に走っていたのは、国鉄だけではなかった。今は姿を消した私鉄、軽便鉄道けいべん、釧山鉄道や森林鉄道、馬車鉄道など、知る人も少ない路線があったのだ。それについては、このページをご覧くださいになるといい。

さて、その夜泊まったホテルも、廃線跡地に建てられていた。路線を走らせていたのは十勝鉄道。甜菜てんさいの輸送および通勤の足として活躍した。五つの路線、計六十数キロにも及ぶ線路が帯広市や上川郡清水町に伸びていた。

朝食を終えてチェックアウトすると、ホテルに近い、日産の敷地横に展示された十勝鉄道の蒸気機関車と客車を見た。屋根の下にあるので、ビニールシートはかけられていない。機関車も客車も小さいから、軽便鉄道だったことが分かる。それでも、客車を数両連結して、多くの工場労働者を運んでいた。家用車の普及とともに、一九五九年（昭和三四）に旅客輸送をやめ、二〇一二年（平成二四）には貨物輸送も廃止した。

帯広駅に向かった。早朝なのでまだ氷点下である。駅が高架となつた現在、廃止された広尾線と士幌線しのを偲ぶ物はない。階段を登ると、すでに釧路行の普通列車は来ていた。これから行く池田までは四五〇円だが、釧路までは特急で四千円以上する。鉄道料金が高い上に、本数が少ないから、列車の中はがらである。

北海道の鉄道の多くは架線がない。それが北の大地にしつくりくる。根室本線も電化されてないから、ホームに止まつてる気動車から、黒く燃えた煙が臭ってくる。スピードを上げるとき、エンジンの振動音が伝わってくる。

十勝川を渡っていた。駅を過ぎると、畑と平原が続く。北海道らしい風景である。当初は十勝川温泉に泊まる予定だったが、

帯広からかなり離れているのを実感した。

池田駅に着いた。北海道はアイヌ語由来の地名が多いが、池田は異なる。徳川慶喜よしのぶの息子が経営していた池田農園に、根室本線の駅ができたことによる。それが町名として採用されたという。

ところで、何で池田でなんか下りたのかと聞かれそうだ。「あれだろ」と友人が指さした。これから目指すワイン城だった。池田と言ったら、ワイン城ぐらいいしか見る物がない。向かう人影もわずかだった。

ワイン城は根室本線をまたいだ跨線橋こせんきょうの先、向かいの丘の上にある。すでに午前十一時を回っており、見学希望者を募る

アナウンスが入った。先着二十名と聞いていたから、もう間に合わないかとも思った。

受付をした時には、まだ十名も集まっていなかった。シーズンオフでがらがらだった。しかも、今日は土曜である。池田のワイン城は公営で、職員は公務員であるため、今日は工場が稼働していない。

地下のワイン樽を見学した。薄暗いがワインの香りがする。オーク製の樽に入れることで、樽から木の香りや成分がワインに溶け込む。寒冷な十勝地方のブドウは酸味が強いが、オークの樽に詰めることで、芳醇ほうじゆんな香りを持つようになる。木の樽に入れておくと、わずかずつであるが揮発きはつする。空気に触れると酸化するため、常にワインをつぎ足して、隙間がないように

するとのこと。

スパークリン・ワインに関しては、一般に二酸化炭素を注入する方法が取られるが、池田町では出来上がったワインに、酵母と砂糖を入れて瓶詰めして二次発酵させている。ただ、そのままでは濁っているので、瓶を逆さにして、瓶の口に澱おりが沈むようにする。十分に沈澱ちんでんしたところで、瓶の先端を凍らせる。機械で蓋ふたを開けると、凍った澱が口から飛び出す。減った分を足してから、ふたたびコルクで栓をして、出荷まで寝かせるという。

手間がかかるのはそれだけではない。十勝地方は寒冷的な気候であるため、ブドウは真冬の極寒ごくかんにやられてしまう。そこで、冬が近づくと、ブドウの木は全体を土の中に埋め。越冬させる

のだという。そのため、木の高さは人の背丈ほどしかない。これはかなりの重労働であるため、農家に嫌われており、現在では越冬できるブドウの品種も開発されている。見学の最後には、ワインの試飲があった。赤ワインをグラスに四分の一ほど注いでくれた。

昼食を取ることにした。ロースのステーキは高すぎるので、赤身のステーキを注文した。ちよつと固かった。ちなみに、サラダや鶏の唐揚げ、カレーなどや、アルコール以外の飲み物は自由に取れる。赤ワインを一杯だけ飲んだ。

レストランの展望台から、十勝平野を写真に収めた。この辺りはやや気温が高いのか、雪はすっかり消えている。ただ、暖

かいと思ったのも束の間、日が翳^{かげ}るとたちまち、肌を刺すような冷気に包まれる。実際には気温は二、三度なんだろう。

ワイン城をあとにした。帰りは下りだから、行きの半分ぐらいの速さで下りられる。友人が「バナナ饅頭まんじゅうを買いたい」と言い出した。バナナ饅頭？ それ何って思った。どうやら隠れた名産品であるらしい。池田駅前にあるというので、寄ってみることにした。

バナナ饅頭の製造元は米倉商店。お菓子屋さんかと思ったが、レストランになっていて。ドアを開けると、店内で販売していた。僕も試しに買ってみた。バナナの形をしたカステラで、中に白あんが入っている。バナナ自体は原材料に含まれず、バナナの香料を使用している。

これはかつては高価だったバナナの味を、庶民にも味わってもらうために作り出した菓子だった。最初に作られたのは一九〇五年（明治三八）、日露戦争の頃というから、百年以上の歴史があるわけだ。なかなかおいしいので、みやげ物にも最適である。

池田から気動車に乗った。まだ三時頃だというのに、もう日が傾いている。帯広に着いた頃には、すっかり夕方という感じになっていた。二時過ぎまで食べていたから、余りお腹が空いていない。

夕食は何にしようか迷った。帯広市民に人気があるインデアンカレーに行ってみようと、友人が提案した。市民に愛され、

中には鍋を持ち込んで、自宅で食べる人も多いとのこと。ご当地カレーでは、金沢の芋入りカレーが、きんときみみたいで粘りて、あまりおいしくなかった。

「それがトラウマになっているんでしょう？」と友人は言った。実際、店に入ってカツカレーを頼んでみた。僕は辛口にしてもらった。カツが二列に並んでいて、食べでがあった。カレーも香りが良く、コクも絶妙だった。野菜の甘みと肉のうま味、スパイスの辛さが口の中で溶け合う。東京では新宿カレーというのがあるが、それよりもおいしいかもしれない。

帯広空港行きのバスに乗った。乗車専用でほとんどの停留所は通過していく。すっかり日が暮れていたが、ライトに照らさ

れた畑は雪が積もっていた。幸福駅の辺りも通過する。イメージだけは鮮烈だったが、今では夢のようにしか感じられない。

うとうととして目が覚めると、もう帯広空港だった。気温はマインナス八度！昨夜よりも寒い。これほど低い温度は初体験だった。バスから降りて一分ほど外にいただけで、急激に生命エネルギーを奪われる感じがした。

午後九時十五分。定時より十分遅れて出発した。離陸すると、友人がアプリを使って、現在の飛行位置を教えてくれた。日高山脈を越えて、様子周辺で太平洋に出たようだ。夢のような北海道旅行は、瞬く間に終わった。

札幌人は夜遊びがお好き？

僕は寒いのが苦手だから、自分だけなら、絶対に二月の北海道なんかに行かない。ところが、前の年に起きた胆振東部地震で、減少した観光客を北海道に呼び戻そうと、クーポンによる格安航空券が売り出された。通常の半額でホテル付きのパック旅行に行かれるからと、友人に説得されて、極寒の北海道を目指すことになったというわけだ。

ところが、出発の前日、同じ胆振東部で震度6弱の揺れを観測し、一日目に宿泊する札幌でも震度5弱を記録した。JRや地下鉄は運転打ち切りとなり、真冬の駅で毛布をかぶって寝泊まりする人も出た。同程度の余震の恐れもあり、旅行を中止す

るかどうか迷った。ただ、飛行機は正常に動いており、キャンセル料を払う気もしなかったので、予定通り出発することになったのである。

仕事を終えてから待ち合わせ、午後八時過ぎのANAの飛行機で、羽田空港を離陸した。十和田湖上空を通過し、苫小牧とまこまい付近から北海道に入り、午後九時過ぎに新千歳空港に着陸。ただちに手稲ていね行きに乗車した。

札幌駅からは地下鉄で中島公園に移動した。道の脇に雪が積み上げられている。歩道はどこどころ凍結している。気温は一度だったが、室内の暖房が効いているから、外に出るとさすがしく感じるほどだ。

「札幌は涼しいね」

僕の言葉に地元出身の友人は笑っていた。ホテルにチェックインした後、夜の街を散歩することにした。雪も降らず、風も吹かない穏やかな週末だった。

すすき野の中央交差点に出た。すっかり除雪されているので、新宿の街を歩いているようだ。もう十二時近いというのに、金曜日ということもあって、多くの若者が街に繰り出していた。札幌の人は夜遊びが好きようだ。それは珍しく雪が降らない夜であり、札幌の中心街に住んでいるなら、終電の心配をする必要もないからだった。

札幌の名物の一つがラーメンだ。「札幌のラーメンって、バターとコーンが入ってるやつでしょ」と言われそうだが、それ

は東京の人間の思い込みで、札幌の本場のラーメンは味噌味で太麺。少し縮れていた方がスープにからんでおいしい。

ラーメン屋が軒を連ねているのが、これから向かうラーメン横丁である。すすき野に二箇所ある。元祖ラーメン横丁が中央区南五条西三丁目、新ラーメン横丁が中央区南四条西三丁目。ともにビルの中にある。新ラーメン横丁を見てから、店の数が多い元祖ラーメン横丁に向かった。ビル内の通路の両側がすべてラーメン屋になっている。

札幌はどこもラーメンがおいしいので、すすき野周辺に住むか通うのでなければ、ラーメン横丁まで出て来る人はまれで、ここを訪れるのは観光客が多いらしい。どの店も小さく、一度に十人ほどしか入れない。店先の写真を見ると、どれもおい

しそうで目移りしてしまう。

今回はひぐまという店に入った。友人は濃厚味噌味を食べた。僕は辛い物が好きなので、真っ赤な味噌にした。おいしいにはおいしいのだが、辛くすると味覚が麻痺して、微妙な違いが分からなくなる。チゲでも食べてる気分になった。友人のラーメンのスープを少し飲ませてもらった。濃厚な味噌に酒粕が入っているのか、少し甘みもあって、ほっとさせられる味である。札幌まで来て、どうして濃厚味噌にしなかったのか！

元祖ラーメン横丁を出て、元来た道を引き返す途中で、友人は十字路の向こうを指さした。

「あそこにすみれがあるんだ」

すみれというのは、札幌の味噌ラーメン屋で全国的に知られている。コンビニのセブンイレブンが、カップ麺の形で、すみれの味噌ラーメンと味噌ワントンスープを売り出し、横浜のラーメン博物館で長年人気を集めていたからである。

特徴としては、だしの効いた濃厚な味噌に、挽肉や玉ねぎのみじん切りを合わせ、ちぢれた太麺をラードで蓋した癖になる味である。二〇一八年（平成三〇）の暮れ、ラーメン博物館からの卒業を宣言し、ふたたび札幌でしか食べられない伝説の味になると思われた。

僕は今回の旅行で、すみれのすすき野店に行こうと思っていたのだが、横浜の桜木町駅近くに、新たに開店したのを知り、今回は見送るつもりでいたのだ。ところが、先ほど濃厚味噌味

を食べ損なったことで、俄然^{がぜん}、すみれに行きたくなった。

「明日、食べに行こうか」

「すすき野店は夜しかやってないよ」

明日の夜はもう札幌にいない、半ラーメンでもいいから食べようと言うと、さつき大盛を食べたから無理だとの答え。そこで、少しお腹がすくまで、量販店のドンキホーテで時間を潰す^{つぶ}ことになった。

すでに午前二時だというのに、サラリーマンも学生も大勢歩いている。向かった先のすすき野店は、ビルの二階にあった。黒と白を基調にした、広くてきれいな店である。友人はもう味噌は受け付けないと言って、塩味の半ラーメンにした。僕は味噌味の半ラーメンを注文した。おいしかったのだが、さすがに

味噌の連続で喉が渴いた。友人のスープを味見したら、塩ラーメンの方がおいしいではないか。さっぱりとしながらも、いいだしが出ている。

隣のラーメンがおいしいとは、これいかに？ ホテルに戻ったら、もう疲労の限界だった。ソファに座ったまま居眠りしてしまった。時計を見ると、午前三時半。シャワーも浴びずに着替えて寝た。

洞爺湖に幻の霊山現る

朝になった。窓の外を見ると一面銀世界だった。少したつと、雪は本降りになってきた。冬の北海道では、人々は傘を差さないらしい。雪は粉のようにさらさらで、払えばすぐに落ちてくれるし、傘を差していると、凍結した路面で転んでしまう。変わりやすい冬空を見て納得がいった。久しぶりに雪の降らない週末だったので、札幌人は夜遊びしていたのだと。

チェックアウトした後、中島公園に向かった。すでにやんでいたが、雪はたくさん積もっており、内地の子供ならさぞ喜ぶことだろう。北海道の人は今でも、本州や四国、九州を「内地」と呼ぶ。まるで南樺太みなみからふとや朝鮮、台湾と同様の「外地」だった

かのように。公園の中は日本庭園になっているが、中央の池には氷が張り、雪が積もって谷間のようになっている。誤って外国人が池にはまらないように、英語で注意書きがされている。西洋風の建物が見えてきた。豊平館ほうへい館と呼ばれ、明治天皇が宿泊されたホテルを移設した物で、結婚式場として使われていた。白と青を基調とした気品のある洋館で、北の開拓地にふさわしい。さらに進むと、こぐま座が見えてきた。札幌を中心に活動する人形劇の一座だ。友人は子供の頃に見たので、懐かしくなったそうだ。僕もその名前を聞いたような気がする。

大通公園に出た。雪祭りの雪像は翌日には崩され、雪の山と化していた。テレビ塔を写真に撮った。札幌から洞爺湖のホテルまでの無料バスが、午後一時に出ることになっている。鉄道で行けば片道数千円もかかるのに。登別までの送迎バスも、片道五百円だそうだ。札幌人はずいぶん恵まれていると感じた。車窓を見ると、再び小雪がちらつき出している。やはり、二月の札幌である。今度来るのはいつになるのだろう。ちなみに、札幌市は南区だけが異常に広い。南区だけで面積の半分を占めているということだ。

中山峠なかやまとうげまではひたすら山道を走っていく。白樺しろかばの枝に雪の塊かたが絡みついている。雪国に來たという風情ふうせいがある。道端の雪は車に切り取られ、地層のように横筋が見える。峠で小休止した。空は晴れていたが、雪がかなり積もっている。光が反射してまぶしい。バスを降りると、風が吹きつけてきて寒い。路面

は凍結していた。

中山峠を過ぎると、あとはひたすら坂道を下っていく。やがて左前方に洞爺湖の水面が見えてきた。空は晴れていたから、湖水も青く映えている。中島はカルデラ中央にできた火山だが、活動を停止して長い時間、林に覆い尽くされている。そこに三頭の鹿が放され、自然繁殖していった。ストレスを感じて、島を飛び出す鹿も少なくない。一部は力尽きて溺れてしまいうらいが。

午後三時半に洞爺湖畔のホテルに到着。フロントも、部屋も大浴場も、すべて洞爺湖に面した絶景である。荷物を置いて散歩することにした。道路には積雪があり、歩道も凍結している。

洞爺湖を見渡すと、東側の空は晴れているのに、西側の山並みには雪雲が迫っている。青い湖水と中島、対岸の冠雪した山々を写真に撮った。

火山科学館・洞爺湖ビジターセンターを目指していた。十五分ほどで着くだろうと友人は言うのだが、足下が滑りやすく、三十分経ってもたどり着かない。それに、写真を撮りながらだから、なおさらだった。さらに、雪まで降ってきた。一面銀世界となった。

湖岸を歩いていくと、白鳥の形をした足こぎボートが、シートをかけられ繫留けいりゅうされていた。見覚えがある。大学三年生の夏、一人でこのボートに乗ったのだ。これで中島まで渡るつも

りだったのだから、無知ほど恐ろしいものはない。二人乗りなのに一人で漕いでいたので、まっすぐ進むはずがない。ジグザグに中島近くまで来たとき、遊覧船が近づいてきた。パニツクに陥りながらも、かろうじて衝突は免れたのだが、大型船が立てた波で、白鳥のボートは左右に大きく揺さぶられたのだった。その後、僕は火山博物館に行ったのだが、現在は西側に移転していた。二千年に噴火口ができた金比羅山こんびらやまの方向に。新しい施設が見えてきたところで、スピーカーから音楽が流れてきた。いやな予感がした。火山博物館の受付に行くと、入場は四時半までと言われた。ただ、同じ建物のビクターセンターは、五時まで展示が見られるということだった。わざわざ雪道を歩いてきたというのに。

とはいえ、ビクターセンターの壁に、洞爺湖の歴史を説明するパネルが展示されていた。そもそも始まりは、約十一・四万年前の巨大カルデラ噴火で、火砕流が全方向に流れ出したことによる。太平洋側はもちろん、日本海側まで焼き尽くし、陥没した火口に水がたまった。中島は五万年前に噴き出た熔岩が固まったもの。

洞爺湖畔に有珠山ができたのは、二万年前のこと。かつては美しい成層火山だったが、一六六三年かんぶん（寛文三）の大噴火で山体崩壊を起こし、登別や白老しらおいも一メートルの堆積物で覆われた。海面は噴石や火山灰で、沖合まで陸地のように見えたという。

江戸時代の明和めいわや文政ぶんせいの噴火では、多数の住民が火砕流や火砕サージに巻き込まれて死亡した。江戸時代は、有珠山も樽前

山も、渡島半島の駒ヶ岳も大噴火している。現在、同等の噴火が発生した場合、当時とは比較にならない被害を受けるに違いない。

さて、火山科学館には入場できなかったが、まだ未練があった。明日も一度来るか？すでに雪はやんでいた。帰路はバスに乗るか悩んだが、待ち時間を考えて徒歩にした。ところが、下り坂が凍結していて尻餅をついてしまった。結構勢いよく転んだので、倒れたまま痛みを耐えていた。

歩けるから大事には至らなかったようだ。ホテルに戻り、先に夕食を取ることにした。正面の大ガラスには、闇に沈みつつある洞爺湖が映っていた。食事を済ましてから仮眠した。午後十一時に大浴場に向かった。温泉は硫酸系の成分と塩分、炭酸

などが含まれた透明な湯で、肌がすべすべになる。

翌朝、友人がカーテンを開けると、目を疑ってしまった。夢でも見ているのだろうか。洞爺湖の中島の左彼方に、幻のように巨大な成層火山が、雪をいただいで誇り高くそびえていた。高さは中島と同じくらいに見えるが、実際にははるか遠くであり、雲の多かった昨日は姿が見えず、晴れ上がった今朝、全容が映し出されたのだった。

羊蹄山ようていざんだった。蝦夷富士えぞふじとも呼ばれる。なるほど、形の美しさと言い、堂々とした偉容と言い、富士の名にふさわしかった。蝦夷地にも富士があったのか。利尻富士や渡島富士もあるが、羊蹄山こそ北海道随一の名山の名にふさわしい。

二十一歳の頃、僕は洞爺湖を訪れているが、その時は羊蹄山に気づいていたのだろうか。夏の終わりだったから、雪はかぶっていないかった。千年ほど噴火していないため、山頂まで緑に覆われている。火口は直径七百メートル、深さ二〇〇メートルに及び、山麓さんろくには湖もある。記憶をたどると、確かに羊蹄山はあった。異様に大きな緑の山が。火山としか思えない形をしながら、全山緑に覆われていたな。

朝食後、少し休んでからチェックアウトした。路面はカチカチに凍っている。歩いていくのは危険だ。十時のバスでビクターセンターの手前まで行った。洞爺湖の方を見ると、湖上に遊覧船の姿があった。冬期は中島の手前までしか行かないらしい。

火山科学館で受付を済ました。先に映画を見ることにした。有珠山の噴火に関するビデオで、特徴は火山性微動が地響きの形で、床から体感できるという点だった。小規模の物は三十五年前の施設にもあったが、迫力に大きな違いがあった、凄まじい音が館内に鳴り響き、重低音で体が震えた。

「有珠山は優しい山だ」というアナウンスが入った。噴火の前には必ず地震が始まり、これから噴火することを知らせてくれる。その間隔は二十年前後。二千年の噴火でも、数日前には噴火を予知して、一人の犠牲者も出さなかった。

確かにその点では優しいのだが、有珠山は江戸時代に爆発的な噴火を繰り返し、山体崩壊も引き起こしており、太平洋に達するほどの火砕流や火砕サージも噴出する。また、山頂以外に

山腹や麓ふもとから、新たな火口を作つて噴火する。恐ろしい側面を持つている点で、危険な火山であることには違いない。昭和
新山も有珠山の噴火活動で畑が隆起した物であり、二千年の噴
火でも国道脇に火口ができて、そのまま隆起して小山となり、
新たな道路を建設せざるを得なくなった。

十三分ほどの上映時間が終わった。映写室の周囲の展示を見
て回ったが、三十五年前のバーチャル噴火体験の施設が、火山
弾よけの屋根付きで再現されていた。これは一九七七年の噴火
を体験させるもので、いったんは収束したかに見えた噴火が、
土砂降りの降る中で再び始まり、火山雷を伴う噴煙とともに、
火山弾が降りそそぐさまが、床からの震動と、屋根に落ちる小
石や岩の音でリアルに表現されていた。翌年には泥流が発生し、

犠牲者を数名出してしまった。

バスの時間まで余裕があったので、二千年に噴火した金比羅
山の火口を見ようと、友人が言い出した。距離的にはそんなに
遠くない。ただ、雪がかなり積もっていたので、手前までしか
行けなかった。雪のない季節なら、正面の団地跡の裏手に回り、
かつての火口も覗くことができたのだが。洞爺湖の方を見ると、
羊蹄山の山腹に雲がかかっていた。幻のような偉容は、すでに
霞んできていた。

函館本線の謎

洞爺駅行きのバスに乗った。ぐんぐん坂道を下りていく。それにつれて、気温も上がっていく。駅には特急の三十分ほど前に着いた。お婆さんが構内で売ってる駅弁を買うことにした。九十歳近いのではないだろうか。その高齢でよく働いているなあと考えた。かに飯はやや味が濃かったが、ほぐした本物のカニ肉が満遍なく載っていた。漬物とミカンの缶詰も入っている。「北海道の駅弁には、なぜかミカンが入っているんだよ」と友人が言った。理由はよく分からない。たぶん、ミカンが採れない北海道では、南国の香りを伝える贅沢品だったのでないか。特急列車で一駅、長万部おしやまんべまで乗った。そこで下りて、函館

本線の各駅停車に乗り換える。跨線橋こせんきょうからは二両編成の気動車の前に、大勢の乗客が並んでいた。俱知安行きくつちやんの列車だった。近くにはスキー客で賑わうニセコがあるから、乗客の多くは外国人なのだろう。

なぜ特急を下りてしまったかつて？ それは今回の旅の目的の一つが、二十一歳の時に感動した車窓風景、北の大地を初めて鉄路で走った風景を、もう一度目にすることだったからだ。ただ今回は時間の関係で、当時とは反対のコースをたどることになるのだが。

手前に一両で止まっているのが、砂原支線さわら經由函館行きの気動車だった。がらがらで数人しか乗っていない。早朝と昼過ぎ、あとは夕方に数本走るだけ。全くのローカル線と化している。

これでは不便だから、乗るのは車を運転できない中高生や老人、鉄道マニアぐらいだろう。

かつて函館本線の特急では、札幌方面に向かう下りは、大沼駅から海岸線に沿って、駒ヶ岳の麓を迂回する砂原支線を通っていた。というのも、大沼公園駅を通る本線は勾配がきつく、馬力の弱かった国鉄時代の気動車では、迂回せざるを得なかったのである。函館に向かう上りは、当時から本線を通っていたので、砂原支線を経由しなかったのである。

森までは本線を走り、その先から砂原支線に入った。進行方向の左前方に見えるのが駒ヶ岳である。山頂が磐梯山ぼんだいさんみたいにならぬ二つに分かれ、稜線の広がり比べてやけに低い。標高一一三

一メートルしかない。かつては富士山のように美しい成層火山だったが、一六四〇年（寛永一七）の大噴火で山体崩壊を起こした。内浦湾に大津波を起こし、七百名余りの犠牲者を出したという。ただ、駒ヶ岳の噴火がなければ、大沼・小沼の景勝地も生まれなかったわけだが。

砂原支線は単線で駒ヶ岳を右に、太平洋を左に麓を大きく迂回していく。海岸線から離れると、ほとんど林の間を進む。線路の両脇の視界を遮るほどに、木々は大きく生長していた。いかに赤字ローカル線といった雰囲気である。しかも、かなりスピードが遅い。速度制限をかけているらしい。北海道新幹線が札幌まで延びたら、生き延びられるかどうか？

平成に入ってから、気動車の馬力も上がり、上り下りとも

に本線を走るようになった。砂原支線を通るのは、今やローカル列車と貨物のみである。初めて旅した時から三十五年、大学生の時見た風景を求めると自体、無理だったのかもしれない。

僕の記憶にある大パノラマは、いまだに現れてこない。車窓の右側に雪原が広がっている。どうやら大沼は凍結し、その上に雪が積もっているらしい。青空に映えた美しい沼にも、今日はお目にかかれないようだ。

大沼駅で砂原支線は本線と合流する。その先で線路は再び左右に分かれていた。実はその時まで、函館本線にはもう一つ支線があることを知らなかったのだ。函館方面は傾斜のきつい本線を下っていく。一方、札幌に向かう列車は、勾配がゆるくト

ンネルの多い藤代支線ふじしろを通っていた。かつて乗った特急「おおとり」も、そちらを走ったはずだ。七飯ななえから急カーブして原野を進むと現れた、北の大地の大パノラマは、どうやら藤代支線の車窓風景だったようだ。

ところが、北海道新幹線が開通し、多くの札幌行も勾配がきつい本線を通るようになった。渡島大野おしまおおのも新函館北斗しんはこだてほくとと改称され、大半の列車が止まるようになった。旅客列車で藤代支線を通るのは、一日数本の下りのみとなった。新幹線の駅がある本線を避けるのは、上り列車とのすれ違いのためである。今回乗った砂原支線經由函館行も本線を通り、函館に向かつてどんどん下っていった。

函館本線をめぐる謎については、これですべて解決したのだろうか。まだ気になるのは、北海道新幹線の存在である。新青森から新函館北斗までが開通し、津軽海峡線は暫定的な使命を終えた。ただ、新函館北斗駅は函館市街から離れ、不便だという声が聞かれる。新幹線は将来、札幌や旭川までの開通を目指しているから、函館市街に新幹線の駅を作るには、秋田新幹線のようにスイッチバックせざるを得ない。それに、函館市街に駅を作ると、札幌までの距離が遠くなり、競合する飛行機に対して不利なため、北斗市内に駅を作ることになったのだろう。

北海道新幹線は新函館北斗の先に、新八雲、長万部、倶知安、新小樽、札幌というコースで敷設される。函館本線と併行するルートが計画されており、札幌まで新幹線が開通すれば、函館

本線はJR北海道から分離され、第三セクターの路線となることだろう。

そこで浮かぶ疑問は、函館、札幌間を短距離で結ぶには、長万部から倶知安、小樽とたどるコースが最適なのに、現在、函館と札幌間の特急列車は、なぜ室蘭本線経由の遠回りになっているかという点である。その理由としては、長万部と小樽間は、急勾配と急カーブが続くため、高速で走行するのが容易ではないということ、室蘭本線経由だと、洞爺湖や登別温泉などの観光地を通り、室蘭、苫小牧などの人口密集地域や、新千歳空港に接続することが挙げられる。新幹線は多数のトンネルで最短距離を走ることで、急勾配や急カーブを克服し、飛行機との競争を有利に運ぼうとしているというわけだ。

五稜郭は和洋折衷

函館駅に着いた。もう夕方になってしまった。時間的には函館山に登ればいいのだが、それでは夕食の時間に間に合わない。そこで、かつて青函連絡船に接続していた線路がどうなっているか、確かめることにした。函館駅のホームに入る線路は、すべて駅構内で切れていたが、一本の線路のみがホームをよける形で延びていた。青函連絡船の摩周丸ましゅうまる停泊している方向にそのまま連絡船の船内まで延びて、貨物列車を線路に載せたまま、津軽海峡を航行していたわけだが。

今夜宿泊するホテルは湯の川温泉にある。函館市電に乗った。

五稜郭の近くを過ぎて、目的地までは三十分近くかかる。スピードが遅いからだが、路面電車から見える商店街とエンジンの響きに、昭和時代の面影を感じてしまう。

終点の一つ手前の湯の川温泉駅で降りた。ホテル万惣ばんそうは和風の高級ホテルで、窓から見えるのは街並みだが、夕食の豪華さには目を見張った。寿司コーナーは、板前の作る本場の握り寿司が並び、刺身もマグロのトロや、いくら、イカ、甘エビ、帆立などの新鮮な品が食べ放題である。絶品のビーフシチューに、天皇陛下も召し上がったという五島軒ごとうけんのカレー、鶏肉がとろけるまで煮込んだスープカレーなど。

部屋に入って仮眠する。夜の十一時に大浴場に行った。ナトリウムとカルシウムの塩化物温泉で、湯はやや熱めだった。湯

の川という地名は、アイヌ語の「ユペツ」の日本語訳である。松前藩主の松前高広たかひろが湯治したことが、湯の川温泉の始まりとされる。街中なので、屋外の風呂も屋根付きだった。

朝は曇っていたが、徐々に晴れ間が広がってきた。温泉に入ってから朝食を取った。部屋に戻り、チェックアウトして向かったのは、函館市の熱帯植物園である。実は温室に入って暖を取りたいわけでも、ジャングルの花やサボテンが見たいわけでもない。ここがどうして人気を博しているのかというと、スノーモンキーがいるからである。

スノーモンキーといえば、長野県北部の地獄谷が有名だ。猿は普通は熱帯に生息する。それが雪の降る地方で、寒さをしのぐために温泉に入っているのだから、外国人は仰天してしまうらしい。雪の積もった自然の岩場に、野生の猿が集まるといふわけではないが、飼っているニホンザルが、引き込まれた温泉に首まで浸かり、周囲に雪が積もっている点では同じである。

見ていると、温泉に浸かっていい気分なのは一部の猿で、全く入っていないものもある。気になったのは、体の毛が抜けて皮膚が剥むき出しになってしまった猿が、温泉に入っているということだ。

皮膚病なのかと思ったが、そうではないらしい。長い時間温泉に浸かっていると、体温が上がって冬毛が抜けてしまう。抜けてしまうと寒いから、温泉に浸かる。温泉に浸かるからさら

に毛が抜けるといった悪循環で、温泉好きの猿ほど、全身の毛の大半が抜けて、みっともない姿になってしまっている。である。

ぶらぶらして温泉ばかり浸かっている怠け者は、メスの猿にとっても魅力がないのだろう。人間に体毛がなくなっていくたのは、まさか温泉に入るようになったからではあるまいが、体毛が薄くなつては衣服を着なければ凍えてしまう。四六時中服を着るようになったので、体毛がほとんどなくなつてしまつたということか。

熱帯植物園の方は、巨大な温室に熱帯の巨木や珍しい花々、サボテンなどが展示してあつたが、わざわざ北の大地に来てまで見るものではない。展示されていた花の写真には感嘆したが。

友人はトラピスチヌ修道院に行つてみたいらしい。僕はキリスト教の尼さんには興味がないし、抑圧された空気が好きじゃないので、余り気が進まなかつた。それに男子禁制だろうから、中には入れないと思つたのだが。

函館空港行きのバスには、トラピスチヌ修道院の前まで行くのと、坂の下の入口を通過するのがある。どうやら、後者の方に乗つてしまったらしい。坂の下のずっと手前で下ろされた。しかも、坂を歩く人は少ないため、かなり積雪しており、重いリックサックを背負つて、長靴にも雪が入つてしまった。

身軽な友人は先に坂を上つていった。ようやく上りきつた僕を見て「修行だね」と言った。案の定、トラピスチヌ修道院は、前庭までしか入れないとのこと。バスが来るまで六分しかなか

った。

建物の中に入れていけないのに、修道院の庭で一時間過ぎすのでは、時間を持て余してしまふ。そこで写真を撮つて、あとでゆつくり鑑賞することにした。ここはフランスのシートー会系修道院。スレート葺きの屋根に朱のレンガ壁、そそり立つ尖塔が青空に映えている。庭園の木は球状、または四角に切りそろえられている。剣を下に向けた天使は、仁王像のように、よこしまな輩の侵入を防いでいるのだろう。

フランスの庭園と言えば、ヴェルサイユ宮殿が代表的だが、左右対称で直線、円形、三角、四角などで形作られ、自然を人工的に支配する発想が根底にある。同じヨーロッパでも、イギリスの庭園の方が、自然の景観を活かしており、日本人にとつ

ては居心地がいい。

日本の庭園も自然を模しているだけで、人工的に池や岩、庭木を配置し、時には幹と枝に縄をかけて、形を矯正したりもするが、根底にあるのは自然との共生で、作物的なものを隠そうとする。室内の装飾に関しても、違棚などではあえて左右対称を避けている。だから、フランスの庭園は、日本人にとって物珍しい対象であつても、心安らぐ空間にはなり得ないのだ。

腹ごしらえをした後、五稜郭に行つてみることにした。実は二十一歳の頃、一度訪れているから、当初の予定には入つていなかったが、箱館奉行所が再建されたというので、寄つてみたくなつたのだ。

手前にあるのは五稜郭タワーである。以前上ったことがあるので、今回はやめたのだが、高さが異なることから、建て替えられたことが分かる。旧タワーは四十五メートルで、五稜郭の星型が十分に確かめられなかった。新タワーは二倍の百七メートルあり、五稜郭の全貌を見下ろせるし、夜になれば星型にライトアップされている。

タワーの横を通り過ぎて、五稜郭の入口に立った。これは幕末に建てられた西洋式の城と言われている。オランダ語訳されたフランスの築城書をもとに設計された。なぜ星型に堀が掘られたかというと、五稜郭の側からは死角がないこと、突角部に砲台が据えられるという利点があるため。

ただ、西洋式なのは形だけであって、城の石垣を見ると、日本式の築城法のように、大きさの違う石を組み合わせている。堀に架けられた木橋も、日本式である。城郭こそ星型であるが、城を作ったのは日本人の職人だったからである。だから、五稜郭は和洋折衷せっちゆうの城と言った方が正確だろう。

かつてここを訪れたときには、芝生の植わった公園という印象しかなかった。二〇一〇年（平成二二）に、五稜郭の中央部に箱館奉行所が再建された。箱館戦争で旧幕府軍と新政府軍の戦場となり、焼失してしまっていたのである。奉行所の建物は赤瓦の屋根の上に、太鼓櫓たいこやぐらが飛び出したのが特徴で、土蔵など付属する建物の一部も復元されている。ただし、二十数棟あった物の一部であり、奉行所の建物自体も、表の部分を中心と

した三分の一程度が復元されたに過ぎない。玄関に入ると、右手に使者之間がある。そこから、襖を隔てて四之間、参之間、式の間、壹之間が続く。壹之間に御奉行様が座り、身分によっていづれの間まで入れるかが決まっていた。襖にどのような絵が描かれていたかは分からないので、襖は無地のままになっている。

「下々の者は、この建物には入れず、入口の前で土下座するしかなかったんだよ」と僕は友人に言った。

中庭の向こう側には当時の資料が展示されたり、映像が上映されていた。特に目を引いたのは、当時のトイレである。和式の便器のほか、男性用の小便器もあった。隣には水をためた壺があり、ひしゃくですくった水で手を洗い、洗った水は屋外に

流れ出るようになっていた。

あとは函館山に登ることにした。路面電車で十字街まで行った。この風景には記憶がある。大学三年生だった頃、函館山を下りる際にロープウェイ代をけちって、曲がりくねった真つ暗な車道を、命からがら駆け下りて、市電の通る街並みが見えたとき、いかにほっとしたことか。

十字街からは急坂を上っていく。ロープウェイの山麓駅は、人の姿もまばらだった。こんな明るい時間に、函館山を訪れる人も少ないのだろう。ロッカーに荷物を預けたら、すっかり身軽になった。

ロープウェイには中国人客が少し乗っていた。函館のくびれ

た街並みが眼下に広がっていく。函館山の影が、函館の街にかかっている。乗車時間は三分。山頂展望台駅に到着した。展望台に出ると、震え上がる寒風が頬を打った。ここに立つのは三回目だ。夜景が見られたのは最初の一回のみだった。

二回目にここを訪れたとき、僕は津軽海峡線に乗るため、夕闇に沈む前に山を下りざるを得なかった。沖ではイカ釣りの漁火がともしりだしていた。僕が津軽海峡を眺めた辺りは、今日は雪が積もっていて近づけない。

時間的に余裕がないのだから、夜景を見るのは諦め、昼下がりの函館の街を眺めることにした。眼下の教会や、市電の走る大通り、停泊した連絡船の摩周丸、海岸に打ち寄せる波、今朝止まっていた湯の川温泉、さらに遠方で雪をかぶる駒ヶ岳。

本物の夜景の代わりに、展望台で夜景のビデオを上映していた。函館の夜景が美しいのは、建物の輪郭が分かるほどの絶妙の高さにあること、くびれた地形で街並みが浮かび上がって見えること、さらに雪が積もっていると、建物の輪郭が映えることなどがあるという。

函館山を下りようとしていたら、続々と観光客が上ってきた。夜景を見るのはこれからだからだ。客の多くは中国人で、韓国人や東南アジア系も混じっている。今日は真冬の平日だから、普通の日本人はまだ働いている。下りのロープウェイは、僕と友人しか乗っていない。

山麓駅の周りには、教会が幾つか並んでいる。その中でひと

きわ目を引くのが、函館ハリストス正教会である。緑の屋根に白亜の壁を持つ塔は、中東のモスクに似た美しさがある。尖塔がシルエットとなって、夕陽に染まる大空に映えるさまは、息を呑むほどである。通りは残雪が凍っていたが、人が通れるほどの幅で除雪されていた。

ロシア正教の教会は、東京ではニコライ堂ぐらいしか知らない。ただビルの谷間に埋もれ、車の通りが激しいお茶の水の街では、緑色のドーム屋根もすすけて見える。やはり、ロシアのように冷たく澄んだ空気が、正教の教会を美しく見せるのだ。いよいよ、今回の旅も終わりが近づいてきた。バスで函館空港に戻る方が楽だったが、路面電車で湯の川まで行くことで、旅の余韻を味わうことにした。函館駅前を通過する。そう言え

ば、駅で写真を撮るのを忘れていたな。暗くなってネオンがともった駅に、車窓から別れを告げた。

五稜郭の前を過ぎ、昨夜下りた湯の川温泉の駅に来た。右方の通りを行った先に、宿泊したホテルがあったのだな。終点の湯の川に到着した。少し歩いた先に、湯倉神社前のバス停があった。函館空港行きのバスは遅れており、日が暮れて風の強い中で震えていた。

函館空港に到着した。おみやげを買い込んだ。夕食はラーメンを食べることにした。味噌にコーンとバター入りで、さつぱりした味だった。乗り込んだのは、行きと同じANAの飛行機。大型ではないが、機体は新しかった。乗客がすべて着席したので、予定の午後七時半にならないが発した。すぐに滑走路に

移動して離陸。背後に函館の街が見えた。

「函館の夜景だよ」と友人が言った。函館山からではなかったが、はるか上空からの眺めだった。今回の旅行では、出発前日に胆振東部で震度6弱の地震が発生し、札幌の地下鉄も終電まで止まっていた。出発できるか危ぶまれたが、旅行の間も余震はほとんどなかった。

タウシュベツは倒壊寸前？

秋と冬に訪れたばかりなのに、また北海道に行く計画を立てていた。理由は後ほど述べることにする。八月十五日の午前十一時三十五分、友人とともに羽田空港から飛び立った。上空は雲に覆われている。というのも、台風が日本海を進んでいたからだ。どうなることやら。行き先は昨年秋と同じく道東である。襟裳岬の手前から北海道上空に入る。

とかち帯広空港には午後一時十分に到着。レンタカーを借りて出発する。途中で幸福駅に寄った。昨秋来たばかりなのだが。あの日は澄み切った秋空に、うっすら雪化粧していた。張り詰めた空気が鮮烈だった。原野に気動車が二両とプラットホーム。

初めて見た時の印象は、記憶の中に刻み込まれている。

今回は夏だから観光客が多く、あの日は閉まっていた飲食店も開いている。唯一やっていたみやげ物屋の、八十過ぎのおばあさんの姿はなかった。その代わりに、七十ぐらいのおばあさんが二人で切り盛りしていた。あの年で働かなくてもか思ったが、どうしてしまったのだろう。

雨が降ってきたので、車の中に戻った。帯広駅前是通过した。目指す先は糠平である。これで旅の目的は分かっただろうか。国鉄が民営化される以前、北海道は網の目のように鉄道が走っていた。帯広から十勝三股までの七八・三キロを結んでいた士幌線は、石北本線の留辺蘂まで延長される予定だった。

音更川の上流にダムが建設されると、糠平湖が生まれ、タウ

シュベツ川にかかっていた橋梁が湖底に沈むことになった。ここでいうタウシュベツとは、旧士幌線のタウシュベツ川橋梁のことである。

この橋は湖の水位の上下によって、冬から初夏にかけて、湖水から姿を現す。その荒涼とした美しさに惹かれて、多くの観光客の目を引くようになった。しかも、長い月日による劣化で、倒壊の危機にさらされてきた。

なお、湖底に沈んだ部分は、代替のルートが敷設されたが、糠平く十勝三股間は過疎化の進行により、廃止の十年ほど前からバス代行となっていた。例年なら真夏になる頃には水没していたのだが、湖水の今年に限っては、夏休みのシーズンになっても、湖水が橋梁に達していなかった。

ちなみに、タウシュベツはアイヌ語で「樺かばの木が多い川」を意味する。その夜泊まったのは、士幌線が廃止された時点での終点糠平のホテルである。こちらはアイヌ語の「ノカ・ピラ」(形のある崖)が訛なまったものである。

台風が日本海に進んできていた。天気予報によると、温帯低気圧に変わって、北海道を西から東に横断するらしい。ただ、夜が明けてみると、空はまだ曇っている。

朝食を終えると、すぐにホテルを出て、温泉文化センターに車で移動した。集合は八時五十分。受付を済ますと、長靴に履き替えた。三台の車に分乗して、タウシュベツに向かった。小雨程度なので、この程度でもってくれたらとガイドが言ってい

る。明日のツアーは台風で中止とのこと。一日違いで危ないところだった。

途中から林道に入った。道の入口には柵があり、事前に借りてきた鍵で錠前を開ける。鍵は許可を受けた二十人に渡される。熊の生息域なので、徒歩で侵入するのは危険である。道の両脇に茂る藨ふきを食べに、熊がしばしば出没する。食べちらかした辺りは、藨が倒れたり、茶色く枯れている。

車が止まった。奇蹟きせき的に雨はやんでいた。そこからは糠平ダムに沈んだ、旧士幌線の線路跡を進んでいく。林の中に続く道には、流木が横たわっている。糠平湖が満水の時に押し流されてきたものだそうだ。ここを歩くことができるのも、濁水が続いているためである。

正面に壊れかけた橋が見えてきた。端の部分が崩れているが、かつては線路跡がまっすぐ対岸に延びていたのが分かる。時計を見ると、午前九時半である。十時十五分まで自由行動となった。糠平湖の水は少なく、湖水はまだはるか彼方にある。一面には草原が広がり、小川が流れ下っている。

タウシュベツ川橋梁は、夏から秋にかけて水中に沈み、冬になると湖水から顔を出す。そのため、コンクリートの表面ははがれて、砂利がむき出しになっている。風が吹くと小石が落ちてくるので、周囲に近づかないように、ロープが張られているが、無謀にも橋の上を歩いたり、下をくぐる者がいるらしい。

二〇〇三年（平成一五）の十勝沖地震で、タウシュベツ川橋

梁は被災した。湖底に沈んでいる間だったが、橋の側面が二ヶ所崩れ落ちた。もし水面に出ている間だったら、完全に倒壊していたことだろう。二〇一七年（平成二九）に湖水から現れると、橋の両端が崩落していたことから、タウシュベツがアーチの形を保ったまま見られるのは、今年か来年までで、限界が近いと言われている。

底に下りることにした。傘や枯れ枝を杖代わりにして。拳こぶし大の石が多数転がっている。干上がった湖底は草原で、赤い小さな花が咲いている。切り株が散在している。ダムができた時に切り倒されたものだ。例年なら梅雨明け頃から湖水が増え、水位が三十メートルも上がるのに。今年の今頃は台風の影響で、ほとんど水没していた。

湖に向かつて小川が流れている。足を滑らせないように進んでいく。対岸に渡り、タウシュベツの反対側を回って、元の高台に向かうことにした。その間、いろいろな角度からタウシュベツ川橋梁を撮影した。

今夜から台風が豪雨が降るので、タウシュベツの下に広がる草原も、泥水に浸かるかもしれない。橋の下を歩ける状態と、水が張っている状態とは、歩ける方が客の満足度が高いという。湖水が張っている場合は、高台から見下ろすだけなので、とどまる時間は三十分足らず。湖水が鏡のようになるのは、早朝のツアーで、それを過ぎると、風が吹いて橋の影が湖水に写ることはないという。

タウシュベツが今の形で見られるのは、今年か来年ぐらいまでかもしれない。アーチの一部が崩落すれば、現在のような美しさはなくなり、ブームは過ぎ去ってしまうだろう。崩れていくタウシュベツを、一部のマニアが撮り続けていくだろうが。もし補修するとすれば五億円かかる。コンクリートできれいに塗り固めたタウシュベツは、見る者を幻滅させるだけだろう。滅びゆく美しさに感嘆しているわけだから。湖水に沈み、また出てくれば側壁が崩れるだろうし、年の半分は水中に沈んでいるのに、補修する意味はない。崩れゆくままに任せるのが一番よいのだ。

タウシュベツ川橋梁を後にした。車に乗って第五音更橋の脇を過ぎる。幌加駅ほろかの跡を見ることになっている。土幌線は廃止

以前から、糠平と十勝三股間が、バスの代行運転になっていた。その間、運休状態が続いたことで、幌加駅のホームや線路は放置され、結果的に保存されることになったのである。

車を降りて林の中に入る。線路には手動のポイント（てんてつきき転轍機）も残っている。レバーを動かすことで、今でも切り替えすることができ。駅の周囲にも露が茂っていた。熊が食べた跡と糞も残っている。駅員の宿舎が土台だけ風雨にさらされている。かつては二百人以上の住民がいたというが。

「十勝三股駅をテレビで見たことがあるんですが。ここには列車が入ってくることはないとか、しゃべっていたんですが、今はどうなっているんですか」

「もう何も残っていないんですよ」と、ガイドが教えてくれた。

番組で中継された構内が、今でも記憶に残っている。幌加駅と似たような物だったが、信号など鉄道施設はそのまま、いつでも列車が入線できる状態だった。それもすべて撤去てつきよされたということか。

幌加駅の近くでは、「森のトロツコ・エコレール」が往復一キロ運行している。自転車の足こぎで進むミニトロツコで、往復二十分楽しめるというが、線路幅が肩より狭く、車体の大きさも遊園地の幼児向けなので、鉄道マニアの興味は引きそうにない。

十二時頃にツアーは終わった。温泉文化センターに戻って靴を履き替えた。駐車場からレンタカーに乗り、鉄道資料館に行くことにした。土幌線の糠平駅があったところである。

かつての繁栄ぶりは、館内の写真を見ると分かる。林業が衰えて人口が減少し、温泉郷を訪れる客も減った。立体模型では十勝三股がどれほど山奥で、士幌線が急勾配の山岳路線だったということも。下り坂を貨車が暴走するという事故も起きている。

館内では士幌線全線の車窓風景を、ビデオで見ることができ。ただし、廃線に先立ちバス代行となった糠平くろいしだい十勝三股間は除く。帯広き木野間を見て、途中を飛ばして黒石平くろいしだい糠平間を見た。雪の中ということもあるが、気動車の速度は乗用車より遅いのではないか。

鉄道資料館から幌加方面に、糠平湖岸までの往復一・三キロを、足こぎトロッコで走ることができる。「ひがし大雪高原鉄

道」である。こちらは線路幅はJRと同じなので、人力とはいえ、廃線跡を走る雰囲気がある。ただし、土日しかやっていないので、乗ろうにも乗れなかった。

嵐の迫る阿寒湖で

前年の秋に、根室本線の池田駅で降りたことがある。かつてはそこから石北本線の北見駅まで、JR池北線が結んでいた。廃止対象となり、ふるさと銀河線として、第三セクターで存続したものの、収支の悪化が続いて、ついに廃止された路線である。

日本一寒い地帯を走っていた鉄道で、足寄郡陸別には、駅構内の線路を残して、気動車の運転体験をさせたり、トロツコの試乗ができる施設がある。「ふるさと銀河線りくべつ鉄道」という。地名の陸別はアイヌ語の「リクンペツ」に由来し、「高い所にある川」を意味する。

子供の頃は鉄道マニアだったから、今でも廃線跡などには興味がある。時間の余裕もあったので、陸別に寄ることにした。鉄道施設を見る前に腹ごしらえ。陸別ラーメンの店に入った。味噌ラーメンと角煮丼を食べる。濃厚な味でおいしかった。

店を出ると、汽笛の音がした。ここでは希望者が、有料の研修つきで、気動車の運転体験ができるのだ。鉄道マニアだった子供の頃の思いが蘇^{よみがえ}ってきた。

陸別駅に入った。左手の端に機関車が見える。線路脇で手旗を振っている。ガタン、ゴトンと、重い車体がゆっくりと動き出す。汽笛を鳴らしながら、ホームに向かって近づいてくる。運転席に目をやると、中学生の少年とお母さんらしい人の顔が見えた。鉄道マニアの息子に付き合ってるのだろう。

正面には、楢円を描いた線路も見える。トロツコや自動車に乗車体験する催しもあるらしい。ただし、あいにく今日は体験の受付は行われていない。そこで、構内で前進、後進を繰り返す機関車を撮影していた。運転体験している少年の気持ちがあった。

あとは阿寒湖に向かうだけだった。午後四時半過ぎにホテルHにチェックイン。ここは二年前に泊まったホテルSのすぐそばだった。前回は湖畔に泊まりながら、翌朝すぐにオンネットーに行ってしまった、素通りしたようなものだった。湖岸が道路に接しているのは温泉街だけで、阿寒湖の全貌を知るには船に乗るしかない。ホテルの窓から覗くと、遊覧船が入港して、乗船

が始まっている。これから台風が来るから、明日は欠航になるかもしれない。すでに七分しかなかったが、走って行くことにした。

まりもの里棧橋から、何とか乗り込むことができた。二階には僕と友人の他は誰もいない。貸し切りみたいだと笑っていたら、次の乗船場、幸福の森棧橋で中国人観光客が大勢乗ってきた。

船が沖に出るにつれ、風がやや強くなってきた。波が少しある。船は滝口に向かっている。といっても、滝があるわけではない。細い川のような入江を進んでいく。湖岸まで森林が迫っており、人手の入らない原始の密林に入っていくような。僕はいりおもてじま西表島で浦内川うらうちかわをそこう遡行したときのことを思い出した。マング

ロープのように、木々の根が湖水に浸っているようだった。

次に向かったのは、チュウライ島だった。アイヌ語で「波が荒い島」を意味する。この小島には、マリモの水族館がある。小雨が降り出していた。上陸したところで、傘を貸してもらった。マリモの誕生から苔としての生長、波の影響で丸くなった後、中央に空洞ができて崩れるまで、実物とともに写真で説明されていた。水槽の底には直径二十センチほどのマリモもあり、それが球形としての限界らしかった。

建物の外の水槽にはニジマスがいた。空は分厚い雲に覆われ、雨のせいでもしくは霞んでいる。湖岸に打ち寄せる波が、マリモを形成していくさまが感じられた。大きな湖にこんな無人島があるのは不思議だった。

僕は幼い頃読んだ『ウイリアム・テル』の一場面を思い出した。ゲスラー暗殺を企てた、ウイリアム・テルが、縛られて湖の小島にある牢獄に、小舟に乗せられていく場面を。台風が近づきつつある「波が荒い島」は、スイス独立のきっかけを作った英雄の逸話を連想させるほど、船がなければ脱出不能の孤島だった。

チュウライ島を出てからは、後は帰港するだけだった。八十分の船旅は終わった。ホテルHに戻って夕食を取った。部屋に戻ってからフロントに行き、幸福の森棧橋近くにあるホテルTの温泉に、送迎バスで送ってもらった。ホテル間で契約が結ばれ、宿泊客は希望する温泉に入浴できるシステムになっていた

た。

ホテルTに到着した。この手の豪華なホテルにはなかなか泊まれない。建物の中には地下街のような店舗が並び、アイヌ神話のフクロウの神像や、異界を想起させる少女の木像が展示され、リラックスする音楽スペースなどもあった。

屋上の大浴場が素晴らしかった。規模は大きくないが、ブルーの光に照らされた浴槽は、かがり火を模した赤いライトに囲まれ、幻想的な雰囲気を出している。ツボ湯やジェットバスもあった。嵐が近づきつつあるため、時折小雨が吹きつけてくる。真っ暗な雲の間を縫って、異教の神々が駆け抜けていく気配がした。

ホテルHに送迎バスで送ってもらった。天気予報だと、台風

は温帯低気圧に変わって、北海道を東に横断するようだった。だとすると、明日は一日雨が降るのだろう。タウシュベツも豪雨で、橋の下は水没するかもしれない。ベッドの上に服のまま横たわると、そのまま寝てしまった。

沈みゆく野付半島

台風は日本海沿いを道北へ去っていった。窓の外は日が差し
ている。天気予報は外れたようだ。晴れてくると、阿寒湖の湖
水が青く映え、周囲の森も生き生きとしてきた。今日観光船に
乗ったら、さぞ眺めが美しかったことだろう。その代わり、時
間の余裕ができたので、友人の希望を入れて、野付半島に向か
うことにした。

実は二十年以上前、まだ父が生きていた頃に、一度行ったこ
とがある。突っ張り少年の前髪みたいな特殊な地形、ナナワラ、
トドワラといった樹木の墓場、荒涼とした草原が記憶に残って
いる。自分一人だったら、もう一度訪ねようなどという気には

ならない。それほど物寂しい印象しか残っていない。

朝食を終えて、午前十時にチェックアウト。レンタカーで中
標津方面に向かった。峠を越えてからは、まっすぐの道が牧場
の間に延びている。かつて僕が自転車で、中標津から野付半島
までサイクリングした話をした。若い頃は無茶をするものだ。

根室標津に出ると、正面に根室海峡が見えてきた。すっかり
曇ってしまった。道東の夏はやはり、曇や霧の日が多いのだ。
野付半島に入っていく。車で走っても大変な長距離を、自転車
でよく走ったものだと思う。

ナラワラが見えてきた。ミズナラの林は水面の近くが立ち枯
れし、奥はまだ緑の葉をつけている。二十数年前と比べると、

立ち枯れした木が後方に下がったようだ。枯れていた木は根を残すばかりになっていいのか。ここは滅びゆく林の姿を保ち、壮大な情趣じょうしゆを漂わせている。晴れ上がっていれば、水面も青く染まり、澄み切った大空と、枯れゆく哀しみのコントラストが際立ったろうに。

走っていると、海鳴りがかまびすしい。台風が日本海を通過していったからだろう。海が左右から迫り、海中道路のようになっている。何だか以前より浸食が進んでいるようだ。

野付半島のネイチャーセンターが見えてきた。二階建の巨大な建物は、二〇〇二年（平成一四）に竣工したので、前回訪れた一九九六年（平成八）には存在しなかった。道路脇に建っているのだが、当時は空き地になっていて、奥に平屋の食堂がや

っていた。トドワラ定食という海鮮料理を食べたのを覚えていた。

昼過ぎになっていたので、とりあえず、友人と食事をとることにした。僕はジンギスカン料理を食べた。食事を済まして、トドワラまで歩いて行くことにした。友人はトラクターけんいんが牽引する車に乗りたがっていたが。当時は馬車が走っていた気がする。

原生花園が広がっている。以前来たのは八月上旬だったから、花の種類が多かったが、今回目にしたのは、赤い花と朱の実をつけるハマナス、緑色のお盆状の萼がくに白い花を多数つけるエゾノシシウドぐらいだった。

深夜に台風が日本海を通過したということもあるが、本当に^{ひとけ}気が乏しかった。見渡す限りでも数人しかない。それはトドマツの変貌と関係がありそうだった。トドワラと書かれた看板に、簡易便所が二つだけ。友人と僕のほかには誰もいない。トラクターが牽引する車にも、観光客の姿はない。当時からさびれた感じがしたが、これほどではなかった。

木道を進んでいく。あのころはまだ、トドマツの朽ちた根が、天然のアートのように、砂地に無数転がっていた。動物の骨ならぬ枯れた大木の根が、トドマツの墓場といったさまを醸^{かも}し出していた。今では大半が朽ち果てて、台風の高波で海中に持ち去られていた。砂州の先端にはまだ青いトドマツもあつたはずだが、すでに立ち枯れた木が数本残るばかり。墓標すら姿を

消しつつあるのだ。

数年後には立ち枯れた木もすべてなくなり、打ち上げられ干からびた海藻と、生えたばかりの雑草が砂地に点在する、見る影もない姿に変わっていることだろう。

木道に戻っていき、二手に分かれた方に進む。下は海となっていた！ 砂浜がすっかり浸食されており、海鳥が遊ぶ姿もない。木道の先には痩せ細った砂州、その先に水色の栈橋が、当時の姿をとどめているが。何というさびれ方だろう。今でも尾岱沼^{おだいとろ}との間に航路があるようだが、不定期便で予約がなければ船は出ないとのこと。

三時を告げるメロディーが流れてきた。僕が野草の写真を撮

つていると、友人は先にネイチャーセンターの前で、初老の男性の話を聞いていた。

「四十年前に友達がここに来たんですよ。その時は僕は行かなかったんですが」

そこで自分も二十数年前に来たときは、トドワラには朽ちた根が多く転がり、トドマツの立木も林のように残っていたことを話した。

「今じゃ立ち枯れした木が数本ですからね。見る影もない姿ですよ」

男性はネイチャーセンターの二階で、トドワラの現状を知って仰天してしまっただけらしい。こんなに変わり果て、絶景が失われてしまったことに、時の流れを感じざるを得なかった。

「それに、野付半島自体が痩せ細ってしまったみたいですね」
沈降が進んで砂浜が削り取られ、トドワラは観光名所としての価値を失ってしまった。ナラワラが当時の姿をほぼ保っているのと対照的である。

「観光船もあると聞いたんだけど」

「人の姿がなくて、打ち捨てられたみたいですよ」

予約がなければ、運行されない船など、半ば廃止されたようなものだ。団体客でも来なければ、船は出港しないのだろう。

男性は根室半島の方を回ってきたらしい。相棒が仕事で来られないので、一人旅をしていると話していた。

「今夜は屈斜路くつしゃろに泊まるんですよ」と友人が答えた。一人旅だと無性に人と話がしたくなるという気持ちにはよく分かる。若い

頃の僕は、知らない人と話をするために、ユースホステルに泊まったものだから。

男性が去ったところで、ネイチャーセンターの二階に行き、展示された資料を見て啞然とした。一九七〇年頃のトドワラは、かつて僕が見たとき以上に、トドマツの根が密集するように転がっていた。それが今ではほとんど消えてしまった。野付半島は百二十年後には、地盤沈下で水没してしまうというのだ。

幕末の頃の野付半島の絵図を見ると、野付湾が海跡湖かいせきこのように、砂州で囲まれており、今は海となっている辺りも、徒歩で行き来できたことを知った。水没するというのも、あながち誇張ではない気がした。百二十年という時をさかのぼれば、祖母が生まれた頃になるが、地質学的にはごく短い時間である。死

んでいくのは、トドワラやナラワラだけではなく、野付半島そのものだったのだ。

ネイチャーセンターから先の道は、まだ行ったことがなかった。かつては中標津から自転車で来たので、とても余力がなかったのだ。レンタカーで走っていくと、ほどなく野付埼灯台のつけざきが見えてきた。舗装された道路はここまでである。草原の中に立つ灯台は無人で、あたりに人影はない。

青空が広がっていたら、灯台の白と、草の緑は映えて、地の果てに來た感動もあったのだろうが、海は荒れ気味だし、吹きつける風も強い。海拔はゼロに近い。津波でも襲ってきたら、全く逃げ場がない。もう訪れることはないのではないか。

西春別にしゅんべつ駅の鉄道記念館に向かった。もう午後五時である。三時に閉館となっていた。とはいえ、記念館の外にある施設は見学できた。廃止された標津しべつ線の線路と、西春別駅のホームが残されていた。戦後サハリンに輸出され、輸入されて標津線を走っていた機関車、貨車やラッセル車、自動車も保存されていた。

鉄道公園の中には、バス停もあったのだが、一日三便しか走っていないかった。公園の端では、子供盆おどり唄が流されていた。その後は、北海ほっかい盆唄ぼんうたを大人たちが踊る。その二曲を延々と流し続ける点が、北海道の盆踊りの特徴なのだという。

美幌峠から裏摩周へ

その夜は屈斜路湖畔のホテルに泊まった。窓の先には湖があるのだが、林に隠れて見えない。夕食はバイキングでおいしかったが、塩気が強いので、喉が非常に渴いた。北海道は東北出身の人が多く入植したので、味付けはどれも濃いめなのだ。

寝る前に温泉に入った。泉質は硫黄分が多く、緑がかって白濁していた。露天の方は、行灯あんどんで岬にともる灯台を、石庭で海を表していた。二つの小島には松やスキが生えていた。夜見ると、なかなか風情ふぜいがある。

明日はいよいよ最終日となる。台風が来ていたせいで、どうもすつきりしない。そもそも、夏の道東が涼しいのは、太平洋

から湿った風が吹き込んで、太陽光線を遮断するからなのだが。

夜が明けた。やはり曇っている。天気予報では、この先一週間もこんな天気が続くらしい。ゆっくり朝食を取り、十時過ぎにチェックアウトした。今日はまず、美幌峠びほろとうげに向かうことにした。ホテルからは十分足らずだ。ぐんぐん山道を上つていくと、霧が晴れて屈斜路湖の全貌が見えてきた。

数あるカルデラ湖の中で、これほど大きく、しかも、近くの山から見渡せる湖は少ない。中央の火山、中島の巨大さには驚かされる。湖にある島では、日本最大であるという。長らく火山活動がないため、鬱蒼とした森に覆われている。

青空は見られないが、雲が薄く光が漏れてくるため、湖の姿

がくっきりと見える。湖水も青みを帯びている。おおらかで包容力がある湖という気がする。平地で湖岸の前に立つときには感じたことがない屈斜路湖の魂を、ここ美幌峠からは感じることができる。

同じカルデラ湖であっても、阿寒湖や摩周湖とも違う、母性的な懐の大きさがある。平野の中に湖面が広がっているからだろうか。平野となっている辺りにも湖面が広がる、広大な湖だったというが。

和琴半島の温泉に入りたいと、友人が言った。そこには二年前も訪れたのだが。半島をはさんで、屈斜路湖の左側は波が静かで女性的、右側は波が深い音を立てて男性的だと書いている。露天風呂は和琴半島の付け根にある。

友人は温泉に足だけつけていた。お湯はかなり熱いとのこと。中には泡や苔が浮いている。僕は見ていただけにした。友人は浸した足を、ぐるぐる回している。海水パンツをはいた若者が、胸のあたりまでつかったが、すぐに出てしまった。

車を止めた所に戻っていった。以前のように、芋団子を食べることにした。左右に二軒店がある。どちらに入ったのだろうか。左側の店のような気がした。彼も同感らしい。愛想のいいおばさんがやっている店だった。

芋団子を油で揚げて、タレをつけてくれた。割り箸を差し、アルミ箔で巻いて紙袋に入れ、ビニール袋に詰めてくれた。

「タレがこぼれないように、気をつけてね」

おばさんはあの日も同じことを言っていた。外がカリカリで、

揚げたての芋団子はおいしかったのだが、案の定、タレをこぼしてワイシャツを汚してしまった。そこで、トイレでつまみ洗いした。

今回の旅では、タウシュベツを見るのが目的だった。事前に決めていたもう一つの目的地は、裏摩周である。第一や第三の展望台なら近いのだが、裏摩周に行くには、中標津方面に向かって直進し、五十キロも迂回しなければならぬ。昨日、野付半島に向かったときの道を進んでいく。途中で右折し、ぐんぐん山を上っていく。

第三展望台からの眺めが最も美しいし、よく知られている。かつて三回、摩周湖を訪れているのだが、いずれも晴れ上がり、

摩周ブルーの吸い寄せられる色に魅せられてきた、時間が停止したような、ただただ感嘆してしまう美しさを堪能していた。

裏摩周の展望台は、カムイヌプリ（摩周岳）の北側から、細長い湖を横から見る形になる。左手にカムイヌプリ、右手に第三展望台が見える位置である。ただし、雲が多いせいで山は中腹まで隠れ、第三展望台も雲の中である。ここばかりが雲一つなく、湖面とカムイツシュを見渡すことができる。

空は晴れていないが、弱い光が射してくるおかげで、湖面はほんのり青みがかって見える。日の光が雲間から差し、水面を白く輝かせている。その上をうつつすら靄もやがかかり、光の筋を面おもてに走らせている。金色こんじきの光によるモノカラーで、墨絵の摩周湖を描いたような、今までに見たことがないような、幻想的な姿

をしている。

ゆっくりと雲が下りてくる。カムイツシュは麓ふもとまで雲で覆われた。第三展望台からだしたら、湖面はほとんど見えないのではないか。カムイツシュも靄もやの中でかすんでいる。光が弱まるにつれ、焦点がとらえがたくなり、湖面も幻の中に消えつつある。その変化を多数の写真でとらえた。

これで終わりかと思ったが、友人はもう一箇所回ろうと言った。裏摩周に来た道を途中まで戻り、舗装されていない林道をひたすら下りていく。しばらく進むと、砂利じやりを敷いた大きな駐車場が見えてきた。神の子池である。

なぜそのような名前がついたかという、神の湖である摩周

湖の伏流水が湧き出ているからだという。水温は八度である。ここはガイドブックにも載るほど有名で、中国人の観光客も訪れている。

透明な池が早瀬となつて、小川を下つていく。これのどこが珍しいのかと思つたが、池の周りを進んでいくと分かつた。池の底が緑青ろくしょうの色をしており、低温で腐らない倒木が、オブジエのように交差して、水底に横たわっている。その間を、朱色の筋の入ったオシヨロコマが泳いでいる。

池の底が青いのは、摩周湖の火山灰によるものだという。沈んだ倒木の交差する角度が、見事なほど調和が取れている。天の配剤とでも言おうか。これほど美しいのは、池の底が緑青であるからばかりではないのだ。

二〇一六年（平成二八）に道東を襲つた台風で、根室本線の富良野ふらのの新得間しんとくが不通となり、そのまま廃止される危機にある。その年に神の子池では底の緑青の色が薄れ、観光地としての価値が失われるのではと危惧された。現在では嘘のように、美しさを取り戻しているのだが。

あとは釧路空港に向かうだけだった。レンタカーはひたすら、南に向かつて走っていく。

「今回は釧路湿原に寄る時間はないよ」と友人が言った。二年前、コッタロ湿原展望台や細岡展望台を訪れた時、さらには、僕一人で来た時のことなどを話した。

昼は芋団子だけだった。夕食は釧路市内でインデアンカレー

を食べた。帯広で初めて食べたのだが、道東ではよく知られた庶民の味で、鍋持参でルーだけ買いに来る人も多い。スパイシーでうま味が濃く、飽きることがない。

ガソリンスタンドで給油した後、無料の高速道路を経由して、釧路湿原に隣接する釧路空港に向かった。市街地からはかなり離れている。湿原を横切るため、交差する道路は少ない。

釧路空港に着いた。二年前のように、フクロウと丹頂鶴の模様が、ライトアップされていた。空港で家へのおみやげを買った。飛行機は八時十五分に離陸する予定だったが、荷物を預けた乗客が、急遽きゅうきょ降りたらしく、荷物を探すのに手間取り、二十五分遅れで飛び立った。雲が垂れ込め、小雨も降っていた

め、雲の上から釧路の町を見ることはできなかった、雲のすき間から見えたのは海だった。

工藤裕之の『追憶の鉄路』

子供の頃、僕も鉄道マニアだった。近隣の鉄道路線の駅名を覚えるのが趣味だった。坊さんがお経を暗誦あんしやうするのと同じで、リズムカルに声を出すと覚えられるものだ。一種の記憶術だったのだろうか。また、父の部屋には昭和三十年代の鉄道路線図の本があったから、まだ行ったことがない地を、駅名を見ながら空想したものだ。

北海道を初めて旅したのは、一九八四年（昭和五九）のことだった。青函トンネルが出来る以前で、上野から急行八甲田に乗り、十一時間もかかって青森駅に到着した。すぐに青函連絡船に乗るために、棧橋へと向かった。八甲田丸の船体の大きさ

には驚いた。埠頭ふとうまで線路が引かれていて、貨車は船内に呑み込まれていく。津軽海峡を渡る間は、日本海から流れ込む潮を眺めていたものだ。

函館に着くと、今はなき特急「おおとり」に乗り込んだ。函館発網走行きの高距離列車である。その頃はまだ、函館が北海道の玄関口だったのだ。北海道に来たとまず実感したのは、砂原支線に入ってからだった。大沼駅から沼の東側に沿って原野を進むと、遠方に駒ヶ岳を望むパノラマが出現した。今では特急はすべて大沼公園経由になってしまい、旅行者が目にすることはあまりなくなった。

これが初めての北海道旅行の始まりだった。貧乏学生だった僕は、十日余りの旅で道内を回ったのだが、廃止された路線で

唯一乗ったのが、網走から出ていた湧網線だった。あと、二回目の旅行で、名寄駅に停車していた深名線のディーゼルカーを見たぐらいかな。本当は廃止される前に、国鉄分割民営化で消え去った多くの路線に乗ってみたかったが、金銭的にそんな余裕はなかった。

国鉄分割民営化は、赤字路線の廃止と、労働組合潰しが目的だったようだ。北海道の路線の三分の二が廃止された結果を見れば、過疎地域が大半の北海道を、JR北海道だけで維持するのは無理だったのだ。線路を補修する費用もままならず、脱線事故が続いたり、豪雨による橋脚や路肩ろかたの流出で根室本線と日高本線の一部が、復旧を見込めぬまま廃止されることになった

のも、分割民営化が誤りだったことを示しているのではないか。海外では採算を無視しても、住民の足である地方路線が維持されたり、記念鉄道として廃止路線を復活させたりしている。日本でも廃止された美幸線の一部にトロッコを走らせるなどして、観光資源として活用していく動きがある。湧網線の廃線跡はサイクリングロードとなっていた。ただ目に映る景色は同じでも、線路をトロッコ走るディーゼルカーから得た印象とは異なる。それは何だろうか。

工藤裕之の『追憶の鉄路』を手にとって分かったのは、鉄道を維持する駅員や地域住民と、通りすがりの旅人との心の触れ合いがあったということだ。昭和時代の人情が、廃止された路線には残っていたのである。旅人を駅長室に招いたり、子供を

車掌室に入れたりするなどは、現在のような杓子しやくし定規じじょうぎな社会では考えられない。相手を喜ばせてあげたい、ただそれだけの思いで、実害のないルール違反が行われていたわけだ。サービスマスしてもらった方も、それを吹聴ふいちやうしないという礼儀は知っていた。

赤字路線の切り捨てとともに、昭和時代に残っていた人間味のある曖昧さ、非効率性、いい加減さが葬ほうむり去られてしまった。線路に糞便をまき散らしたり、便所が卒倒するほど臭かったり、ホーム下が吸い殻のゴミ捨て場だったりしたが、僕は若かった頃、昭和時代の混沌こんとんとした日本の方が好きだ。今でも悔くやまれるのは、一掃されてしまった赤字路線の多くに乗れなかったということ。そうした鉄道マニアにとって、工藤裕之の『追

憶の鉄路』は、かなわなかった北海道の赤字路線の旅を、空想のうちになげさせしてくれる写真集である。

参考文献

工藤裕之『追憶の鉄路』（北海道新聞社）

あとがき

大学生だった二十代の初めから、天命を知るようになった最近までの三十年間に、僕は四回北海道を訪れている。本州とは異なる自然は、当時の若者には異境の地のように感じられた。上野から青森まで、急行「八甲田」で十一時間もかかり、青函連絡船で津軽海峡を渡ったことも、未知の世界への旅という思いを強くした。成人してはじめてする長旅、それは見知らぬ世界をさすらう心の旅でもあった。

第二回までの旅は、僕自身の青春の記録であり、感じやすかった青くさい自分に、甘美な懐かしさまで覚えてしまう。三十を過ぎた第三回の旅は、過ぎ去った青春に後ろ髪を引かれなが

らも、人生を直視せざるを得なくなった分岐点に立つ自分を、思い起こさせてくれる。そして、五十過ぎの第四回の旅は、諦観ていかんという言葉が悟りとあきらめを意味するように、感傷を排したありのままの自分と向き合う機会を与えてくれた。

僕という人間が成人したばかりの頃からの半生が、ここには記録されていることになる。北海道の先住民であるアイヌ人に敬意を示して、人生の変遷を刻んだ異境の地での紀行を、『アイヌモシリへの旅』と名づけることにした。「アイヌモシリ」とは、「人間の土地」という意味である。ちなみに、『星の王子さま』を書いたサン＝テグジュペリには、同名の作品がある。

*

今回、第五回目の旅を増補した。若い頃に訪ねた大地を再訪し、かつての自分との接点を探る旅だった。四回目までの旅については、多少表記などを改めたほかは変えていない。巻末に工藤裕之の『追憶の鉄路』についての文章を添えた。かつての北海道には鉄道網が張り巡らされ、どれほど旅情あふれる大地であったか分かる写真集である。

*

第三版では、第六回目から第八回目までの旅を増補した。広尾線や士幌線の廃線跡や、存続が危ぶまれる砂原支線に乗車するなど、かつて鉄道マニアだった自分の思いを蘇らせる旅だった。冬の北海道の美しさに初めて触れ、冠雪した羊蹄山の雄大さに感嘆した。また、荒涼とした野付半島の風景が失われていくのを惜しむ一方、霧がたちこめていく摩周湖の幻想的光景に息を呑んだ。

なお、工藤裕之の『追憶の鉄路』は巻末に移した。

第一回目（一九八四年）

八月三十日 上野駅から急行「八甲田」青森行に乗車。

八月三十一日 青函連絡船で函館に渡り、室蘭本線経由で札幌へ。

同地に宿泊。

九月一日 北海道大学を訪ね、付属の植物園などを見学。上川に出て、層雲峡に宿泊。

九月二日 黒岳登頂。夜、網走に宿泊。

九月三日 サロマ湖畔を散策。

九月四日 屈斜路湖、硫黄山（アトサヌプリ）、摩周湖を訪れ、その夜、釧路に宿泊。

九月五日 納沙布岬に行き、その夜、石勝線経由の夜行列車札幌行に乘車。

九月六日 白老のポロト・コタン、登別のクマ牧場を訪ね、苫小牧市内のウトナイ湖畔に宿泊。

九月七日 洞爺湖で足こぎボートに乗る。大沼公園に宿泊。

九月八日 大沼公園をサイクリング。函館山に登り、夜、函館港から青函連絡船に乗る。

九月九日 急行「八甲田」で上野着。

第二回目（一九九一年）

八月一八日 急行「八甲田」で上野を出発。

八月一九日 青森着。津軽海峡線で函館へ。札幌に宿泊。

八月二〇日 網走経由で知床半島のウトロに宿泊。

八月二一日 知床五湖、知床大橋を訪れる。ウトロに宿泊。

八月二二日 旭川に出、宗谷本線に乗る。稚内で宿泊。

八月二三日 利尻島に渡る。島内をサイクリングする。鴛泊に宿泊。

八月二四日 礼文島に渡る。香深に宿泊。

八月二五日 「愛とロマンの八時間コース」を踏破。香深に宿泊。

八月二六日 稚内経由で塩狩温泉に宿泊。

八月二七日 小樽を散策。忍路環状列石を見る。札幌に宿泊。

八月二八日 函館山に登る。津軽海峡線で青森に出、急行「甲田」に乗る。

八月二九日 上野着。

第三回（一九九六年）

八月一日 羽田空港から女満別空港へ。知床半島ウトロに宿泊。
八月二日 カムイワツカの滝に登る。知床五湖、オシンコシンの滝を見る。ウトロに宿泊。

八月三日 知床岬まで航行。羅臼経由で中標津に宿泊。

八月四日 野付半島を巡る。中標津に宿泊。

八月五日 硫黄山（アトサヌプリ）、摩周湖を見る。弟子屈に宿泊。

八月六日 釧路川をカヌーで下る。屈斜路湖畔をサイクリング。弟子屈に宿泊。

八月七日 釧路湿原の塘路湖、コッタロ湿原、細岡展望台など

を巡る。釧路に宿泊。
八月八日 釧路市街を散策。釧路空港を発ち、羽田空港着。

第四回（二〇一四年）

九月三〇日 羽田空港から新千歳空港へ。旭川に宿泊。
十月一日 朱鞠内湖、智恵文を経て、トロッコ王国美深で旧美幸線を走り、歌登に宿泊。
十月二日 音威子府を経てサロベツ原野を歩く。ノシヤップ岬の夕陽を見て、稚内に宿泊。
十月三日 大沼の野鳥観察館を訪れた後、宗谷岬、浜頓別のク

ツチャロ湖、ベニヤ原生花園を見る。旭川経由で札幌に出て宿泊。

十月四日 札幌大通公園を散策した後、支笏湖畔で過ごす。新千歳空港を発ち、羽田空港着。

第五回（二〇一七年）

八月一六日 羽田空港発、釧路空港着。釧路市湿原展望台に寄り、阿寒湖畔に宿泊。

八月一七日 阿寒湖畔発、オンネトーに寄り、能取湖畔で昼食。サロマ湖のワッカ原生花園をサイクリング。網走湖畔に宿泊。

八月一日 小清水の原生花園、オシンコシンの滝、カムイワツカの滝、知床五湖を巡り、ウトロに宿泊。
八月十九日 硫黄山（アトサヌプリ）、摩周湖、屈斜路湖、釧路湿原のコッタロ湿原、細岡展望台を巡る。釧路空港を発ち、羽田空港着。

第六回（二〇一八年）

十一月二三日 羽田空港発、とちち帯広空港着。旧広尾線の幸福駅、愛国駅を見る。帯広泊。
十一月二四日 旧十勝鉄道の蒸気機関車と客車を見る。池田のワイン城見学。とちち帯広空港を発ち、羽田空港着。

第七回（二〇一九年）

二月二二日 羽田空港発、新千歳空港着。札幌市内のラーメン横丁を歩く。札幌泊。
二月二三日 積雪した中島公園を歩き、大通公園に出る。バスに乗り、中山峠で途中下車、洞爺湖畔に出る。雪が降る中、洞爺湖ビジターセンターを訪れる。洞爺湖温泉泊。

二月二十四日 冠雪した羊蹄山に感嘆する。火山科学館を見学した後、洞爺駅行きのバスに乗る。室蘭本線に乗り、長万部で砂原支線經由の函館行きに乗る。函館市内の湯の川温泉に宿泊。
二月二五日 熱帯植物園でスノーモンキーを見る。トラピスチ

又修道院、五稜郭内の箱館奉行所を見学した後、函館山に登る。
函館空港発、羽田空港着。

第八回（二〇一九年）

八月一日 羽田空港からとかち帯広空港へ。幸福駅を経て、糠平に宿泊。

八月六日 ツアーに参加し、旧士幌線タウシユベツ橋梁や、幌加駅跡などを見る。糠平駅跡にある鉄道資料館を見学した後、旧ふるさと銀河線の陸別駅を経て、阿寒湖に出る。夕方、嵐の迫る中で遊覧船に乗る。阿寒湖畔に宿泊。

八月七日 野付半島のナラワラ、トドワラを見て回る。旧標津線西春別駅跡に寄り、屈斜路湖畔に宿泊。

八月八日 美幌峠から屈斜路湖を見る。裏摩周に出て、霧の摩周湖を堪能した後、神の子池に。釧路空港を発ち、羽田空港着。

二〇二〇年十二月二十三日

高野敦志